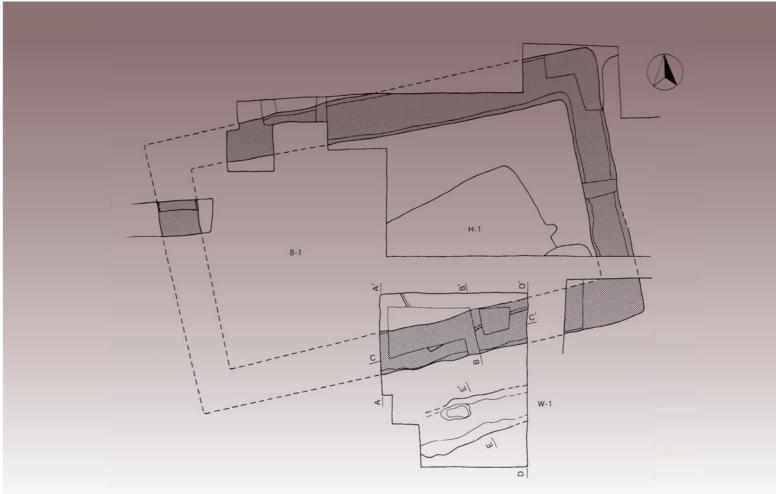
推定 上野国府

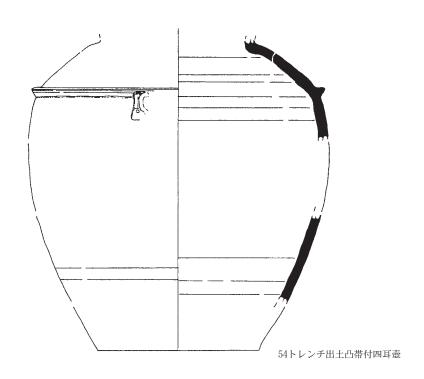
\sim 平成29年度調査報告 \sim





推定上野国府

~平成29年度調査報告~



2019.3

前橋市教育委員会

巻頭図版1



1 51トレンチ 6号掘立柱建物跡全景(東から)



3 51トレンチ 連続する溝跡 (東から)



2 6号掘立柱建物跡 P1土層堆積状態(南東から)



4 51トレンチ 連続する溝跡の断面(東から)

巻頭図版2



5 53トレンチ 基本土層 (トレンチ西・北壁)



6 54トレンチ 1号掘立柱建物跡 P₁土層(西から)



7 54トレンチ 1号掘立柱建物跡・ピット列全景(北から)



8 54トレンチ 2号・3号溝跡全景(北から)

はじめに

前橋市の総社・元総社地区周辺は、宝塔山古墳や蛇穴山古墳をはじめ山王廃寺、国 分僧寺、国分尼寺などの諸施設が立ち並ぶ古墳時代から律令期にかけての上野国の中 枢地域と考えられ、上野国府もその一角にあったと推定されています。

国府とは、律令制の下に各国ごとに置かれた国司の役所で、特に上野国府は平安時代の中頃に起きた平将門の乱の舞台となるなど、記録にも度々その名前が登場します。しかしながら、その中心施設の国庁の位置や、国府域の範囲など、その内容については、詳しいことが分かっていません。

この問題を解決し、後世にわたり保存・活用するための基礎的な資料を得るために 文化庁、群馬県教育委員会の指導を受けつつ、「上野国府等調査委員会」において毎 回検討を繰り返しながら、平成23年度から継続的な確認調査を行っております。平成 27年度で第1期の5ヵ年計画が終了となりましたが、さらなる調査が必要なことか ら、5ヵ年計画を延長し、確認調査を続ける運びとなりました。

今回、上梓する報告書は、その第2期の2ヵ年目の調査内容をまとめたものです。 平成29年度はこれまでの調査成果をふまえて、元総社小学校の校庭とその周辺で国府 に関連する遺構の確認調査を行ったほか、東山道駅路に関してさらに踏み込んだ調査 を行いました。発掘調査の結果、元総社小学校やその周辺で古代の掘立建物跡や溝跡 を新たに検出するという成果を挙げることができました。それは大々的な発見ではあ りませんが、例えるならば、国府の解明というゴールに向かって力走し、ペースを次 第に上げながら次の走者へと無事に襷を繋ぐような成果であったと考えています。

最後に、本事業の推進にあたり、国・県・市の関係各位のご理解とご協力に対して深く感謝する次第です。また、地元の元総社地区各自治会をはじめ土地所有者の皆さんからも惜しみない協力をいただくことができましたことを、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

平成31年3月

前橋市教育委員会

教育長 塩 﨑 政 江

例 言

- 1 本報告書は、上野国府等範囲内容確認調査計画に基づき、第2次5ヵ年の調査計画(平成28~32年度)の2 年次調査として、平成29年度に実施した発掘調査の報告書である。
- 2 遺跡は群馬県前橋市元総社町一丁目33番地11号ほかに所在する。
- 3 発掘調査は、上野国府等調査委員会の指導のもと前橋市教育委員会が実施した。調査の要項は以下のとおりである。
 - ①発 掘 調 査 期 間 平成29年6月1日~平成30年1月15日
 - ②整理・報告書作成期間 平成30年1月16日~平成30年3月31日
 - ③調査組織(平成29年度)

上野国府等調査委員会

(1) 委員会

委 員 長 松島榮治(元前橋市文化財調査委員)

副委員長 須田 勉 (元国士舘大学文学部教授)

- 委 員 林部 均(国立歴史民俗博物館教授)、梅澤重昭(元前橋市文化財調査委員)、井上唯雄 (前橋市文化財調査委員)、前沢和之(上野三碑世界記憶遺産登録推進協議会委員・館林市 史編さん専門委員)、右島和夫(群馬県文化財保護審議会委員・群馬県立歴史博物館館長)
- 事 小林 正 (群馬県教育委員会文化材保護課文化財活用係主幹)、新井 仁 (同埋蔵文化財 係指導主事)、橋本誠次 (前橋市教育委員会事務局教育次長)、田中隆夫 (同文化財保護課 長)、小島純一 (同文化財保護課専門員)
- 顧 問 塩﨑政江(前橋市教育委員会教育長)
- 指 導 文化庁文化財部記念物課文化財調査官、古澤勝幸(群馬県教育委員会文化課保護課長)
- (2) 調査部会
 - 幹 事 松田 猛(高崎市立多胡小学校長)、田中広明(公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業 団調査部主幹兼調査第二課長)、出浦 崇(伊勢崎市教育部文化財保護課係長代理)
- (3) 事務局(担当課 前橋市教育委員会文化財保護課)

課長(幹事) 田中隆夫 文化財保護課専門員 小島純一

係 長 神宮 聡

係 員 神宮 聡、並木史一、高山 剛、阿久澤智和、寺内勝彦、村越純子

- ④発掘·整理担当者 阿久澤智和·村越純子
- 4 本書の編集は阿久澤・村越が行った。
- 5 発掘調査・整理作業にかかわった方々は次のとおりである。 市村政夫、齋藤簡詳、髙澤京子、奈良啓子、峰岸あや子、森泉芳昭
- 6 発掘調査にあたり、都木幸夫氏、伊藤善一氏、宮下久仁子氏の土地を借用した。
- 7 金属製品の保存処理にあたっては(公益財団法人)群馬県埋蔵文化財調査事業団に協力いただいた。
- 8 テフラ分析については早田勉氏(火山灰考古学研究所)に協力いただいた。また、その報告についても同氏より玉稿をいただいた。
- 9 調査および報告書作成にあたっては下記の諸機関・諸氏の御教示・御指導・御協力があった。 群馬県教育委員会文化財保護課、(公益財団法人) 群馬県埋蔵文化財調査事業団、 前橋市役所都市計画部区画整理課、前橋市立元総社小学校

板垣泰一、出浦 崇、伊藤善一、井上唯雄、梅澤重昭、神谷佳明、小林 正、須田 勉、関 邦一、 早田 勉、都木周彌、田中広明、林部 均、前沢和之、松島榮治、松田 猛、右島和夫、宮下久仁子

10 発掘調査で出土した遺物は、前橋市教育委員会文化財保護課で保管されている。

凡例

- 1 挿図中に使用した北は、座標北である。
- 2 挿図に建設省国土地理院発行の1:200,000地形図(宇都宮、長野)、1:50,000地形図(前橋)を使用した。
- 3 本遺跡の略称は、29A147である。略称の後に枝番を付し、トレンチ番号を示した。
- 4 遺構及び遺構施設の略称は、次のとおりである。

H…古墳~平安時代の竪穴住居跡 B…建物跡(掘立柱建物等) W…溝跡 T…竪穴状遺構 A…道路遺構 I…井戸跡 D…土坑 P…ピット・柱穴・貯蔵穴 O…落ち込み

5 遺構・遺物の実測図の基本的な縮尺は次のとおりである。ただし、図の配置上、他の縮尺を使用したほうが 妥当な場合は、その他の縮尺を適宜使用した。

遺構 全体図・遺構配置図… 1 : 200 遺構断面図… 1 : 60 住居跡等… 1 : 60 (竈… 1 : 30) 溝… 1 : 60

遺物 1/3・1/4

- 6 計測値については、() は現存値、[] は復元値を表す。
- 7 遺物観察表については、以下のとおり記述した。
 - ①層位は遺構出土の場合、「床直」・「底面」:遺構底面より10cm未満の層位からの検出、「覆土」:床面より10cm以上の層位からの検出の2段階に分けた。
 - ②口径、器高の単位はcmである。現存値を()、復元値を[]で示した。
 - ③胎土は、細粒 (0.9mm以下)、中粒 (1.0~1.9mm)、粗粒 (2.0mm以上) とし、特徴的な鉱物が入る場合に鉱物名等を記載した。
 - ④焼成は、基本的に極良・良好・不良の三段階とした。ただし、須恵器について酸化焔焼成によるものは 「酸化焔」と記載した。
 - ⑤色調は土器外面で観察し、色名は『新版標準土色帳』(小山・竹原1967)によった。
- 8 遺構平面図の----は推定線を表し、 ----は堅緻面の範囲を表す。
- 9 スクリーントーンの使用は、次のとおりである。特別な場合は図版ごとに凡例を設けた。

遺構平面図 粘土分布… 炭光物分布… 焼土分布… 灰分布… 灰分布… 炭系器

遺構断面図 構築面… 灰分布… 医恋恋

陶器·磁器表面… 层深深 黑色処理…

10 主な火山降下物等の略称と年代は次のとおりである。

As-B (浅間B軽石:供給火山・浅間山、1108年)

Hr-FP (榛名二ッ岳伊香保テフラ:供給火山・榛名山、6世紀中葉)

Hr-FA (榛名二ッ岳渋川テフラ:供給火山・榛名山、6世紀初頭)

As-C (浅間 C 軽石:供給火山・浅間山、4世紀前半)

目 次

I	調査	査に至る経緯······	1
	(1)	調査のあらまし	1
	(2)	第1期5ヵ年の調査成果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	1
	(3)	平成28年度の成果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	1
	(4)	平成29年度調査・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	2
П	遺跡	亦の立地と環境······	3
	1	遺跡の立地・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	3
	2	歷史的環境	3
Ш	調査	査方法と経過·····	7
	1	調査方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	7
	2	調査経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	8
IV	基本	本層序····································	11
V	遺植		13
	1	各トレンチの概要	13
	2	各トレンチの検出遺構・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	18
VI	53 l	トレンチのテフラ分析について	63
VII	ま	と め······	69
	(1)	元総社小学校校庭の様相・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	69
	(2)	元総社小学校西方の様相・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	71
	(3)	推定東山道駅路国府ルートについて・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	75
	(4)	推定蒼海城本丸跡付近と宮鍋神社付近の様相・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	77
	(5)	おわりに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	80

挿図目次

Fig. 1 推定上野	国府位置図・・・・・・・・・・・・・・・・4	Fig.21	52トレンチ各遺構(2) ・・・・・・・・・・40
Fig. 2 周辺遺跡	6	Fig.22	53トレンチ各遺構 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・41
Fig.3 2m小グ	リッドの呼称 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・7	Fig.23	54トレンチ各遺構(1) ・・・・・・・・42
Fig. 4 グリッド	設定図とトレンチ位置図 ······10	Fig.24	54トレンチ各遺構(2)・・・・・・・・43
Fig. 5 基本層序	と各トレンチ土層柱状図 ・・・・・・・・・12	Fig.25	54トレンチ各遺構(3)44
Fig. 6 トレンチ:	全体図(1) • · · · · · · 15	Fig.26	54トレンチ各遺構(4) ・・・・・・・・45
Fig. 7 トレンチ:	全体図(2) ・・・・・・・16	Fig.27	遺物実測図 (50トレンチ①) ・・・・・・・・46
Fig. 8 トレンチ:	全体図(3) ・・・・・・・・・・・・・・・17	Fig.28	遺物実測図 (50トレンチ②) ・・・・・・47
_	チ各遺構(1)・・・・・・28	Fig.29	遺物実測図 (50トレンチ③)・・・・・・・48
	チ各遺構(2)・・・・・・29	Fig.30	遺物実測図 (51・52・54トレンチ①)49
	チ各遺構(3)30	Fig.31	遺物実測図 (54トレンチ②) ・・・・・・・50
_	チ各遺構(4)31	Fig.32	遺物実測図 (54トレンチ③) ・・・・・・51
_	チ各遺構(5) 32	Fig.33	遺物実測図 (54トレンチ④) ・・・・・・52
	チ各遺構(6) 33	Fig.34	遺物実測図 (54トレンチ⑤)53
	チ各遺構(7)・・・・・・・34	Fig.35	6号掘立柱建物跡模式図と
_	チ各遺構(8)35	1 1g.00	その他の掘立柱建物跡との位置70
_	チ各遺構(9)・・・・・・・36	Fig.36	元総社小学校西方の様相 · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·
	チ各遺構(1) 37	Fig.37	52・53トレンチと染谷川
_	チ各遺構(2)・・・・・・38	Fig.38	国庁推定地B案・C案周辺の様相 · · · · · · · · 78
	子各遺構(1) 39	1 1g.50	四月推定地口来。 (案
	表	目	X
	レンチの面積と調査目的 ··········· 7 図 ······ 8	Tab. 3 Tab. 4	井戸跡・土坑・ピット・落ち込み計測表 · · · · · · · 54 遺物観察表 · · · · · · 58
	レンチの面積と調査目的 ··········· 7 図 ······ 8	Tab. 3	井戸跡・土坑・ピット・落ち込み計測表 · · · · · · · 54 遺物観察表 · · · · · · 58
Tab. 2 調查経過 【巻頭図版】	レンチの面積と調査目的 ·········· 7 図 ······8	Tab. 3 Tab. 4	井戸跡・土坑・ピット・落ち込み計測表 · · · · · · 54 遺物観察表 · · · · · 58
Tab. 2 調查経過 【巻頭図版】	レンチの面積と調査目的 ··········· 7 図 ······ 8	Tab. 3 Tab. 4	井戸跡・土坑・ピット・落ち込み計測表54 遺物観察表58
Tab. 2 調査経過【巻頭図版】1 51トレンチ	レンチの面積と調査目的 ·········· 7 図 ······8	Tab. 3 Tab. 4	井戸跡・土坑・ピット・落ち込み計測表54 遺物観察表58 50トレンチ 9 号住居跡全景 (西から) 50トレンチ10号住居跡全景 (北から)
Tab. 2 調査経過 【巻頭図版】 1 51トレンチ 2 6号掘立柱建	レンチの面積と調査目的 · · · · · · 7 8 8	Tab. 3 Tab. 4 E 目 グ PL. 2-1	井戸跡・土坑・ピット・落ち込み計測表 · · · · · 54 遺物観察表 · · · · · 58 50トレンチ9号住居跡全景 (西から) 50トレンチ10号住居跡全景 (北から) 50トレンチ11号住居跡全景 (西から)
Tab. 2調査経過【巻頭図版】151トレンチ26号掘立柱建351トレンチ	レンチの面積と調査目的 · · · · · 7 図 · · · · · 8 6 号掘立柱建物跡全景 (東から) 物跡 P ₁ 土層堆積状態 (南東から)	Tab. 3 Tab. 4 Tab. 4 7 PL. 2-1	井戸跡・土坑・ピット・落ち込み計測表54 遺物観察表58 50トレンチ 9 号住居跡全景 (西から) 50トレンチ10号住居跡全景 (北から) 50トレンチ11号住居跡全景 (西から) 50トレンチ12号住居跡全景 (西から)
Tab. 2 調査経過 【巻頭図版】 1 51トレンチ 2 6号掘立柱建2 3 51トレンチ 4 51トレンチ	レンチの面積と調査目的 · · · · · · 7 図 · · · · · 8 6号掘立柱建物跡全景 (東から) 物跡 P ₁ 土層堆積状態 (南東から) 連続する溝跡 (東から)	Tab. 3 Tab. 4 7 PL. 2-1 2 3	井戸跡・土坑・ピット・落ち込み計測表 · · · · · · 54 遺物観察表 · · · · · 58
Tab. 2 調査経過 【巻頭図版】 1 51トレンチ 2 6号掘立柱建 3 51トレンチ 3 4 51トレンチ 3 5 53トレンチ 3	レンチの面積と調査目的 · · · · · 7 図 · · · · · 8 6号掘立柱建物跡全景 (東から) 物跡 P ₁ 土層堆積状態 (南東から) 連続する溝跡 (東から) 連続する溝跡の断面 (東から)	Tab. 3 Tab. 4 7 PL. 2-1 2 3 4	井戸跡・土坑・ピット・落ち込み計測表・・・・・54 遺物観察表・・・・・58 50トレンチ9号住居跡全景(西から) 50トレンチ10号住居跡全景(北から) 50トレンチ11号住居跡全景(西から) 50トレンチ12号住居跡全景(西から) 50トレンチ12号住居跡全景(西から) 50トレンチ13号住居跡全景(南から)
Tab. 2 調査経過 【巻頭図版】 1 51トレンチ 2 6号掘立柱建 3 51トレンチ 5 4 51トレンチ 5 5 53トレンチ 6 6 54トレンチ	レンチの面積と調査目的 · · · · · 7 図 · · · · · 8 6号掘立柱建物跡全景 (東から) 物跡 P ₁ 土層堆積状態 (南東から) 連続する溝跡 (東から) 連続する溝跡の断面 (東から) 基本土層 (トレンチ西・北壁)	Tab. 3 Tab. 4 7 PL. 2-1 2 3 4 5	井戸跡・土坑・ピット・落ち込み計測表54 遺物観察表
【巻頭図版】 1 51トレンチ 2 6号掘立柱建する 3 51トレンチ 4 51トレンチ 5 53トレンチ 6 54トレンチ 7 54トレンチ	レンチの面積と調査目的 · · · · · · 7 図 · · · · · · 8 6号掘立柱建物跡全景(東から) 物跡 P ₁ 土層堆積状態(南東から) 連続する溝跡(東から) 連続する溝跡の断面(東から) 基本土層(トレンチ西・北壁) 1号掘立柱建物跡 P ₁ 土層(西から)	Tab. 3 Tab. 4 「日ン PL. 2-1 2 3 4 5 6	井戸跡・土坑・ピット・落ち込み計測表 · · · · · · 54 遺物観察表 · · · · · · 58 50トレンチ9号住居跡全景 (西から) 50トレンチ10号住居跡全景 (北から) 50トレンチ11号住居跡全景 (西から) 50トレンチ12号住居跡全景 (西から) 50トレンチ12号住居跡焼土検出状態 (西から) 50トレンチ13号住居跡全景 (南から) 50トレンチ13号住居跡全景 (南から) 50トレンチ14号住居跡全景 (西から)
【巻頭図版】 1 51トレンチ 2 6号掘立柱建する 3 51トレンチ 4 51トレンチ 5 53トレンチ 6 54トレンチ 7 54トレンチ	レンチの面積と調査目的 · · · · · 7 図 · · · · · · 8	Tab. 3 Tab. 4 7 PL. 2-1 2 3 4 5 6 7	井戸跡・土坑・ピット・落ち込み計測表・・・・・54 遺物観察表・・・・・58 50トレンチ9号住居跡全景(西から) 50トレンチ10号住居跡全景(地から) 50トレンチ11号住居跡全景(西から) 50トレンチ12号住居跡全景(西から) 50トレンチ12号住居跡全景(西から) 50トレンチ13号住居跡全景(南から) 50トレンチ14号住居跡全景(南から) 50トレンチ14号住居跡全景(西から) 50トレンチ16号住居跡全景(西から)
【巻頭図版】 1 51トレンチ 2 6号掘立柱建する 3 51トレンチ 4 51トレンチ 5 53トレンチ 6 54トレンチ 7 54トレンチ	レンチの面積と調査目的 · · · · · 7 図 · · · · · · 8	Tab. 3 Tab. 4 7 PL. 2-1 2 3 4 5 6 7 PL. 3-1	井戸跡・土坑・ピット・落ち込み計測表 · · · · · 54 遺物観察表 · · · · 58 50トレンチ9号住居跡全景 (西から) 50トレンチ10号住居跡全景 (北から) 50トレンチ11号住居跡全景 (西から) 50トレンチ12号住居跡全景 (西から) 50トレンチ12号住居跡焼土検出状態 (西から) 50トレンチ13号住居跡全景 (南から) 50トレンチ14号住居跡全景 (西から) 50トレンチ15号住居跡全景 (西から) 50トレンチ15号住居跡全景 (西から) 50トレンチ16号住居跡全景 (西から) 50トレンチ17号住居跡全景 (西から)
Tab. 2 調査経過 【巻頭図版】 1 51トレンチ 2 6号掘立柱建 3 51トレンチ 3 4 51トレンチ 3 5 53トレンチ 3 6 54トレンチ 7 54トレンチ 8 54トレンチ	レンチの面積と調査目的 · · · · · 7 図 · · · · · · 8	Tab. 3 Tab. 4 7 PL. 2-1 2 3 4 5 6 7 PL. 3-1 2	井戸跡・土坑・ピット・落ち込み計測表・・・・・54 遺物観察表・・・・・58 50トレンチ9号住居跡全景(西から) 50トレンチ10号住居跡全景(地から) 50トレンチ11号住居跡全景(西から) 50トレンチ12号住居跡全景(西から) 50トレンチ12号住居跡全景(西から) 50トレンチ13号住居跡全景(南から) 50トレンチ14号住居跡全景(西から) 50トレンチ14号住居跡全景(西から) 50トレンチ15号住居跡全景(西から) 50トレンチ16号住居跡全景(西から) 50トレンチ17号住居跡全景(西から)
Tab. 2 調査経過 【巻頭図版】 1 51トレンチ 2 6号掘立柱建 3 51トレンチ 5 5 53トレンチ 6 6 54トレンチ 7 54トレンチ 8 54トレンチ 【遺構写真】 PL. 1-1 50トレ	レンチの面積と調査目的 · · · · · 7 図 · · · · · · 8	Tab. 3 Tab. 4 7 PL. 2-1 2 3 4 5 6 7 PL. 3-1 2 3	井戸跡・土坑・ピット・落ち込み計測表 54 遺物観察表 58 50トレンチ9号住居跡全景 (西から) 50トレンチ10号住居跡全景 (地から) 50トレンチ11号住居跡全景 (西から) 50トレンチ12号住居跡全景 (西から) 50トレンチ12号住居跡全景 (西から) 50トレンチ13号住居跡全景 (南から) 50トレンチ14号住居跡全景 (西から) 50トレンチ15号住居跡全景 (西から) 50トレンチ16号住居跡全景 (西から) 50トレンチ17号住居跡全景 (西から) 50トレンチ17号住居跡全景 (西から) 50トレンチ17号住居跡全景 (西から)
Tab. 2 調査経過 【巻頭図版】 1 51トレンチ 2 6号掘立柱建 3 51トレンチ 5 4 51トレンチ 5 5 53トレンチ 6 6 54トレンチ 7 54トレンチ 8 54トレンチ 【遺構写真】 PL. 1-1 50トレ 2 50トレ	レンチの面積と調査目的 · · · · · 7 図 · · · · · 8	Tab. 3 Tab. 4 7 PL. 2-1 2 3 4 5 6 7 PL. 3-1 2 3 4	井戸跡・土坑・ピット・落ち込み計測表・・・・・54 遺物観察表・・・・・58 50トレンチ9号住居跡全景(西から) 50トレンチ10号住居跡全景(地から) 50トレンチ11号住居跡全景(西から) 50トレンチ12号住居跡全景(西から) 50トレンチ12号住居跡全景(西から) 50トレンチ13号住居跡全景(南から) 50トレンチ13号住居跡全景(西から) 50トレンチ14号住居跡全景(西から) 50トレンチ15号住居跡全景(西から) 50トレンチ16号住居跡全景(西から) 50トレンチ17号住居跡全景(西から) 50トレンチ17号住居跡全景(西から) 50トレンチ19号・20号住居跡全景(西から) 50トレンチ19号・20号住居跡全景(西から)
Tab. 2 調査経過 【巻頭図版】 1 51トレンチ 2 6号掘立柱建 3 51トレンチ 5 5 53トレンチ 6 5 54トレンチ 7 54トレンチ 8 54トレンチ 【遺構写真】 PL. 1-1 50トレ 2 50トレ 3 50トレ	レンチの面積と調査目的・・・・・ 7 図・・・・・ 8	Tab. 3 Tab. 4 7 PL. 2-1 2 3 4 5 6 7 PL. 3-1 2 3 4 5	井戸跡・土坑・ピット・落ち込み計測表・・・・・54 遺物観察表・・・・・・58 50トレンチ9号住居跡全景(西から) 50トレンチ10号住居跡全景(西から) 50トレンチ11号住居跡全景(西から) 50トレンチ12号住居跡全景(西から) 50トレンチ13号住居跡全景(南から) 50トレンチ13号住居跡全景(西から) 50トレンチ14号住居跡全景(西から) 50トレンチ16号住居跡全景(西から) 50トレンチ16号住居跡全景(西から) 50トレンチ16号住居跡全景(西から) 50トレンチ17号住居跡全景(西から) 50トレンチ17号住居跡全景(西から) 50トレンチ19号・20号住居跡全景(西から) 50トレンチ19号・20号住居跡全景(西から) 50トレンチ1号溝跡全景(西から) 50トレンチ1号溝跡全景(西から)
Tab. 2 調査経過 【巻頭図版】 1 51トレンチ 2 6号掘立柱建 3 51トレンチ 5 51トレンチ 6 51トレンチ 7 54トレンチ 7 54トレンチ 8 54トレンチ 8 54トレンチ 8 54トレンチ 8 54トレンチ 9 1 遺構写真】 PL. 1-1 50トレ 9 4 50トレ 4 50トレ 9	レンチの面積と調査目的・・・・・ 7 図・・・・・ 8	Tab. 3 Tab. 4 7 PL. 2-1 2 3 4 5 6 7 PL. 3-1 2 3 4 5 6	井戸跡・土坑・ピット・落ち込み計測表・・・・・54 遺物観察表・・・・・ 58 50トレンチ9号住居跡全景(西から) 50トレンチ10号住居跡全景(地から) 50トレンチ11号住居跡全景(西から) 50トレンチ12号住居跡全景(西から) 50トレンチ12号住居跡全景(西から) 50トレンチ13号住居跡全景(西から) 50トレンチ14号住居跡全景(西から) 50トレンチ15号住居跡全景(西から) 50トレンチ15号住居跡全景(西から) 50トレンチ16号住居跡全景(西から) 50トレンチ17号住居跡全景(西から) 50トレンチ17号住居跡全景(西から) 50トレンチ17号住居跡全景(西から) 50トレンチ19号・20号住居跡全景(西から) 50トレンチ1号清跡全景(東から) 50トレンチ3号溝跡全景(西から) 50トレンチ3号溝跡全景(西から)

- 4 50トレンチ25号土坑全景 (西から) 5 53トレンチ土層堆積 (北壁)
- 5 50トレンチ26号土坑底部(西から)
- 6 50トレンチ調査区中央部土坑群(西から)
- 7 50トレンチ中世ピット集中(南から)
- 8 50トレンチ5号住居跡付近ピット群(北西から)
- PL.5-1 51トレンチ全景(東から)
 - 2 51トレンチ 6 号掘立柱建物跡 P₁検出状態(南から)
 - 3 51トレンチ6号掘立柱建物跡P2・P3全景(南東か ら)
 - 4 51トレンチ6号掘立柱建物跡P4全景(東から)
 - 5 51トレンチ1号住居跡全景(南から)
 - 6 51トレンチ1号井戸跡全景(南西から)
 - 7 51トレンチ1号土坑全景(南から)
- PL.6-1 51トレンチ5号溝跡全景(南西から)
 - 2 51トレンチ 6 号溝跡全景 (南西から)
 - 3 52トレンチ全景(北西から)
 - 4 52トレンチ1号・2号溝跡全景(北から)
 - 5 52トレンチ3号溝跡全景(南西から)
- PL.7-1 52トレンチ遺構完掘状態(北から)
 - 2 52トレンチピット列全景(東から)
 - 3 53トレンチ付近遠景(東から)
 - 4 53トレンチ全景(北から)

- 6 54トレンチ全景(東から)

(東から)

- PL.8-1 54トレンチ拡張部全景(北から)
 - 2 54トレンチ1号・2号住居跡全景(南から)
 - 3 54トレンチ3号・4号住居跡付近(東から)
 - 4 54トレンチ5号住居跡全景(北から)
 - 5 54トレンチ7号住居跡全景(北から)
 - 6 54トレンチ1号道路跡全景(北から)
- PL.9-1 54トレンチ1号掘立柱建物跡P₁全景(西から)
 - 2 54トレンチピット列P₃全景(南から)
 - 3 54トレンチ1号溝跡全景(北から)
 - 4 54トレンチ1号ピット礫検出状態(北から)
 - 5 54トレンチ8号・9号土坑全景(東から)
 - 6 54トレンチ8号・9号土坑土層(北東から)
 - 7 調査風景(52トレンチ)

【遺物写真】

- PL.10 50トレンチの出土遺物①
- PL.11 50トレンチの出土遺物②・54トレンチの出土遺物①
- PL.12 54トレンチの出土遺物②
- PL.13 54トレンチの出土遺物(3)

Ⅰ 調査に至る経緯

(1) 調査のあらまし

前橋市の元総社・総社地区は総社古墳群、山王廃寺、国分僧寺・尼寺などの古代の遺跡が多く存在し、上野国の中心地として栄えた地域である。上野国府についても、これまでの研究から元総社町付近に設置されたと考えられている。こうした歴史的な環境をふまえて、前橋市教育委員会では元総社・総社地区の歴史遺産を有機的に関連付けた保存・活用を目指し、平成18年度から22年度までの5年間山王廃寺の範囲内容確認調査を実施し、伽藍配置の解明等の成果を収めることができた。その一方で元総社町では元総社蒼海土地区画整理事業の進行にともない発掘調査を継続してきたが、存在が推定される上野国府に関連する遺構の確認は至っていなかった。区画整理事業が進行する中で上野国府の実態について早急な解明が急務となったことから、平成23年度から5ヵ年計画で上野国府等範囲内容確認調査が実施されるに至った。この平成27年度までの5ヵ年の発掘調査で、元総社小校庭遺跡の1号掘立柱建物跡の再検出のほか、枠形の掘込地業をもつ建物跡や、国府域の区画溝と考えられてきた古代の大溝のさらなる検出など、相応の成果を得ることはできたが目標である国庁の検出には至らなかった。そうしたことから、翌平成28年度から第2期5ヵ年計画を策定し、引き続いて上野国府の解明に向けて調査を継続することとなった。平成29年度調査は第2期5ヵ年計画の2年次調査となる。

(2) 第1期5ヵ年の調査成果

平成23年度から27年度までの第1期5ヵ年の調査成果の概要については、平成27年度調査報告書にまとめたとおりであるが、簡単ではあるが以下のとおりにまとめておく。

過去5年間の発掘調査で実施したものは大きく分けると①国庁推定地A案における確認調査、②国庁推定地C 案における確認調査、③総社神社、元総社小学校およびその周辺における確認調査の国庁もしくは国府関連遺構 の存在が期待される地点における調査と、④区画溝の確認調査、⑤東山道駅路国府ルートの確認調査の国府域も しくは国衙域を推定する上での重要な要素となり得る遺構の確認調査を実施した。

結果としては、①国庁推定地A案において国府関連遺構は確認できず、②国庁推定地C案付近では、元総社蒼海遺跡群の調査結果も含めて、掘込地業建物跡、掘立柱建物跡、区画溝が検出され、何かしらの官衙関連遺構が検出された。ただし、その性格については確証的な遺構や遺物がないので、未だ断定できない状況にある。③については、元総社小校庭遺跡の1号掘立柱建物跡を再検出できたほか、元総社小学校校庭で古代の区画溝2条、掘立柱建物跡1棟のほか、単独ではあるが新たに何らかの柱穴を検出することができた。元総社小学校の西側では、大溝(区画溝)1条、少なくとも1棟の掘立柱建物跡が検出され、その北側一帯の国庁推定地C案の官衙関連遺構とともに、上野国府の構造を考える上で重要な成果を得ることができた。その他に、国庁推定地C案付近から元総社小学校にかけての範囲で、白色で坏部の底部に孔が穿かれている土師質の高坏の出土例が確認できたことも特筆されるであろう。④区画溝の確認調査については、1年目の平成23年度調査から点々と区画溝が検出されており、平成25年度には閑泉樋遺跡などの区画溝も含めて、東西約650m、南北約850mの長方形に国府域(国衙域)を区画する溝の存在を想定したが、現状としてはそのような連続性をもって区画溝は検出されていない。むしろ、予想外な地点で検出される事例も見受けられ、現状では総括的な解釈は難しい。⑤東山道駅路国府ルートの確認調査についても、平成25年度にその名残の伝承をもつ道路の付近で調査したが、道路遺構の検出には至っていない。

(3) 平成28年度の成果

第2期5ヵ年計画の1年次調査である平成28年度調査では、①国庁推定地C案周辺における区画溝の範囲確認調査、②元総社小学校校庭およびその周辺における国府関連施設の確認調査のほか、③東山道駅路国府ルートの推定ルート上において道路遺構の有無の確認調査を実施した。①については、延伸推定地点において区画溝が検

出され、多少ではあるが区画溝が存在する範囲を把握することができた。②については、元総社小学校校庭において群馬大学が調査した2号掘立柱建物跡の柱穴の一部を検出したほか、新たに掘立柱建物跡が2棟検出された。新たに掘立柱建物跡(4号掘立柱建物跡)が検出されたことにより、1号掘立柱建物の東の棟持柱は4号掘立柱建物跡の柱穴の一部であることも判明した。③については、元総社地区内の鳥羽町において東山道駅路国府ルートの痕跡と推定される地割が残る地点で確認調査を実施したところ、側溝に浅間B軽石の純層が堆積する道路遺構が検出された。この遺構はその検出状態から、高崎市内から点々と検出されてきた東山道駅路国府ルートに関連する道路遺構と考えられ、関越自動車道の建設に伴い実施された鳥羽遺跡A地区の道路遺構とあわせて、東山道駅路国府ルートの関連遺構の検出地点の東端を、改めて前橋市内まで伸ばすことができた。

(4) 平成29年度調査

本年度は、昨年度までの調査結果を踏まえながら、下記の3つの視点に基づき範囲内容確認調査を実施し、上 野国府の解明に資することとした。

①元総社小学校校庭およびその西方における国府関連遺構の範囲確認(51・54トレンチ)

元総社小学校校庭においては、昭和37年の群馬大学の調査以来、掘立柱建物や区画溝の検出が相次いでいる。 また、平成25年度の調査は校庭西側から開始し、その後、校庭の外周を時計回りに進むように調査を進め、平成 28年度までで校庭北側まで進めることができた。平成29年度では、調査トレンチをさらに東へ進めて国府関連遺 構の検出に努めるのと同時に、これまでの調査で掘立柱建物跡が台地の先端部(現在の校庭北側)に集中するこ とが判明してきたことから、これらの掘立柱建物跡が集中する施設の東端を確認する必要が生じた。

また、総社神社や元総社小学校の西の「本村」と通称される地域では、平成26年度調査では東西方向の区画溝、27年度調査では正方位を意識して建てられた掘立柱建物跡が検出されており、調査可能な地点の選定が困難ではあるが、この付近における国府関連施設の有無を確認する調査も重要であることから、本年度も引き続き調査を実施することとした。

②推定東山道駅路国府ルートの確認(52、53トレンチ)

東山道駅路国府ルートに関する調査については、平成25・28年に実施している。これら調査の成果としては、 平成28年度に鳥羽町で古代の道路遺構が検出されたところである。

東山道駅路国府ルートの推定ルートに関しては、鳥羽町での検出地点も含めて、その名残と推定される地割が存在しており、その地割に沿って現況で発掘可能な地点が存在している。平成25年度はそのうちの2ヶ所 (24ab・25トレンチ) で調査を行ったが道路遺構は検出できなかった。本年度は平成25年度調査地点よりも西、染谷川よりも東の範囲で調査を実施した。2つのトレンチのうちの52トレンチは、24ab・25トレンチと同様に推定ルートの南側の台地上に位置しているが、53トレンチについては、それよりも一段低い場所(染谷川左岸の旧流路と推定される低地)に位置している。特に、53トレンチについては推定ルートに沿って流れる用水路(芦田堰)とその南の用水路に沿う土手(現道路。推定ルートとされている)の南側に位置し、この土手が古代から東山道駅路として存在していたのかを、土手の南側の土層堆積状態から調査するものである。

③国庁推定地B案における国府関連遺構の確認(50トレンチ)

この調査は元総社蒼海遺跡群 (124) の補完調査に相当する。国庁推定地のうち、国庁推定地B案の範囲内では主に区画整理に伴う発掘調査が行われているが、これまで発掘調査が実施されている範囲では国府関連遺構の検出には至っていない。しかしながら、表土の下位は総社砂層の地山(基本層序VI層)に達している状況から、大掛かりな土取りがかつて行われたことが考えられる。その中で推定蒼海城本丸は周辺よりも現況で地表面が高いことから、土取りが行われていないことと奈良・平安時代を中心とした古代の遺構の残存が想定できることから、土層堆積状態の確認とあわせて、中世面より下層の遺構の調査を目的として行ったものである。

Ⅱ 遺跡の位置と環境

1 遺跡の立地

前橋市は、利根川が赤城・榛名の両火山の裾合を経て関東平野を望むところに位置し、地形・地質の特徴から、北東部の赤城火山斜面、南西部の前橋台地利根川右岸、南部から南西部にかけての前橋台地の利根川左岸、東部の広瀬川低地帯という4つの地域に分けられる。

上野国府推定地のある元総社地区の立地する前橋台地は、約24,000年前の浅間山噴火によって引き起こされた火山泥流堆積物とそれを被覆するローム層(水成)から成り立っている。台地の東部は、広瀬川低地帯と直線的な崖で画されていて、台地の中央には現利根川が貫流している。現在の利根川の流路は中世以降のもので、旧利根川は現在の広瀬川流域と推定される。台地の西部には榛名山麓の相馬ヶ原扇状地が広がり、榛名山を源とする中小河川が利根川に向かって流下し、台地面を刻んで細長い微高地を作り上げている。総社・元総社付近の染谷川や牛池川は、微高地との比高3m~5mを測り、段丘崖上は高燥な台地で、桑畑を主とした畑地として利用されてきた。

元総社地区は、前橋市街地から利根川を隔てた対岸に位置している。地区内には上野国総社神社が鎮座するほか、主要地方道前橋・安中・富岡線が東西に、一般県道総社・石倉線が南北にそれぞれ走り、これらの幹線道路を中心にオフィスビルや大規模小売店が進出している。上野国府推定地はこれらの幹線道路から奥に入ったところに位置し、周囲には田畑も多くかつての養蚕農家が往年のたたずまいを残す静かで落ち着いた環境であったが、近年の区画整理事業の進捗にともない急速な住宅地化が進む地域である。

2 歷史的環境

本遺跡地周辺には、総社古墳群、山王廃寺、上野国分僧寺・尼寺のほか蒼海城跡など多くの遺跡が存在し、歴史的環境に優れている。また継続して実施されている埋蔵文化財発掘調査によって新しい知見が集積されている。

縄文時代 縄文時代の遺跡としては、上野国分僧寺・尼寺中間地域遺跡や元総社蒼海遺跡群で前期・中期の集落跡が検出されているほか、元総社蒼海遺跡群(9)で晩期の住居が検出されている。

弥生時代 弥生時代の遺跡は、水田・集落跡等が検出された日高遺跡のほか、新保遺跡や新保田中村前遺跡など、染谷川沿いで拠点的な集落が営まれるが、現在前橋市域となっている範囲では、後期住居跡が検出された上野国分僧寺・尼寺中間地域や桜ヶ丘遺跡、下東西遺跡等に散見するだけで少ない。

古墳時代から奈良・平安時代 古墳時代の集落については4世紀代と6世紀代を中心に展開しており、大屋敷遺跡や元総社蒼海遺跡群で集落が確認されている。元総社蒼海遺跡群では、牛池川沿いの低地で古墳時代の水田も確認されているほか、墓域や祭祀跡も確認されており、同時代の集落・生産域・墓域がそれぞれ展開していたことがうかがえる。

これらの集落を支配した豪族のものと考えられる古墳として、総社古墳群が挙げられる。総社古墳群を構成する主な古墳としては、推定される築造年代の古い順から、大型の前方後円墳である遠見山古墳、川原石を用いた積石塚で、上野国地域でも導入期の横穴式石室をもつ王山古墳、前方部と後円部にそれぞれ横穴式石室が築造されている前方後円墳の総社二子山古墳、横穴式石室と家形石棺をもつ方墳の愛宕山古墳、上野国地域における古墳の終末期に位置づけられている方墳の宝塔山古墳と蛇穴山古墳が存在する。

また、宝塔山古墳の南西約500mには山王廃寺が存在する。山王廃寺については、平成18年度からの5ヵ年計画で実施した範囲内容確認調査の結果、約80m四方を回廊で囲み、講堂・金堂・塔が法起寺様式の伽藍配置であ

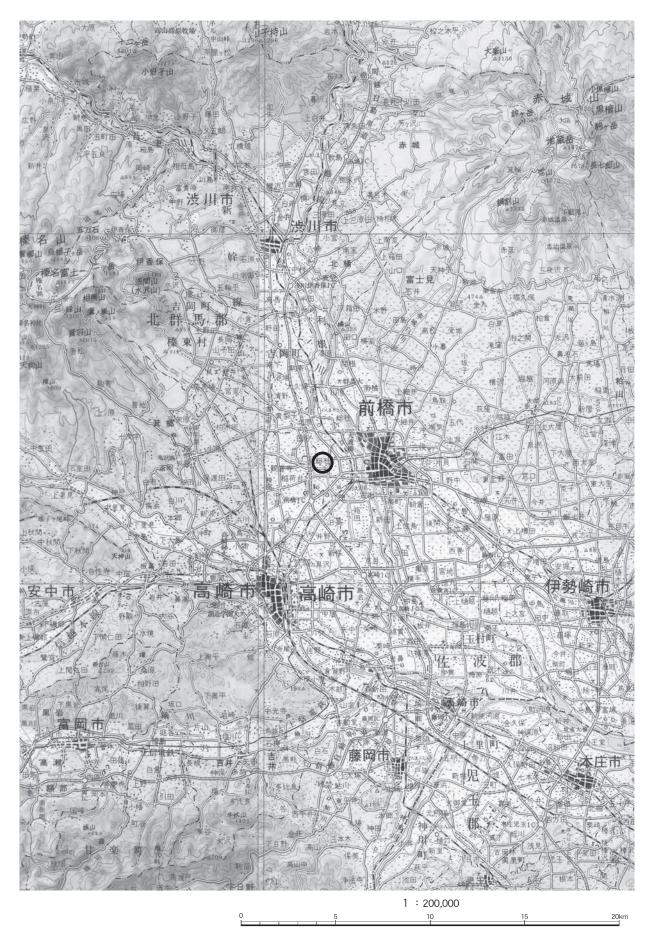


Fig. 1 推定上野国府位置図

ることが判明した。山王廃寺の特徴である石製の塔心礎や石製鴟尾、根巻石等は、宝塔山古墳の石棺や、蛇穴山 古墳の石室と同系統の石造技術を駆使して加工されており、このことから、この寺院を建立した氏族と宝塔山古 墳・蛇穴山古墳の被葬者は同一の氏族と考えられている。

また、山王廃寺の下層には北西に主軸をもつ基壇建物や掘立柱建物跡が検出されているが、これらの建物群についての評価は「車評家」等諸説あるが、寺院の変遷を考える上で重要なものとなっている。

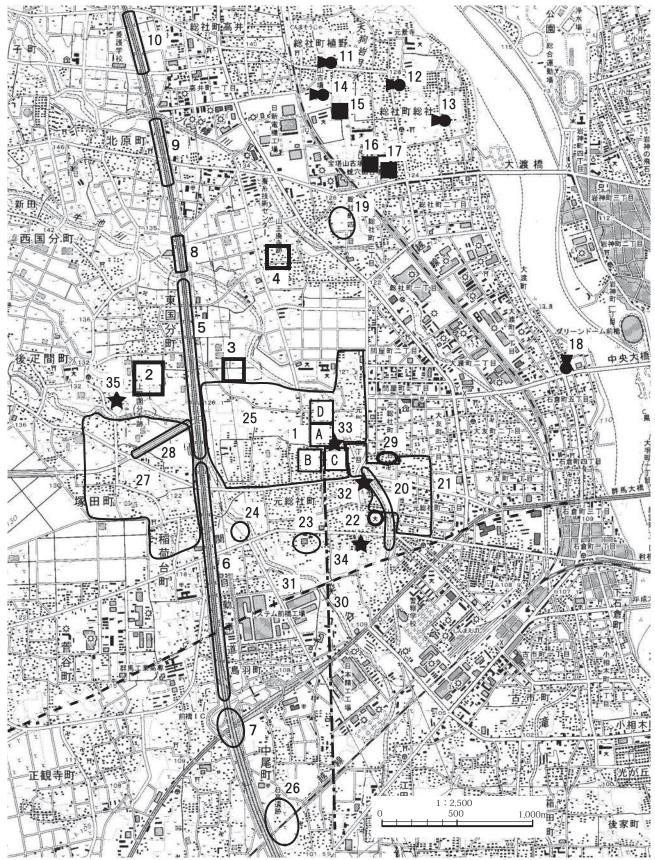
奈良・平安時代になると、上野国分僧寺、上野国分尼寺が建立されるなど、本地域は古代の政治・経済・文化の中心地としての様相を呈する。大正15年に国指定史跡となった上野国分僧寺は昭和55年から本格的な調査を実施し、主要伽藍の礎石、築垣、塀等が確認された。また上野国分尼寺は、昭和44・45年の調査で伽藍配置が推定できるようになり、さらに平成12年に実施された寺域確認調査によって東南隅と南西隅の築垣とそれに平行する溝跡や道路状遺構が確認された。上野国分僧寺、上野国分尼寺周辺では、関越自動車道建設に伴い発掘調査、上野国分僧寺、尼寺中間地域では、当時の大規模な集落跡や掘立柱建物群が検出されている。

なお、元総社地域には総社神社が鎮座するほか、上野国府が存在したことが推定されているが、掘立柱建物跡が元総社首海遺跡群、元総社小校庭で確認されている。これらの建物の性格については不明であるが、元総社町周辺で掘立柱建物が確認された事例が現在少ないことから、特筆される遺構である。また、国府推定域でも西に位置する鳥羽遺跡では、神社遺構とされる周囲に方形の溝をもつ掘立柱建物が存在するほか、大規模な工房跡も確認されている。また、牛池川沿いの元総社明神遺跡皿と元総社寺田遺跡皿では、それぞれ人形が出土しているほか、元総社寺田遺跡皿では「国厨」や「曹司」などの国府関連施設名が墨書された須恵器が出土している。その他に国府域の区画溝と考えられているものとして大溝がある。この遺構は閑泉樋遺跡・元総社明神遺跡・元総社青ヵ遺跡群等で確認されており、上野国府等範囲内容確認調査の平成23年度調査(1次)でも確認されている。これらの大溝は覆土上部に浅間B軽石が堆積するという時期的な特徴をもち、規模も同様であることや、確認された地点が連続することから、一連のものと考えられる大溝も存在する。その他に国府域を推定する上では、天神遺跡・弥勒遺跡・元総社蒼海遺跡群の西寄りの調査地点などの染谷川周辺では緑釉陶器が多数出土するほか、銅椀等の遺物が出土する傾向が強いことが指摘されており、こうした点から国府に関連した何らかの施設の存在がうかがえる。また元総社町周辺では至るところで奈良・平安時代の集落が検出されているが、これら集落から「大館」の墨書土器など特殊な遺物も少なからず出土している。

高崎市内の調査等により、元総社町の南部にN-64°-E方向の東山道駅路国府ルートが存在したことが推定されている。その他に存在が推定される通称「日高道」は、日高遺跡で検出された幅約4.5mの道路状遺構を北方へ延長したもので、これらは当時の交通網を物語る重要な遺構である。

中世以後 中世、元総社には蒼海城が築城され、総社長尾氏の居城となっていた。また総社を中心としたこの付近一帯は奈良・平安時代から引き続いて上野国の府中として栄える。蒼海城の築城年代については、伝承では鎌倉時代に千葉上総介常胤により築かれたとされているが詳しいことは分かっていない。ただし、何らかの城郭的なものは存在していたと考えられており、室町時代の永享元年(1429)に長尾景行が城の修築を行っている。蒼海城の特徴は、館のような方形の曲輪が碁盤の目のように配置されている点である。これらの曲輪は「○○屋敷」という名称で呼ばれている。なお、蒼海城は、江戸時代に秋元氏が現在の総社の地に総社城を築城して城下町等を移転させたことにより、完全に廃城となったと考えられる。蒼海城は、元総社町蒼海地区の区画整理事業に伴う発掘調査で、堀跡や掘立柱建物跡・井戸が検出されているほか、青白磁梅瓶や青磁・白磁片、穀物臼や茶臼などの石製品などが出土している。

その他に、上野国分僧寺、尼寺中間地域では寺院跡や土壙墓が検出されている。元総社蒼海遺跡群(5)でも土壙墓がまとまって検出されており、蒼海城の周囲に寺院や墓地が営まれていたと推定される。



- 1. 上野国府国庁推定地 2. 上野国分僧寺 3. 上野国分尼寺 4. 山王廃寺 5. 上野国分僧寺・尼寺中間 6. 鳥羽遺跡 7. 中尾遺跡
- 8. 国分境遺跡 9. 北原遺跡 10. 下東西遺跡 11. 稲荷山古墳 12. 大小路山古墳 13. 遠見山古墳 14. 総社二子山古墳 15. 愛宕山古墳
- 16. 宝塔山古墳 17. 蛇穴山古墳 18. 王山古墳 19. 大屋敷遺跡 20. 元総社寺田遺跡 21. 元総社明神遺跡 22. 元総社小学校校庭
- 23. 天神Ⅱ遺跡 24. 弥勒Ⅱ遺跡 25. 元総社蒼海遺跡群 26. 日高遺跡 27. 国府南部遺跡群 28. 元総社西川・塚田中原遺跡
- 29. 上野国府調査地点(昭和42年) 30. 通称「日高道」 31. 推定東山道駅路国府ルート 32. 総社神社 33. 宮鍋神社 34. 釈迦尊寺 35. 妙見寺

Fig. 2 周辺遺跡

Ⅲ 調査方法と経過

1 調査方法

上野国府等範囲内容確認調査は、その調査にあたり国庁の 推定地として4案を提示した。

平成23年度はそのうちのA案の範囲内、平成24年度はC案の範囲内および元総社小学校西方で確認調査を行った。平成25年度は、国庁推定地4案の範囲外となる総社神社・元総社小学校において国府関連施設の確認調査を実施したほか、国府域を推定する上での参考とするために、区画溝と東山道駅路国府ルートの確認調査も行った。平成26年度は、平成25年

Tab.1 各調査トレンチの面積と調査目的

トレンチ	調査面積 (㎡)	主な調査目的
50	128	国府関連施設の確認調査
51	72	国府関連施設の調査(元小)
52	89	推定東山道駅路国府ルートの調査
53	8	推定東山道駅路国府ルートの調査
54	88	国府関連施設の確認調査
計	385	

度の調査結果を踏まえて国庁推定地C案周辺・元総社小学校およびその周辺における国府関連施設の確認調査や、区画溝の範囲確認調査を実施した。この年度の調査で国庁推定地C案付近において掘込地業建物が少なくとも2棟検出された。こうした成果から、平成27年度も引き続き、国庁推定地C案周辺・元総社小学校およびその周辺で範囲確認調査を行った。特に元総社小学校では、その校庭でかつて発掘調査された「元総社小校庭遺跡」の1号掘立柱建物跡が存在することや、平成28年度は国庁推定地C案付近での区画溝の範囲確認や、元総社小学校校庭および総社神社の西側における国府関連施設の確認調査のほか、鳥羽町内において推定東山道駅路国府ルートの確認調査も実施した。平成29年度は推定蒼海城本丸西端部分の国庁推定地B案付近での国府関連施設の確認や、元総社小学校校庭および総社神社の西側における国府関連施設の確認調査のほか、推定東山道駅路国府ルートの確認調査も実施した。なお、本年度の総調査面積は385㎡である(Tab.1)。

調査は「上野国府等範囲内容確認調査基準」に基づいて行った。以下に調査方法について要点を記す。

グリッド設定(Fig. 3) 調査区のグリッド設定は以下のとおりである。①単位は4m四方とする。②国家座標第IX系(日本測地系)を用い、X=+44000、Y=-72200を基点(X0、Y0)とする。③西から東へ4mごとにX0数値が増大し(X157、X158、X159……)、北から南へ4mごとにY0数値が増大する(Y44、Y45、Y46……)。④各グリッドの呼称基点は北西杭とする。

なお、このグリッド設定は、区画整理に伴い継続的に調査が行われている元総社蒼海遺跡群のグリッド設定と 共通するものである。

トレンチ設定 各トレンチの設定幅については、これまで掘立柱建物の柱穴間隔を考慮して原則3mとしていたが、平成24年度の調査から4m幅へと拡大した。トレンチ名は、原則として調査順に数字で呼称することとし、平成23年度からの通し番号とした。

遺構の確認 遺構確認については、基本層序 I 層およびⅡ層 直下で行い、その後、上野国府の遺構面が存在するⅢ層(旧r - FP・As-C 混土層)を細分しながら確認することとした。遺構の確認にあたって、必要な場合はサブトレンチを設定することにし、サブトレンチの規模は遺構保護のため必要最小限とした。

測量 遺構平面図については縮尺1/20を原則とし、必要に応じて $1/10 \sim 1/50$ の縮尺を適宜使用することとした。また、土層図についても縮尺1/20とし、遺構毎の図面とは別

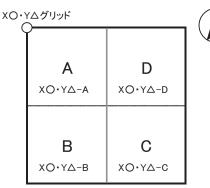


Fig. 3 2 m小グリッドの呼称

に、グリッド杭のあるトレンチ壁面ですべて作成することにした。

出土遺物の取り上げ 遺構毎を原則とし、遺構に属さない遺物は4mグリッド単位で記録を作成し取り上げることとした。なお、状況に応じて4mグリッドをFig.3のように4分割し、2mの小グリッド一括で取り上げた遺物もある。小グリッドの呼称は、北西から反時計回りでA~Dとした。なお現位置を保つ礎石等、施設を構成する遺物については、原則として現状保存することとした。

写真撮影 遺構の写真撮影については、35mmフィルム(モノクロ、カラーリバーサル)およびデジタルデータを 常時使用した。

埋め戻し 調査終了後は、今後の調査と区別できるように石灰を散布してから埋め戻しをおこなった。また、掘立柱建物跡や掘込地業をもつ建物跡については、ゴンベ砂を撒いて遺構を保存した上で埋め戻しを行った。

2 調查経過

平成29年度の発掘調査は6月1日から開始し、 平成30年1月15日に終了した。調査経過は以下の とおりである。

50トレンチの調査については元総社蒼海遺跡群 (124) の補完調査にあたる。元総社蒼海遺跡群 (124) の調査では、蒼海城推定本丸跡の西側の堀 と、その法面および推定本丸の土塁を中心として 調査した。この調査では、堀の調査が終了し、次 いで、土塁およびその下層の中世面で検出された 遺構を調査した段階で終了している。中世面の下 層にも遺構の存在が推定されたことから、予備調 査を実施したところ、10世紀代の住居跡が検出さ れたため、補完調査を実施した。区画整理事業と の関係から6月1日から調査を開始した。当初の 予想以上に、調査区内は濃厚に遺構が分布してお り、特に10世紀から11世紀にかけての時期の住居 跡が複数重複した状態で検出された。このような 状態であったことから調査の進捗も遅々として進 まず、7月下旬から8月下旬にかけては元総社小 学校校庭の調査が予定されていたことから、元総 社小学校校庭(51トレンチ)を調査していた期間 は作業を中断した。最終的に50トレンチの掘り下 げ・記録等の作業がすべて終了したのは9月21日 である。

元総社小学校校庭(51トレンチ)の調査については、7月21日にトレンチの設定を行い、24日に掘削した。遺構確認に際しては、トレンチの南東付近が撹乱を受けており遺構確認が困難であった

Tab. 2 調査経過図

	現地	トレンチ名称					
	説明会	50	51	52	53	54	
6月							
7月			*				
8月							
9月							
10月				*		·	
11月					*	·	
12月						*	
1月							

- ★ 表土掘削・埋め戻し・整地
- トレンチ拡張

グリッド設定・遺構確認・遺構掘下げ

写真撮影・図面作成

が、約2.7m間隔で東西方向に並ぶ柱穴が3基検出されたほか、その東側では、南北方向に走る溝跡が並行して4条検出された。例年では、2学期の始業式の日に元総社小学校の5・6年生を対象とした遺跡見学会を開催していたが、9月中に開かれる行事の日程の関係から本年度は見学会の実施を見送り、埋め戻しも例年よりも早い時期に行った。そのため、調査は8月12日に終了し、14日に埋め戻した。なお、埋め戻しに際しては遺構保護および調査箇所の明示のためにゴンベ砂を充填してから埋め戻した。埋め戻しに際しては、例年と違わず本年度も埋め戻した土が水分を含み柔らかかったことから、整地作業は、土が落ち着いた頃の22日に行い、9月2日に転圧を行った。

51トレンチの調査の終了後は、前述のとおり50トレンチの調査を再開し、それが終了した後に52トレンチの調査を実施した。調査区の選定・設定に時間を要したことから、調査開始までの間は整理作業を行い、トレンチの設定を10月12日に行い、18日に掘削した。52トレンチにおいては奈良・平安時代の層が削り取られ調査目的である東山道駅路国府ルートに該当する古代の道路遺構は検出されなかった。しかし、溝やピットを中心とした中世以後の遺構が検出され、それらの調査を行い、また連続するピットの調査のためにトレンチの一部を拡張した。調査中に台風に数度見舞われたが、比較的堆積が薄い表土の下層が硬質の砂層(基本層序VI層:基盤層)となっているために、トレンチが完全に水没することが度々であった。その都度排水を行い表土が乾燥するまで待って調査を行った。調査は11月10日に終了し、13日に埋め戻しを行い、原状復旧作業を行った。

53トレンチは、52トレンチの調査が終了する11月10日にトレンチを設定し、13日から表土の掘削を行った。53トレンチは面積も小さく、土層の確認を行いながら慎重に作業を進めたかったため、人力で掘り下げを行った。掘り下げの結果、遺構は検出されず、染谷川と推定される流路跡が検出された。そのため、土層の観察・記録および土層の時期判断の鍵となるテフラの採集を行なった後、16日に埋め戻し、17日に整地作業を行い調査は終了した。

54トレンチは53トレンチの調査が終了して数日後の11月29日にトレンチを設定し、12月1日に掘削した。54トレンチは、当初予想よりも土層堆積は良好で厚く堆積していた。また、トレンチ内で検出された遺構の内容も豊富で、8世紀から10世紀頃にかけての土坑・住居跡・道路遺構等のほかに、掘立柱建物跡の柱穴と考えられるピットや古代の溝跡やピット列など官衙と推定できる遺構も検出されている。検出された遺構の内容に対して調査期間が短かったことや、今回検出された掘立柱建物跡・溝跡・ピット列の性格や全容を把握する上では、トレンチの隣接地等でのさらなる調査の必要性を感じながら遺構の掘り下げ・記録を終了させ、埋め戻しと簡単な整地作業を12月28日に実施し、年内の作業はひとまず終了した。年が明けて、54トレンチの最終的な整地状況の確認を1月15日に行ったところで、平成29年度の調査は終了した。

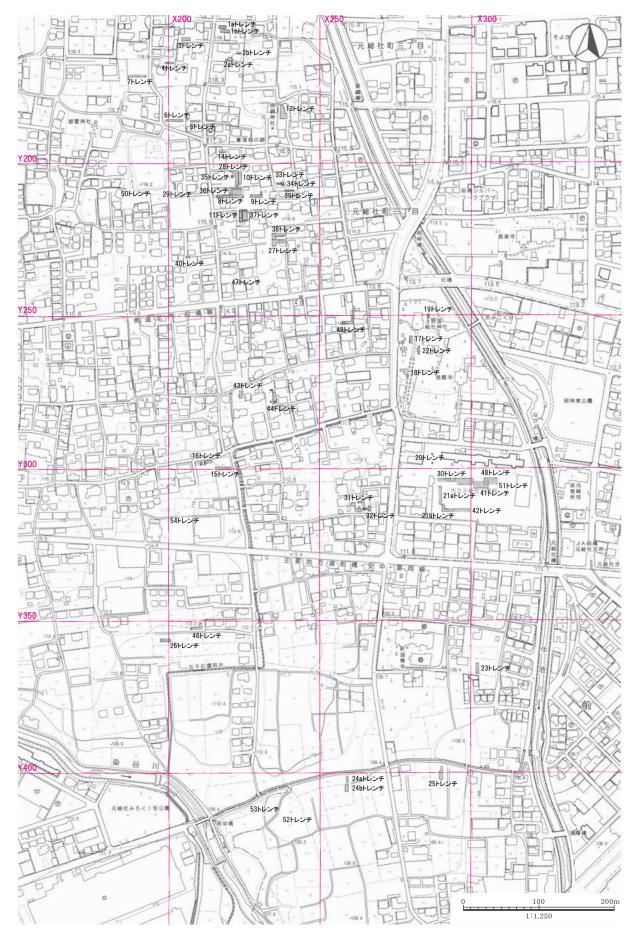


Fig. 4 グリッド設定図とトレンチ位置図

IV 基本層序

(1) 国庁推定地 B 案周辺(50トレンチ)

蒼海城推定本丸跡の西端に位置しており、従来から考えられていたとおり、土取りされている周辺よりも土層の残存状態が良好であった。推定本丸跡の現在の表土は、曲輪の内側に築かれた土塁を平らに均した土と考えられ、その下層に旧表土と浅間B軽石混入土層(Ib層)が堆積していた。中世の遺構面はIb層下部からその下層場面にかけてと推定される。その下層に10世紀代を中心とした遺物の包含層および遺構面が検出された層(Ⅲ層)が存在し、古代の遺構の一部はIV層を掘り込み、その底面や床面はV層もしくはVI層に達していた。なお、V層およびVI層上部は白色で粘性が強い。50トレンチ中央部で集中して分布している古代の土坑は、こうした層の土を採集するための粘土採掘坑の可能性が考えられる。

(2) 元総社小学校校庭(51トレンチ)とその西方(54トレンチ)

51トレンチは元総社小学校の校庭における調査で最も東側に位置するが、過年度調査とほぼ同水準でIV層が確認されており、校庭が立地する台地は体育館の西側付近まで続いていたと推定される。

元総社小学校の西方に位置する54トレンチについては、比較的良好な土層堆積が確認できた。現状、地形的にはトレンチの位置する付近を境として北東方向に向かって緩く傾斜している。54トレンチの北東約100mの地点で平成24年度に調査した15・16トレンチではその緩く傾斜した地形上に位置するが、ここまで良好な土層は確認できていない。なお、これまでの調査結果から、さらに北東方向へ進むと I 層以下の土層は確認が難しくなり、表土の下層が V 層もしくは VI 層となる傾向が強いことが判明している。

(3) 推定東山道国府ルート付近(52・53トレンチ)

52トレンチは表土(I層)の下層の土層がトレンチの位置で異なり、トレンチ北寄りはVI層、中央はV層、南寄りはIV層となっていた。これは、現状では比較的平坦な地形となっているが、本来的には南東方向に傾斜する山麓的な地形で、ある時期に土(III層を中心として)が削り取られたためと考えられる。それについては、トレンチ北側の芦田堰が流れる東西方向に続く帯状の低地を挟んだ台地状の地形との間に比高差が認められることや、54トレンチ付近の畑に土師器や須恵器の小片が散布していることからも窺える。なお、54トレンチから東へ約100mの地点に位置する平成25年度調査の24bトレンチについても表土の下層はVI層であったことから、同様な状況と考えられる。なお、地元住民の方の話によると、戦後間もない頃から地形的には大きく変わっていないとのことから、土取りはそれ以前に行われたと考えられる。

53トレンチは、52トレンチから一段下がった染谷川沿いの低地に位置する。本トレンチの調査は土層確認中心となったので、その詳細については第5章の記載に譲るところであるが、かつて田として使用されていたときの床土とその下層の粘質土層があり、その下層には河川による堆積と考えられる砂の層が検出されている。トレンチの位置する場所が染谷川沿いの低地であることから、かつての染谷川の流れによって堆積した砂であろう。その後離水し、田として利用されたのであろう。

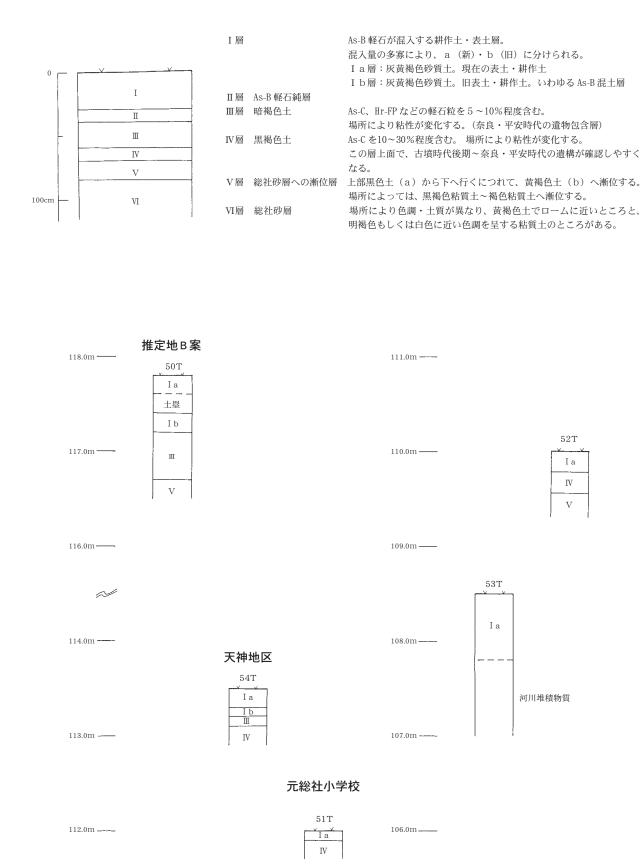


Fig. 5 基本層序と各トレンチ土層柱状図

V 遺構と遺物

1 各トレンチの概要

平成29年度調査にあたり、国府関連施設および区画溝の解明について有益な情報が得られると思われる調査候補地のうち、調査可能な4ヶ所にトレンチを設定した。その他、元総社蒼海遺跡群(124)の補完を目的として実施した調査については調査区に便宜上50トレンチの名称を付した。以下に調査目的別で各トレンチの概要を記す。

各トレンチの調査目的は、第1章で述べたとおり、以下の3点となる

- ① 元総社小学校校庭およびその西方における国府関連遺構の範囲確認
- ② 推定東山道駅路国府ルートの確認
- ③ 国庁推定地B案における国府関連遺構の確認

以下に調査目的毎に設定トレンチの概要について述べる。

(1) 元総社小学校校庭およびその西方における国府関連遺構の範囲確認

51トレンチ (Fig. 8、PL. 5)

51トレンチは元総社小学校校庭の遺構確認を目的として設定されたトレンチである。具体的には第1章でも述べたとおり、群馬大学の発掘調査以後、平成25年度に開始した発掘調査を校庭西側から外周を時計回りに回りながら年度毎に調査を進め校庭の北東に達したものである。このトレンチは平成28年度調査のトレンチの東側に設定したもので、掘立柱建物跡および区画施設の検出のほか、元総社小学校校庭の地形確認も目的としている。

トレンチの規模は、長さ18m、幅4mの東西方向に長いトレンチで、調査面積は72mである。

調査の結果、10世紀代と推定される住居跡1軒、掘立柱建物跡と推定される柱穴列1条、古代の溝跡6条、古代と推定される土坑2基。同じくピットが2基検出された。住居跡が検出された地点は昭和38年の元総社小校庭遺跡の調査に際しても何らかの遺構があると判断し調査を行った地点でもある(松島 1986)。掘立柱建物跡と推定される柱穴列は2間分のみの検出である。さしあたり、元総社小学校校庭での通し番号を用いて6号掘立柱建物跡としたが、さらなる確認調査が必要である。この柱穴列の東約1mの地点で南北方向に走行を持つ溝跡が4条平行して検出された。この4条の溝は走行が同一で平行するという共通点をもちながら、それぞれ様相が異なるという特徴をもつ。

54トレンチ (Fig. 8、PL. 7・8・9)

54トレンチは、総社小学校・元総社小学校の西方の通称「本村」とよばれる地域の西、小字では天神に位置する。トレンチの規模は長さ20m、幅4mの東西方向に長いトレンチで、調査区東端部で南に長さ4m、幅2m拡張している。よって調査面積は88㎡である。

元総社小学校校庭から「本村」、さらには天神地区にかけての地形については、まず、小学校と「本村」の中間地点(現在の総社神社の参道)が現地形を観察すると低くなっていることから、谷の存在が推定される。本村地域は平成26・27年度調査の成果から広範囲にわたって土取りと整地が行われていると推定され、本来の地表面は現地表面よりも高かったと推定される。この状況は、総社神社境内や元総社小学校校庭、さらには一般県道足門・前橋線以北の元総社蒼海土地区画整理事業の区域でも普遍的に見られる。本村の西寄りに、通称「日高道」と呼ばれる南北方向の古い地割(道路)が縦貫するが、それよりも西へ行くにしたがって暖傾斜となっている。54トレンチが位置する地点は、ちょうど東側から傾斜を登りきったあたりとなっており、現況で東を望むと台地上から低地を見下ろすようなかたちとなる。54トレンチにおいても基本層序に則った層序が確認でき(Fig. 5

参照)、ここでは土取りは行われていないと考えられる。ちなみに、地形としてはそのまま西へ進むと染谷川の 浸食による低地に落ち込み、染谷川に達する。

54トレンチでは、8世紀から10世紀にかけての住居跡8軒、掘立柱建物跡と推定される柱穴1基、古代の溝3条、古代末の道路遺構1条、古代の土坑9基、古代のピット11基が検出された。ピットのうち5基はN-4°-Wの走行を持つ軸上で検出されていることから一連のものであると考えられるが、ピットの間隔が均一でないため検証が必要である。

(2) 推定東山道駅路国府ルートの確認

平成29年度の推定東山道駅路国府ルートの確認調査は、染谷川以東での道路遺構の検出を目標に実施した。位置的には、染谷川左岸の台地上で1ヶ所(52トレンチ)、低地で1ヶ所(53トレンチ)の調査を行った。

52トレンチ (Fig. 8、PL. 6)

52トレンチは、東山道駅路国府ルートの名残の伝承をもつ道の南に隣接している。トレンチの規模は縦20m、横4mで、変則的に拡張したことから、最終的な調査面積は89㎡である。

トレンチは、表土の下位にあるべき基本層序III層およびIV層が削り取られて地山(総社砂層およびその漸移層)となっていた。この状況は東へ約80mの地点に位置する平成25年度調査24a・bトレンチと一致する。しかし、本トレンチで異なる点は、表土の下層で確認できた土層が、トレンチ北半分は基本層序V層もしくはVI層であったが、トレンチ南半分は基本層序IV層となっていたことから、本来的には北から南へ向かう緩く傾斜した山麓地形であったと推定される。

そのような状況から、トレンチで検出された遺構は中世以降の遺構のみで、溝3条、土坑3基、ピット30基である。ピットのうち4基は東西方向に同軸上で等間隔に並んだことから柵列等の跡の可能性が考えられる。また、道路跡の可能性のある掘削もしくは整地痕が検出されているが、時期的には古代の道ではなく新しい時期のもの考えられる。なお、溝の覆土から中世のほかに古代の遺物も出土している。周辺の畑に土師器や須恵器の破片が散見できることから、本来的には古代の集落が存在していたのであろう。

53トレンチ (Fig. 8、PL. 7)

53トレンチは、東山道駅路国府ルートの名残の伝承をもつ道の南に隣接している。トレンチの規模は縦4m、横2mで、面積は8㎡である。

前述の「東山道駅路国府ルートの名残の伝承をもつ道」とは、かつて高崎市浜川町付近から前橋市の群馬大橋辺りまでの間を、概ねN-64°-Wの角度で続く地割が続いていた。現在では区画整理等で断絶もしくは消滅してしまった区間も多い。この地割が、染谷川左岸で低地の中を土手状に続き、その北側を沿うように用水路「芦田堰」が流れている。この土手が地割上に位置することから、古代から存在する道路であるのかを確認するためにトレンチを設定した。

結果としては、トレンチ内で中世以後に河川により堆積したと推定される砂層が確認され、道路が古代まで遡る可能性は低くなった。調査結果の詳細については、本章の53トレンチの記述および第7章を参照されたい。

(3) 国庁推定地 B 案における国府関連遺構の確認

50トレンチ (Fig. 6 ・ 7、PL. 1 ・ 2 ・ 3 ・ 4)

本トレンチは、第1章でも記したとおり、元総社蒼海遺跡群(124)の補完調査に位置づけできるものである。よって、トレンチ番号は付しているが調査区は長方形ではなく、南北方向に非常に長い三角形に近い形状を呈している。調査面積は128㎡。

本トレンチでは7世紀代の住居跡1軒、10世紀代の住居跡14軒、11世紀代の住居跡5軒、古代の溝2条、古代の土坑35基、古代のピット21基、中世の溝1条、中世の土坑2基、中世のピット35基が検出された。

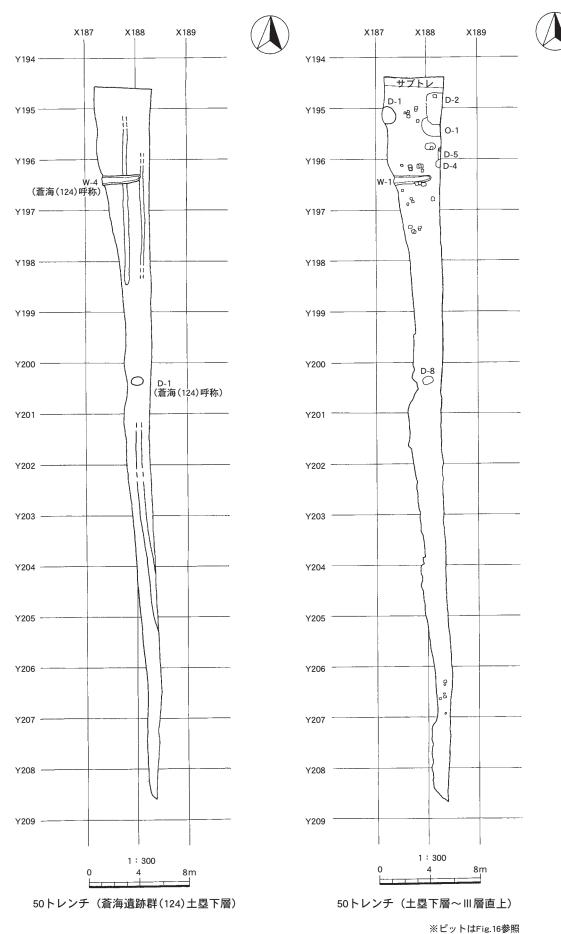


Fig. 6 トレンチ全体図(1)

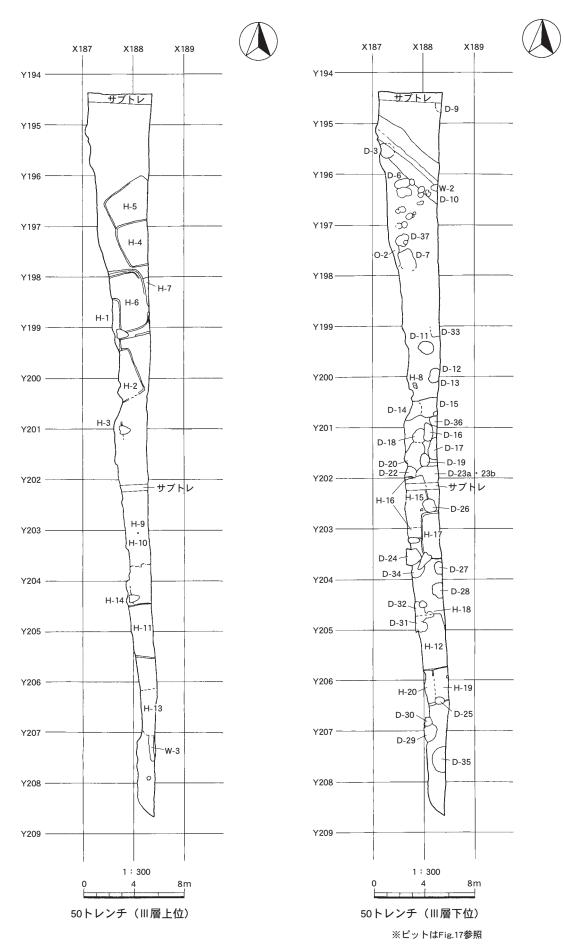
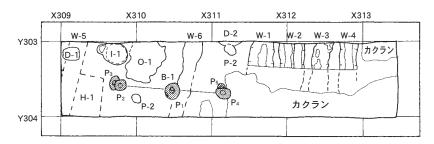
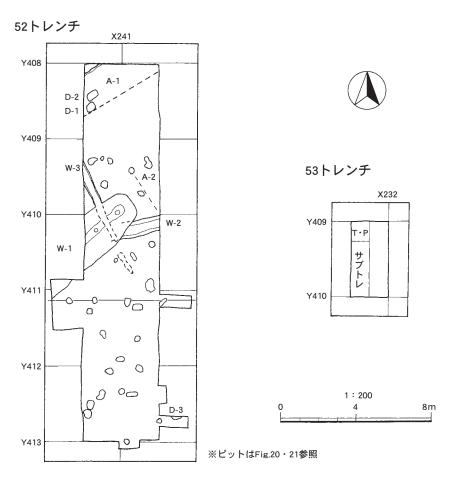


Fig. 7 トレンチ全体図(2)

51トレンチ





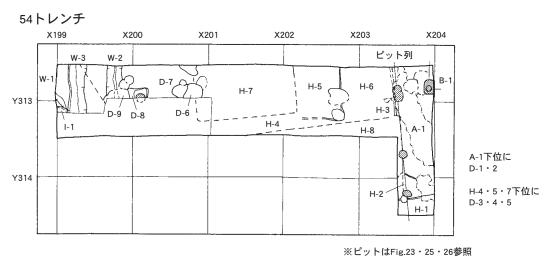


Fig. 8 トレンチ全体図(3)

2 各トレンチの検出遺構

各トレンチの検出遺構について、トレンチ番号順に記載する。

50トレンチ

(1) 住居跡

1号住居跡 (Fig. 9、PL. 1)

位置 X187、Y198・199グリッド。主軸方向 N-89°-E。形状等 方形。東西(0.65)m、南北4.13m。壁高29cm。床面 総社砂層に造られた地山床。薄く貼床状になっているが、硬化は顕著ではない。電 東壁中央よりやや南寄りで検出された。主軸方向はN-89°-E、全長84cm、最大幅69cm、焚き口幅42cmを測る。袖石と支柱の痕跡が検出された。右側袖付近に硬化した焼土面が2ヶ所あり。重複関係 2号住居跡と重複する。本遺構が古い。出土遺物 土師器 (甕)、酸化焰焼成須恵器 (坏)破片、土釜破片、灰釉陶器 (椀)破片、黒色土器(椀)、瓦破片が出土。時期 出土遺物から10世紀後半と推定される。

2号住居跡(Fig. 9、PL. 1)

位置 X187・188、Y199・200グリッド。主軸方向 N—68°—E。形状等 方形。東西(1.44)m、南北3.50m。 壁高12.5㎝。床面 総社砂層への漸移層に造られた地山床。竃付近はより掘り形が深く、北へ向かって浅くなる。貼っている面は薄く、硬化は顕著ではない。竃 検出できなかったが、硬化した焼土面が検出された位置から南壁に構築されていると推定される。ピット等 貯蔵穴と考えられるピットが1基検出された。その規模については計測表(Tab.3)に記載した。重複関係 1号住居跡、8号土坑と重複する。8号土坑より古く、1号住居跡より新しい。出土遺物 土師器(坏)破片、酸化焰焼成須恵器(坏)破片、黒色土器破片、小円礫が出土。時期 出土遺物が少なく時期特定が難しいが10世紀後半と推定される。

3号住居跡(Fig. 9、PL. 1)

位置 X187、Y200グリッド。主軸方向・形状等 竈とその周辺の床面と考えられる硬化面のみの検出のため、主軸方向や形状は不明。床面 総社砂層への漸移層に造られた地山床。竈 南東隅に構築されていたと推定される。主軸方向はN-94°-E、全長75cm、最大幅66cm、焚き口部48cmを測る。出土遺物 土師器 (坏) 破片、須恵器 (坏) 破片、酸化焰焼成須恵器 (椀) 破片が出土。時期 出土遺物から10世紀後半と推定される。

4号住居跡(Fig. 9、PL. 1)

位置 X187・188、Y196・197グリッド。主軸方向 N-75°-E。形状等 方形。東西(2.45)m、南北3.52m。壁高20㎝。床面 総社砂層への漸移層に造られた貼床。電 調査地内では検出されなかった。重複関係 5号住居跡、37号土坑と重複する。本遺構が最も新しい。出土遺物 土師器 (坏・甕)破片、須恵器 (坏・甕)破片、酸化焰焼成須恵器 (坏・椀・羽釜)破片、土釜破片、灰釉陶器 (椀・瓶)破片、黒色土器破片、瓦破片、砥石、敲き石、石製品 (碁石?)が出土。時期 出土遺物から11世紀前半と推定される。

5号住居跡 (Fig. 9、PL. 1)

位置 X187・188、Y196グリッド。主軸方向 N-53°-E。形状等 方形。東西3.35m、南北(2.34)m。壁高 14.5cm。床面 総社砂層への漸移層及び1号溝跡の覆土に造られた地山床。電 調査地内では検出されなかった。重複関係 4号住居跡、39号・41号・42号・43号ピット、2号落ち込みと重複する。4号住居跡よりも古く、39号・41号・42号・43号ピット、2号落ち込みよりも新しい。出土遺物 土師器 (坏・甕)破片、須恵器 (甕・羽釜)破片、酸化焰焼成須恵器 (坏)破片、黒色土器 (椀)破片、白磁破片が出土。時期 出土遺物から10世紀後半と推定される。

6号住居跡 (Fig.10)

位置 X187・188、Y197・198・199グリッド。主軸方向 N-79°-E。形状等 方形。東西(2.54)m、南北5.3m。壁高24.5㎝。面積 (13.36)㎡。床面 総社砂層に構築された地山床。竈 東壁中央よりやや南寄りで袖部が検出された。ほとんどが調査区外にあり、主軸方向・形状等は不明。周溝 北・南・東壁で検出された。北壁では二重に検出された。南壁については壁と周溝の内側にテラス状の作り出しをもち、周溝は南壁中央付近で切れていたことから、その付近に入口施設が存在したと考えられる。最大幅14㎝、最大深さ4㎝。ピット等 住居の中央に床下土坑が1基検出された。その規模については計測表 (Tab.3) に記載した。重複関係 7号住居跡、7号・33号土坑と重複する。本遺構が最も新しい。出土遺物 土師器 (坏・甕) 破片、須恵器 (坏・椀・甕) 破片、酸化焰焼成須恵器 (坏・椀・羽釜) 破片、土釜破片、灰釉陶器 (椀・皿) 破片、黒色土器 (椀) 破片、瓦破片、砥石、銅印、鉄滓が出土。時期 出土遺物から10世紀後半と推定される。その他 北側の周溝が2条あることから、住居が造りかえられた可能性がある。住居内北寄りに直径約10㎝の円形に焼土が検出された。7号住居跡 (Fig.10)

位置 X188、Y198グリッド。主軸方向 N-78°-E。形状等 方形と推定される。東西(0.43)m、南北(2.55)m。 壁高19.5㎝。床面 総社砂層に構築された貼床。竃 調査地内では検出されなかった。周溝 北壁で検出された。最大幅8㎝、最大深さ3.5㎝。重複関係 6号住居跡と重複する。本遺構が古い。出土遺物 須恵器甕転用 硯、灰釉陶器(瓶)破片が出土。時期 出土遺物が少なく時期特定が難しいが、10世紀前半と推定される。

位置 X187、Y200グリッド。主軸方向・形状等 竈の焼土と灰の分布のみ検出のため主軸方向や形状は不明。 床面 不明。竈 東壁の南東にあったと推定される。重複関係 2号住居跡の床面下で8号住居跡の焼土と灰を 確認したため、本遺構は2号住居跡よりも古い。出土遺物 なし。時期 不明。10世紀前半か。

9号住居跡 (Fig.11、PL.1)

8号住居跡 (Fig.10)

位置 X187・188、Y202・203グリッド。主軸方向・形状等 プランが明確に確認できなかったため主軸方向や形状は不明。床面 総社砂層への漸移層および17号住居跡の覆土に構築された貼床。住居の南側で硬化面が検出された。竈 調査地内では検出されなかった。重複関係 10号・17号住居跡と重複する。10号住居跡よりも古く、17号住居跡よりも新しい。出土遺物 土師器(坏・甕)破片、須恵器(甕)破片、酸化焰焼成須恵器(坏・椀・羽釜)破片、灰釉陶器(椀)破片、黒色土器(椀)破片、瓦破片が出土。時期 出土遺物から11世紀前半と推定される。10号住居跡(Fig.11、PL.2)

位置 X187・188、Y203グリッド。主軸方向・形状等 プランが明確に確認できなかったため主軸方向や形状は不明。床面 総社砂層への漸移層に構築された貼床。電 調査地内では検出されなかった。重複関係 9号・17号住居跡と重複する。本遺構が最も新しい。出土遺物 土師器 (坏・甕)、須恵器小片、酸化焰焼成須恵器 (坏・椀)破片、黒色土器 (椀)破片、灰釉陶器 (椀)破片、瓦破片。時期 出土遺物が少なく時期特定が難しいが11世紀前半と推定される。

11号住居跡 (Fig.12、PL.2)

位置 X187・188、Y204・205グリッド。主軸方向 N-86°-E。形状等 方形と推定される。東西(1.82)m、南北4.28m。壁高28.5㎝。床面 総社砂層への漸移層に構築された貼床。電 調査地内では検出されなかったが、灰の包含が中央やや北寄りに多く見られた。重複関係 12号・14号・18号住居跡と重複する。本遺構が最も新しい。出土遺物 土師器 (坏・甕) 破片、須恵器 (坏・甕・蓋・皿) 破片、酸化焰焼成須恵器 (坏・椀) 破片、灰釉陶器 (椀) 破片、白磁 (椀) 破片、黒色土器 (椀) 破片、瓦破片、円筒埴輪破片、砥石、チャートの小円礫、銅製品が出土。時期 出土遺物や遺構の重複関係から11世紀前半と推定される。

12号住居跡 (Fig.12、PL.3)

位置 X187・188、Y204・205グリッド。主軸方向 N-81°-E。形状等 方形。東西(1,85)m、南北4.36m。壁高22.5㎝。面積 (8.07)㎡。床面 総社砂層への漸移層に構築された貼床。赤褐色の硬化面が3ヶ所検出された。住居の掘り形が北壁付近で確認できる。堅緻面は住居の中央と南側で検出された。電 調査地内では検出されなかった。重複関係 11号・18号・19号・20号住居跡、31号・32号土坑、51号ピットと重複する。11号住居跡、31号・32号土坑、51号ピットと重複する。11号住居跡、31号・32号土坑、51号ピットよりも古く、18号・19号・20号住居跡よりも新しい。出土遺物 土師器 (坏・甕)破片、須恵器 (坏・甕)破片、酸化焰焼成須恵器 (坏・椀)破片、土師質土器 (土釜)破片、灰釉陶器 (椀)破片、黒色土器 (椀)破片、瓦破片、敲き石、被熱した円礫、銅製品 (吊金具?)が出土。時期 出土遺物から11世紀前半と推定される。その他 床面と覆土中に炭化材や炭化物が多く含まれていること、焼土面が面的に広く分布していること、その焼土面の下層に炭化物が面的に広く認められたことから、焼失住居の可能性が高い。13号住居跡 (Fig.10、PL.2)

位置 X188、Y206・207グリッド。主軸方向・形状等 床面は確認できたが、プランが明確に確認できなかったため主軸方向や形状は不明。床面 総社砂層への漸移層に造られた貼床。電 調査地内では検出されなかった。重複関係 20号住居跡と重複する。本遺構が古い。出土遺物 酸化焰焼成須恵器(坏・羽釜)破片が出土。時期 出土遺物から10世紀前半と推定される。

14号住居跡 (Fig.10、PL.2)

位置 X187・188、Y204グリッド。主軸方向・形状等 竈とその周辺のみの検出のため、主軸方向や形状は不明。床面 不明。電 東壁に構築されている。主軸方向はN一79°—E、全長71cm、最大幅48cm、焚き口幅36cm を測る。重複関係 11号・18号住居跡と重複する。11号住居跡より古く、18号住居跡より新しい。出土遺物 土師器 (坏・甕) 破片、酸化焰焼成須恵器 (坏) 破片、黒色土器 (椀) 破片、瓦破片。時期 出土遺物から10世紀後半と推定される。

15号住居跡 (Fig.11、PL.2)

位置 X187・188、Y202グリッド。主軸方向 N-76°-E。形状等 方形。東西(0.67)m、南北(1.52)m。壁高18.5cm。面積 (0.84)㎡。床面 東壁付近は総社砂層への漸移層に造られた地山床。16号住居跡と重複している部分は貼床。竃 南東隅に構築されている。規模等については左側袖を検出したのみであるため不明。重複関係 16号・17号住居跡、26号土坑と重複する。17号住居跡と26号土坑よりも古く16号住居跡より新しい。出土遺物 土師器 (甕) 破片、須恵器 (坏・甕) 破片、酸化焰焼成須恵器 (坏・椀) 破片、黒色土器 (椀) 破片、砥石、片岩の小礫が出土。時期 出土遺物から10世紀後半と推定される。

16号住居跡(Fig.11、PL.3)

位置 X187、Y201・202・203グリッド。主軸方向N-79°-E。形状等 方形。東西(1.17)m、南北4.43m。壁高7㎝。床面 総社砂層に構築された貼床。竃 調査地内では検出されなかった。周溝 南壁で検出された。最大幅14㎝、最大深さ4.5㎝。重複関係 15号・17号住居跡、55号ピットと重複する。本遺構が最も古い。出土遺物 土師器 (坏・甕) 破片、須恵器 (坏・甕・蓋・平瓶) 破片、砥石、敵き石、磨石が出土。時期 出土遺物から7世紀後半と推定される。

17号住居跡(Fig.11、PL.3)

位置 X187・188、Y202・203グリッド。主軸方向 N—90°—E。形状等 方形。東西(1.27)m、南北3.59m。 壁高20.5cm。床面 総社砂層に構築された貼床。硬化面は二層確認されたことから、床の貼り直しを行っている と推定される。電 南西隅に構築されている。主軸方向はN—33°—E。全長134cm、最大幅68cm、焚き口幅33cm を測る。ピット等 住居の南側に方形のピットが1基検出された。その規模については計測表(Tab.3)に記載した。重複関係 15号・16号住居跡、34号土坑と重複する。本遺構が最も新しい。出土遺物 土師器(坏・甕) 破片、須恵器(甕・蓋・皿)破片、酸化焰焼成須恵器(坏・椀・羽釜)破片、灰釉陶器小片、黒色土器(椀)破片、瓦破片、砥石、石製品(碁石?)が出土。時期 出土遺物から10世紀後半と推定される。

18号住居跡 (Fig.12)

位置 X188、Y204グリッド。主軸方向・形状等 プランが明確に確認できなかったため主軸方向や形状は不明。床面 総社砂層への漸移層に造られた地山床。電 竈と考えられる焼土と灰層が検出された。ただし竈本体は若干検出されただけなので、規模等不明。重複関係 11号・12号住居跡、51号・52号ピットと重複する。本遺構が最も古い。出土遺物 なし。時期 10世紀と推定される。

19号住居跡 (Fig.12、PL.3)

位置 X188、Y205・206グリッド。主軸方向・形状等 プランが明確に確認できなかったため主軸方向や形状は不明。床面 総社砂層への漸移層に造られた地山床。竃 調査地内では検出されなかった。重複関係 12号・20号住居跡・25号土坑と重複する。本遺構が最も古い。出土遺物 土師器 (甕) 破片、須恵器 (甕) 破片、酸化焰焼成須恵器 (椀) 破片。時期 出土遺物が少なく時期特定が難しいが、10世紀代と推定される。

20号住居跡(Fig.12、PL.3)

位置 X188、Y205・206グリッド。主軸方向 N—72°—E。形状等 方形と推定される。東西(0.77)m、南北(2.8)m。壁高12.5㎝。面積 (1.68)㎡。床面 総社砂層に造られた地山床。竃 調査地内では検出されなかった。重複関係 12号・19号住居跡、25号土坑と重複する。12号住居跡、25号土坑よりも古く、19号住居跡よりも新しい。出土遺物 酸化焰焼成須恵器 (椀)、鉄製品 (刀) が出土。時期 出土遺物から10世紀前半と推定される。

(2) 溝跡

1号溝跡(元総社蒼海遺跡群(124) 4号溝跡)(Fig.13、PL.3)

位置 X187・188、Y196グリッド。主軸方向 N—84°—E。形状等 トレンチ内で検出された長さ3.05m、最大上幅0.73m。最大下幅0.46m。最大深さ19cm。断面形状は逆台形で、底面はほぼ平坦。出土遺物 元総社蒼海遺跡群の調査で火鉢破片、五輪塔が出土している。時期 中世以降と推定される。その他 蒼海遺跡群 (124)の4号溝跡と同一。

2号溝跡 (Fig.13、PL.3)

位置 X187・188、Y195・196グリッド。主軸方向 N-49°-W。形状等 トレンチ内で検出された長さ8.33m、最大上幅2.4m。最大下幅0.76m。最大深さ53cm。断面形状は浅いU字形で二段になっている。下段の覆土は固く締まり、上段底面を道路として使用された可能性が考えられる。重複関係 5号住居跡、1号・3号・10号土坑、44号ピットと重複する。5号住居跡、1号・10号土坑、44号ピットよりも古く、明瞭ではないが3号土坑よりも新しい。出土遺物 土師器(坏・甕)破片、須恵器(甕・瓶)破片、酸化焰焼成須恵器(坏・椀)破片、黒色土器(椀・小鉢)破片、瓦破片、砥石、石製品(碁石?)、鉄滓。時期 遺構の重複関係や覆土、出土遺物から古代の溝と推定される。覆土の状況から、浅間B軽石降下以前にはほとんど埋没していたことが推定される。出土遺物から10世紀代まで機能していたと考えられるが、掘削された時期は不明。

3号溝跡 (Fig.13、PL.3)

位置 X188、Y206・207グリッド。主軸方向 概ねN-3°-Wであるが、北側が東へ湾曲する。形状等 長さ2.65m、最大上幅0.38m。最大下幅0.23m。最大深さ28cm。断面形状は逆台形で、底面はほぼ平坦。重複関係35号土坑と重複する。本遺構が新しい。出土遺物 なし。時期 時期を判断する根拠に乏しいが、覆土から古代の溝と推定される。

(3) 土坑、ピット、落ち込み

土坑が37基、ピットが56基、落ち込みが2ヶ所検出された(Fig.14~17、PL.4)。各遺構の規模等について

は計測表 (Tab. 3) に記載した。

51トレンチ

(1) 住居跡

1号住居跡 (Fig.18、PL.5)

位置 X309、Y303グリッド。主軸方向 N-7°-E。 形状等 明瞭にプランが確認できなかったが方形と考えられる。トレンチ内での規模は、東西(2.3) m、南北(2.0) m、壁高18cm。 床面 総社砂層漸移層に造られた地山床と推定される。電 調査区内では確認できなかったため不明。 重複関係 5 号溝跡と重複する。本遺構が古い。 出土遺物 須恵器(蓋・甕)、土師質土器(器種不明)破片が出土。 時期 不明。 10世紀代か。 その他 川砂で埋め戻されていたことから、昭和38に群馬大学により調査されていると考えられる。

(2) 掘立柱建物跡

6号掘立柱建物跡(Fig.18、巻頭カラー1・PL.5)

位置 $X309\sim311$ 、Y303グリッド。主軸方向 $N-95^\circ-E$ 。形状等 ほぼ東西方向に軸をとる柱穴列が検出されたことから、暫定的に掘立柱建物跡とした。柱穴列は2間分で、柱の心心で東西21.7mを測る。柱穴 本掘立柱建物跡に属する柱穴と認定したピットは3地点合計5基存在する。各柱穴の平面形状は、中央の柱穴(P_1)は円形であるが、左右の柱穴($P_2 \cdot P_4$)は隅丸の方形で P_1 よりも小さい。なお、 $P_2 \cdot P_4$ とそれぞれ重複する $P_3 \cdot P_5$ については楕円形もしくは隅丸の方形と推定される。柱穴の底面には当たりと考えられる硬化面がそれぞれに存在する。なお、 P_1 については遺構確認面のレベルで柱穴中央に楕円形の礫が存在したが、礎板の可能性がある。なお、土層の堆積状態から、2基の柱穴が重複している可能性も考えられる。すべての柱穴において抜き取りの痕跡は検出できなかった。各柱穴の規模等については計測表(Tab.3)に記載した。柱間の距離については、 $P_2 \cdot P_1$ 間で2.75m、 $P_3 \cdot P_1$ 間で3.00m、 $P_1 \cdot P_4$ 間で2.70m、 $P_1 \cdot P_5$ 間で2.60mを測る。 $P_2 \cdot P_4$ は柱の当たり部分が多少掘りこまれていた。重複関係 6 号溝跡と重複する。本遺構が新しいと考えられる。出土遺物 柱穴からから土師器小片・須恵器(蓋・甕)の破片が少量出土している。また、 P_2 の底面で10cm程度の須恵器甕の破片が出土している。時期 8世紀から9世紀代と推定される。

(3) 溝跡

1号溝跡 (Fig.19、巻頭カラー1)

位置 X311、Y303グリッド。主軸方向 N-4°-Eを測るがほぼ正方位。**形状等** 長さ(1.3) m、深さ 0.20m、最大上幅1.36m、最大下幅0.40m。断面は幅の広いU字形で、西側は二段になっていた。調査区北壁際 で底面が北に向かい傾斜していたことや平面形状から、溝の終息が近いことが推定される。南側については溝が トレンチ外へ続くことが推定される。覆土に $5\sim10$ cmの円礫が多く含まれていた。なお、2 号溝跡と平面的な連続性をもつ。出土遺物 土師器(坏・甕)破片、須恵器(蓋・坏・椀・大甕・羽釜)破片。時期 古代と推定される。幅の広い時期の遺物が出土しているため特定は難しいが、8世紀から9世紀にかけての時期と考えたい。

2号溝跡(Fig.19、巻頭カラー1)

位置 X311・312、Y303グリッド。主軸方向 正方位。形状等 長さ(1.3) m、深さ25cm、上段最大上幅 1.30m。下段最大幅0.65m、最大下幅0.45m。断面は幅の広いU字形で、東側は二段になっていた。北側・南側 ともに溝がトレンチ外へ続くことが推定される。覆土に5~10cmの円礫が多く含まれていた。なお、1号溝跡と 平面的な連続性をもつ。出土遺物 土師器(坏・甕・暗紋を有する土器)破片、須恵器(蓋・坏・鉢・瓶・大甕)破片、酸化焔焼成須恵器(椀)破片、灰釉陶器(椀)破片、須恵器転用取鍋破片が出土。時期 古代と推定 される。幅の広い時期の遺物が出土しているため特定は難しいが、8世紀から9世紀にかけての時期と考えたい。

3号溝跡 (Fig.19、巻頭カラー1)

位置 X312、Y303グリッド。主軸方向 N-8°-E。 形状等 プラン確認時は溝状を呈していたが、掘り下げてみた結果、底面は凹凸が激しく形状は溝状ではない。掘りこまれている範囲は長さ(1.50) m、最大幅 0.93m、最大深さ20cm。北側・南側ともに遺構がトレンチ外へ続くことが推定される。出土遺物 土師器(坏、甕)破片、須恵器(蓋・坏・鉢・甕)破片、灰釉陶器(椀)破片が出土。時期 古代と推定される。幅の広い時期の遺物が出土しているため特定は難しいが、8世紀から9世紀代にかけての時期と考えたい。その他 遺構を掘り下げた状態から、溝ではない可能性もある。

4号溝跡(Fig.19、PL. 巻頭カラー1)

位置 X312、Y303グリッド。主軸方向 正方位と考えられる。形状等 長さ(1.45)m、深さ27cm、最大上幅1.00m。最大下幅0.50m。断面はU字形。北側・南側ともに溝がトレンチ外へ続くことが推定される。出土遺物 土師器 (S字状口縁台付甕・坏・甕) 破片、須恵器 (蓋・坏・高坏・大甕) 破片が出土。時期 古代と推定される。幅の広い時期の遺物が出土しているため特定は難しいが、8世紀から9世紀にかけての時期と考えたい。

位置 X311、Y303グリッド。主軸方向 N—10°—E程度と推定される。形状等 プランは明瞭に把握できなかったが、長さ(3.6)m、深さ25cm、推定幅1m程度。底面が部分的に深くなる。重複関係 1号住居跡、1号土坑と重複する。本遺構が新しい。土層の観察によると、埋没が開始した1号住居跡に流れ込むように本遺構の覆土が堆積している。出土遺物 土師器 (器種不明)、須恵器 (蓋・坏・甕)、土師質土器 (器種不明・羽釜)、灰釉陶器 (椀) 破片が出土。時期 古代と推定されるが、10世紀代であろうか。その他 覆土がシルト質でラミナが観察できることから、水成層と考えられ、牛池川の洪水堆積物の可能性もある。

6号溝跡 (Fig.19、PL.6)

5号溝跡(Fig.19、PL.6)

位置 X310、Y303グリッド。主軸方向 N—15°—E。形状等 長さ4.4m、深さ10cm、最大上幅0.92m。最大下幅0.75m。断面は浅いU字形。北側・南側ともに溝がトレンチ外へ続くことが推定される。重複関係 6号掘立柱建物跡と重複する。本遺構が古いと考えられる。出土遺物 土師器・須恵器破片が少量出土。時期 古代と推定される。

(4) 井戸跡、土坑、ピット、落ち込み

井戸跡 1 基、土坑 2 基、ピット 2 基、落ち込み 1 ヶ所が検出された(Fig. $18\cdot 19$ 、PL. 5)。各遺構の規模等については計測表(Tab. 3)に記載した。

52トレンチ

(1) 溝跡

1号溝跡 (Fig.20、PL.6)

位置 X240・241、Y409~411グリッド。主軸方向 N—49°—E。形状等 トレンチ内で検出された長さ (6.72) m、最大上幅2.20m。最大下幅0.44m。最大深さ53.0cm。断面形状は広いV字形。溝は調査区内で終息しており、終点と溝の南側は二段になっていた。また、底面には溝と同軸で浅いピット状の掘り込みが2基検出された。掘り込みの間は心心で1.5m。重複関係 2号・3号溝跡と重複。本遺構が最も古い。出土遺物 土師器 (坏・甕) 破片、須恵器 (坏・椀・甕) 破片、酸化焰焼成須恵器 (坏・椀・羽釜) 破片、黒色土器 (椀) 破片、灰釉陶器 (椀) 破片、石製紡錘車、磨石、敲き石、青磁 (椀) 破片、茶臼破片が出土。時期 覆土および出土品から中世と推定される。

2号溝跡(Fig.20、PL.6)

位置 X241、Y410グリッド。**主軸方向** N−78°−E。**形状等** トレンチ内で検出された長さ2.35m、最大上

幅0.82m。最大下幅0.48m。最大深さ11.5cm。断面形状は逆台形で、底面はほぼ平坦。**重複関係** 1号・3号溝跡と重複。1号溝跡よりも新しい。3号溝跡よりも古い。**出土遺物** 土師器 (坏) 破片。**時期** 覆土から中世以後と推定される。

3号溝跡 (Fig.20、PL.3)

位置 X240・241、Y409~410グリッド。主軸方向 N—26°—W。形状等 トレンチ内で検出された長さ6.74m、最大上幅0.50m。最大下幅0.46m。最大深さ3.5cm。断面は浅いU字形で、南へ向かう程に遺構は次第に検出が困難になる状況から、遺構は耕作等により削られ消滅したと考えられる。重複関係 1号溝跡と重複。本遺構が新しい。出土遺物 なし。時期 中世以後と推定される。

(2) 道路跡

1号道路跡 (Fig.20)

位置 $X240 \cdot 241$ 、Y408グリッド。**主軸方向** N-58°-E。**形状等** 地山を最大1.85mの幅で掘り込み、その内側に波板状の掘り込みが確認できたことと、現況地形に沿った走行から、道路跡と判断した。**出土遺物** なし。**時期** 不明。

2号道路跡 (Fig. 20)

位置 X241、Y409グリッド。**主軸方向** $N-34^{\circ}-W$ 。**形状等** 道路遺構の可能性のある整地した地山面が検出されたことと、1 号道路跡と直交する走行から道路跡と判断した。**出土遺物** なし。**時期** 不明。

(3) 土坑、ピット、ピット列

土坑が3基、ピットが28基検出された (Fig.21、PL.7)。各遺構の規模等については計測表 (Tab.3) に記載した。表中のピットのうち5基は同軸上で並ぶことから一連のものとして捉えた。その性格としては柵列等が考えられるが性格が不明のため、ピット列と呼称することとした。なおピット間の距離は西から1.3m、1.8m、1.8mとなっている。時期的には覆土から中世と推定される。

53トレンチ(Fig.22、巻頭カラー2・PL.7)

(1) 調査結果

53トレンチの調査目的については、前述のとおりであるが、推定東山道駅路国府ルートの南に隣接した地点で縦4m、幅2mの範囲で掘り下げ、遺構の有無および土層確認を行った。

調査の結果、遺構は確認できなかった。

土層については、表土の最下位(Ⅱ a 層)で田の床土が検出された。トレンチの位置する場所の地目は田であり、近年まで水田耕作が行われていたことが推定される。その下位の層(Ⅱ b・Ⅱ c 層)は、灰黄色の強い砂を包含する粘質土層となっていた。その下層(Ⅲ層)も同様に砂を包含する黒褐色土層であったが、浅間A軽石を少量包含していた(早田 2019(本報告掲載))。その下層(Ⅳ層)は褐灰色のシルト質土で、高師小僧が多く見られた。その下層は砂層(V層)で、上部はシルト質土と砂が互層となって堆積していた。ラミナも水平に堆積していた。下部は砂が主体となって堆積しており、トレンチ西壁では北を上にして斜方向に堆積している状況が観察された。北壁では西を上にして斜方向に堆積していた。その下層は再度シルト質土層(Ⅵ層)となっていた。この層中でも少量ではあるが高師小僧が確認でき、砂礫を若干包含していた。なお、地表面から約1.6m付近まで掘り下げを行ったが、ピンポールによる探索の結果、トレンチ最深部から約80cmで硬い層に到達したことから、そこで河床もしくは基盤層(総社砂層:基本層序Ⅵ層)に到達するものと推定される。

調査の結果、53トレンチの位置する地点は旧流路(染谷川か)と推定され、その時期も砂層(V層)中から磁器の破片が出土したことや、Ⅲ層が浅間A軽石を包含していたことなどから、近世初頭頃まで流路であったと考えられる。なお、その後は流路であったのが葦原のような状態となり、徐々に離水(時期的には浅間A軽石の降

下(天明3 (1783) 年)前後を中心とした時期か)していき、それ以後水田として利用され、現在では水田耕作の中止や高燥化により畑として利用されている状況が考えられる。

54トレンチ

(1) 住居跡

1号住居跡 (Fig.23、PL.8)

位置 X203、Y314グリッド。主軸方向 N-80°-E。形状等 北壁のみ検出。方形と推定される。東西(1.87)m、南北(1.11)m。壁高22.5cm。床面 総社砂層に構築された貼床。竈 東壁に構築されていると推定される。調査区外のため不明。重複関係 2号・8号住居跡、1号道路遺構と重複する。2号・8号住居跡よりも新しく、1号道路跡よりも古い。出土遺物 土師器(坏・台付甕)破片、須恵器(蓋・坏・皿・椀・大甕)破片、酸化焔焼成須恵器(坏・皿)破片、灰釉陶器(椀)破片、緑釉陶器(椀)破片、瓦(平瓦)破片が出土。時期 9世紀後半と推定される。

2号住居跡(Fig.23、PL.8)

位置 X203、Y313・314グリッド。主軸方向 N-110°-Eと推定される。形状等 北壁と推定される立ち上がりが検出されたため住居跡としたが、住居跡としての明瞭な掘り形は確認できなかった。検出された立ち上がりおよび床と推定される平坦面の検出状態は、東西(1.64)m、南北(1.0)m。壁高18cm。床面 床面と推定される平坦面が浅間 C軽石混入黒色土層 (IV層) に構築されていた。硬化は顕著ではない。電 確認されていない。ただし、住居跡の範囲内において硬化した焼土面が検出された。重複関係 1号・8号住居跡、1号道路跡と重複する。8号住居跡よりも新しく、1号住居跡・1号道路遺構よりも古い。出土遺物 土師器(甕)破片、須恵器(蓋・坏・椀)破片、酸化焔焼成須恵器(坏・椀・皿)破片、灰釉陶器(蓋・椀)破片、瓦破片が出土。時期時期特定が難しいが9世紀代か。

3号住居跡(Fig.23、PL.8)

位置 X202・203、Y313グリッド。主軸方向・形状等 遺物の出土が顕著であったため住居跡と認定したが、平面形状が明確に確認できなかったため主軸方向や形状は不明。住居跡ではない可能性がある。重複関係 6号・8号住居跡、1号道路遺構と重複する。8号住居跡よりも新しく、6号住居跡・1号道路跡よりも古い。なお、4号住居跡との重複が考えられるが、新旧関係は不明。出土遺物 土師器(坏・放射状暗紋を有する坏・甕・台付甕)破片、須恵器(蓋・坏・椀・皿・長頸壺・円面硯)破片、酸化焔焼成須恵器(坏・椀・皿)破片、灰釉陶器(蓋・椀・瓶)破片、緑釉陶器(椀)破片、土師質土器(羽釜)破片、瓦破片、羽口破片、砥石、敲石、火打石?(石英)、銅製品(鋲)が出土。時期 9世紀から10世紀代と推定される。

4号住居跡(Fig.25、PL.8)

位置 X202、Y313グリッド。主軸方向・形状等 遺物の出土が顕著であったため住居跡と認定したが、平面形状が明確に確認できなかったため主軸方向や形状は不明。住居跡ではない可能性がある。重複関係 5号・7号・8号住居跡と重複する。8号住居跡よりも新しく、5号住居跡よりも古い。3号住居跡との重複関係が推定されるが、新旧関係は不明。出土遺物 土師器 (坏・甕)破片、須恵器 (蓋・坏・椀・皿・甕・瓶)破片、酸化焔焼成須恵器 (蓋・坏・椀・皿)破片、黒色土器 (椀)破片、灰釉陶器 (椀・甕)破片、緑釉陶器 (椀)破片、羽釜破片、瓦破片、敲石、台石、磨石、火打石? (チャート)が出土。時期 10世紀代と推定される。

5号住居跡(Fig.25、PL.8)

位置 X202、Y312・313グリッド。**主軸方向** N─90°─E。**形状等** 方形。東西(1.05)m、南北(2.86)m。壁 高(6.5) cm。**床面** 砂層への漸移層 (V層) に構築された地山床。硬化は顕著ではない。竃 東壁に構築されている。主軸方向はN─92°─E、全長105cm、最大幅(45cm)。**ピット等** 貯蔵穴と考えられるピットが1基住居

跡南東隅で検出された。その規模については計測表(Tab.3) に記載した。**重複関係** 4号・6号・7号住居跡、3号・4号・5号土坑と重複する。本遺構が最も新しい。出土遺物 土師器(坏・甕)破片、須恵器(蓋・坏・椀・羽釜)破片、酸化焔焼成須恵器(坏・羽釜)破片、黒色土器(椀)破片、羽口破片、瓦破片、駒?、砥石、滑石の小礫が出土。時期 出土遺物から10世紀前半と推定される。

6 号住居跡 (Fig.23)

位置 X202・203、Y312・313グリッド。主軸方向 N-89°-E。形状等 東壁のみを検出。方形と推定される。東西(2.82)m、南北(2.04)m。床面 総社砂層への漸移層(V層)に構築された貼床。竈 東壁に存在したと考えられるが未検出。周溝 東側で検出された。最大幅13cm、最大深さ5cm。重複関係 3号・5号・8号住居跡、1号道路跡と重複する。8号住居跡より新しく、5号住居跡、1号道路遺構より古い。出土遺物 土師器(坏・甕)破片、須恵器(蓋・坏・高坏・椀・皿・甕・円面硯)破片、酸化焔焼成須恵器(高台付皿・椀)破片、灰釉陶器(椀)、羽釜破片、瓦破片、羽口破片が出土。時期 出土遺物から9世紀後半と推定される。

7号住居跡 (Fig.25、PL.8)

位置 X200~202、Y312·313グリッド。主軸方向 N—83°—E。形状等 方形。東西[5.24] m、南北[2.42] m。壁高(1.5) cm。面積 [12.7] m。床面 総社砂層 (VI層) および砂層への漸移層 (VI層) に構築された貼床。電西壁の中央付近で検出された。ピット等 住居の西南隅、竈の左側でピットを1基検出した。その規模については計測表 (Tab.3) に記載した。重複関係 5号住居跡、3号・4号・5号・6号土坑と重複する。3号・4号・5号よりも新しく、5号住居跡・6号土坑よりも古い。出土遺物 土師器 (坏・甕) 破片、須恵器 (蓋・坏・椀・皿・甕・長頸壺?) 破片、酸化焔焼成須恵器 (蓋・椀・皿) 破片、黒色土器 (椀・盤)、灰釉陶器 (蓋・椀・甕) 破片、瓦破片、羽口破片、鉄製品 (鋤先?) が出土。時期 出土遺物から8世紀後半と推定される。8号住居跡 (Fig.25)

位置 X201~203、Y313グリッド。主軸方向 N—82°—E。形状等 北壁および東壁に付帯すると推定される 周溝状の遺構が検出されたことから住居跡とした。検出状態から平面形状は方形と推定される。東西[7.60]m、南北[4.40]m。床面・竈 トレンチ内では検出できなかった。周溝 最大幅20cm、最大深さ3cm。重複関係 1号・2号・3号・4号・6号住居跡、1号道路跡と重複する。本遺構が最も古い。出土遺物 土師器 (坏・甕)破片、須恵器 (蓋・坏・甕)破片が出土。時期 出土遺物が少なく時期特定が難しいが8世紀から9世紀代と推定される。

(2) 掘立柱建物跡

1号掘立柱建物跡(Fig.24、巻頭カラー2)

位置 X203、Y312グリッド。主軸方向等 柱痕および柱穴の当たりが認められるピットが検出された。検出状態からこのピットは掘立柱建物の柱穴と推定され、このピットの方向や、連続性をもつピットが調査区内で検出できなかったことから、このピットは掘立柱建物跡の南西隅の柱穴と考えられ、ピットの向きから掘立柱建物跡は正方位を意識して建てられたとものと推定される。柱穴 柱穴は隅丸方形に近い形状を呈する。柱痕の覆土に焼土ブロック、灰、炭化物が多量に含まれており、その底面において柱の当たりが認められた。なお、柱穴の規模については計測表(Tab.3)に記載した。重複関係 1号道路跡、2号土坑と重複する。本遺構は2号土坑よりも新しいが、1号道路跡よりも古い。出土遺物 須恵器(蓋・坏・甕)破片等が少量出土した。時期 古代と推定されるが、遺物が少ないため詳しい時期は不明。

(3) 溝跡

1号溝跡 (Fig.26、PL.9)

位置 X199、Y312·313グリッド。**主軸方向** N─32°─W。**形状等** 深さ40cm 最大上幅2.0m。断面は逆台形。 **重複関係** 3 号溝跡、1号井戸跡と重複する。本遺構が最も古い。**出土遺物** 土師器(坏・甕)破片、須恵器 (蓋、坏、椀)破片、酸化焔焼成須恵器(坏・椀)破片、黒色土器(椀)破片、瓦破片、鉄滓が出土。**時期** 古代と推定されるが詳細な時期は不明。**その他** 覆土の状態から人為的に埋められたことが推定される。

2号溝跡(Fig.26、巻頭カラー2・PL.9)

位置 X199、Y312・313グリッド。主軸方向 N-2°-W。形状等 トレンチ内で確認できる規模では、長さ1.92m、深さ48cm、最大上幅0.9m。最大下幅0.16m。断面はV字形。重複関係 9号土坑、3号ピットと重複する。本遺構が最も新しい。出土遺物 土師器 (坏、甕) 破片、須恵器 (蓋・坏・椀・甕) 破片、酸化焔焼成須恵器 (椀) 破片、黒色土器 (坏・椀) 破片、灰釉陶器 (蓋) 破片、緑釉陶器 (椀) 破片、瓦破片、鉄滓が出土。時期 出土遺物からは新しくとも10世紀代が推定されるが、覆土に浅間B軽石が含まれる。古代末か。

3号溝跡 (Fig.26、巻頭カラー2・PL.9)

位置 X199、Y312・313グリッド。主軸方向 N-2°-W。形状等 トレンチ内で確認できる規模では、長さ 2.62m、深さ46cm、最大上幅0.97m。最大下幅0.45m。断面は逆台形。重複関係 1号溝跡と重複する。本遺構 が新しい。出土遺物 なし。ただし、遺構の切り合い関係から、1号溝跡の遺物に3号溝跡の遺物が多少は含まれていることが推定される。時期 出土遺物からは新しくとも10世紀代が推定されるが、覆土に浅間B軽石が含まれる。古代末か。

(4) 道路跡

1号道路跡 (Fig.24、PL.8)

位置 X203、Y312~314グリッド。主軸方向 N—20°—W。形状等 トレンチ内で確認できる規模では、長さ5.6m、最大幅1.32m。硬化面が帯状に拡がり、側溝は確認されなかった。硬化面は部分的に酸化し鉄分が凝集していた。重複関係 1号・2号・3号・6号・8号住居跡、1号・2号土坑と重複する。本遺構が最も新しい。出土遺物 出土遺物は道路面(硬化面)直上および硬化面中から遺物が出土した。土師器(坏・甕)破片、須恵器(蓋・坏・甕・椀)破片、酸化焔焼成須恵器(坏、椀)、灰釉陶器(蓋・椀)破片、緑釉陶器(椀)破片、瓦破片、羽口破片、敲き石、銅製品が出土。特に道路面直上には、酸化焔焼成須恵器の坏を中心とした細かい土器片が多量に認められた。時期 古代末と推定される。他の遺構との重複関係や土層の堆積状態から、10世紀代以降に機能していたものと考えられる。

(5) 土坑、ピット及びピット列

土坑が 9 基、ピットが 7 基、ピット列が一条検出された(Fig. $23\sim26$ 、PL. $8\cdot9$)。各遺構の規模等については計測表(Tab. 3)に記載した。

ピット列(Fig.23・24、巻頭カラー2・PL.9)

位置 X203、 $Y312\sim314$ グリッド。主軸方向 N-4°-W。形状等 ほぼ円形のピットが同軸上に 3 基連続する。そのうち、最も北のピットはほぼ同位置にわずかに位置をずらして 3 基が重複していた。ピット間は南から、2.1m、3.0mである。重複関係 1 号・2 号・3 号・6 号・8 号住居跡、1 号道路跡、1 号土坑と重複する。 1 号・2 号・3 号・6 号・8 号住居跡、1 号土坑よりも新しく、1 号道路遺構よりも古い。時期 古代と推定される。重複する遺構との関係から10世紀代と考えられる。

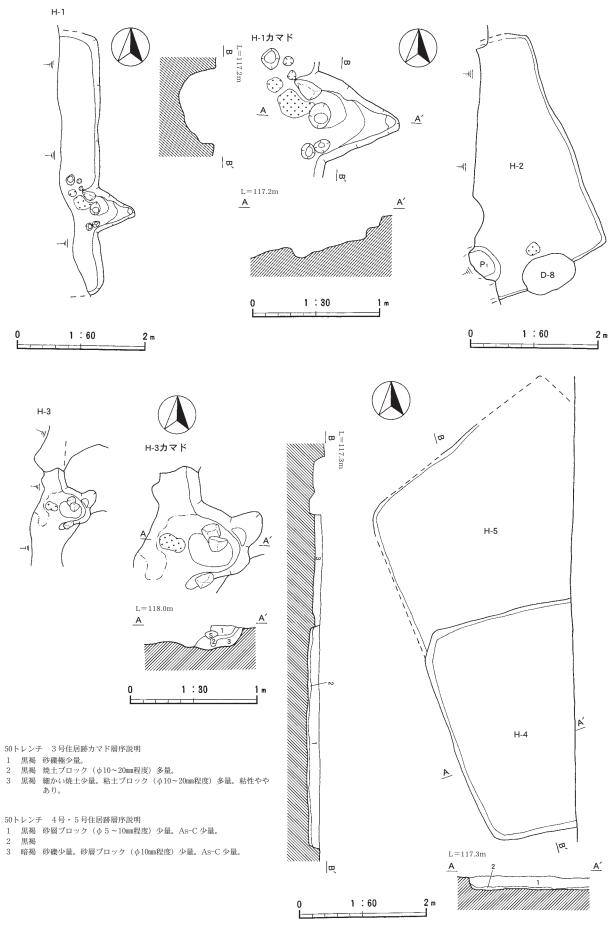


Fig. 9 50トレンチ各遺構(1)

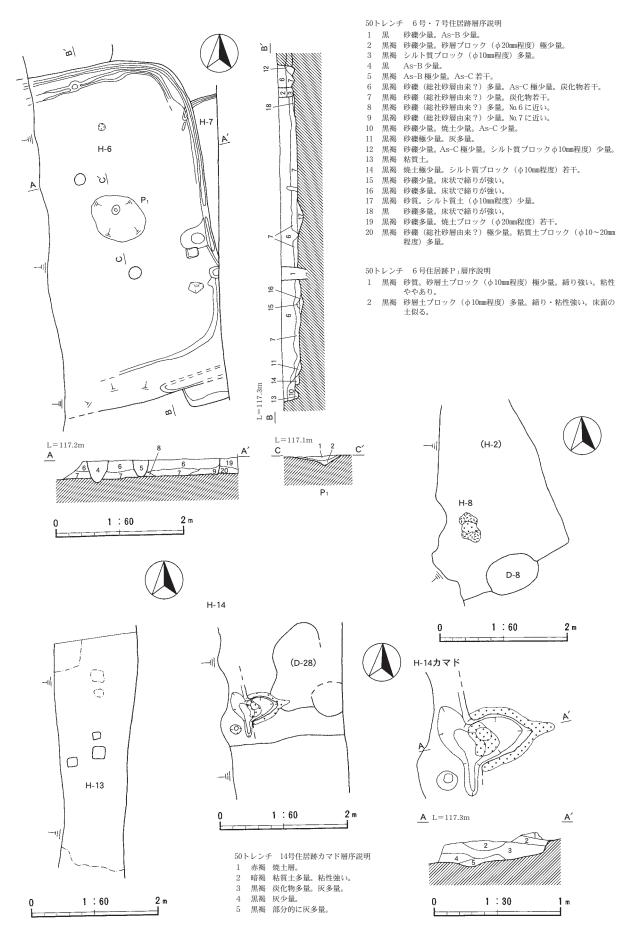


Fig. 10 50トレンチ各遺構(2)

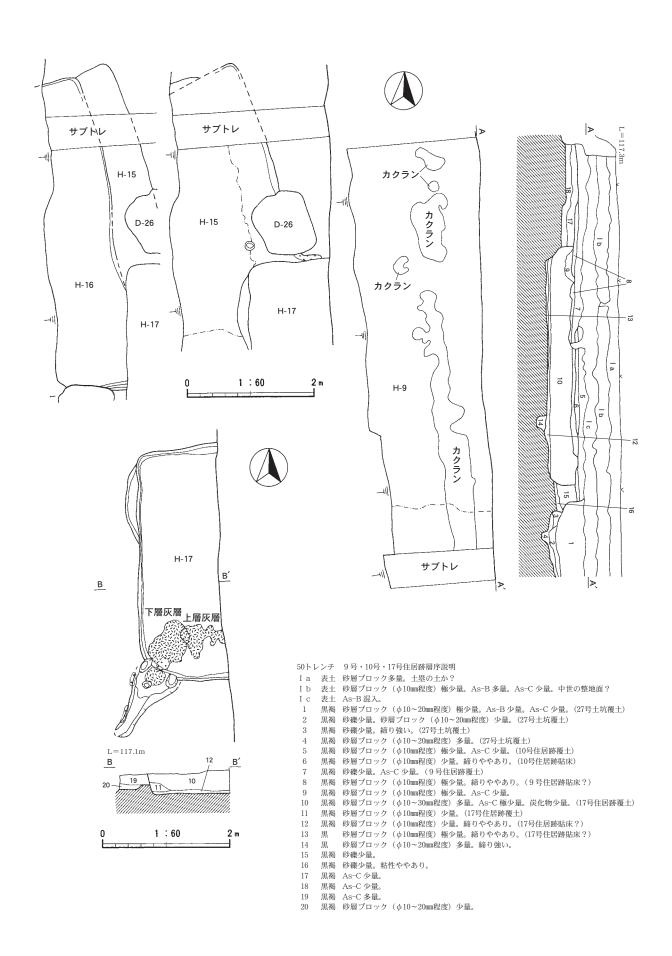


Fig. 11 50トレンチ各遺構(3)

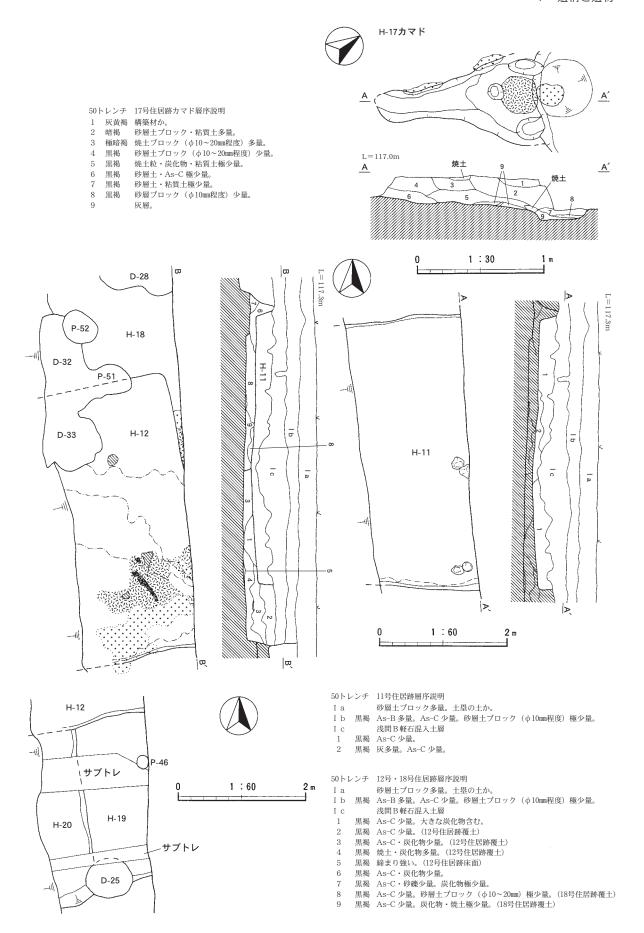


Fig. 12 50トレンチ各遺構(4)

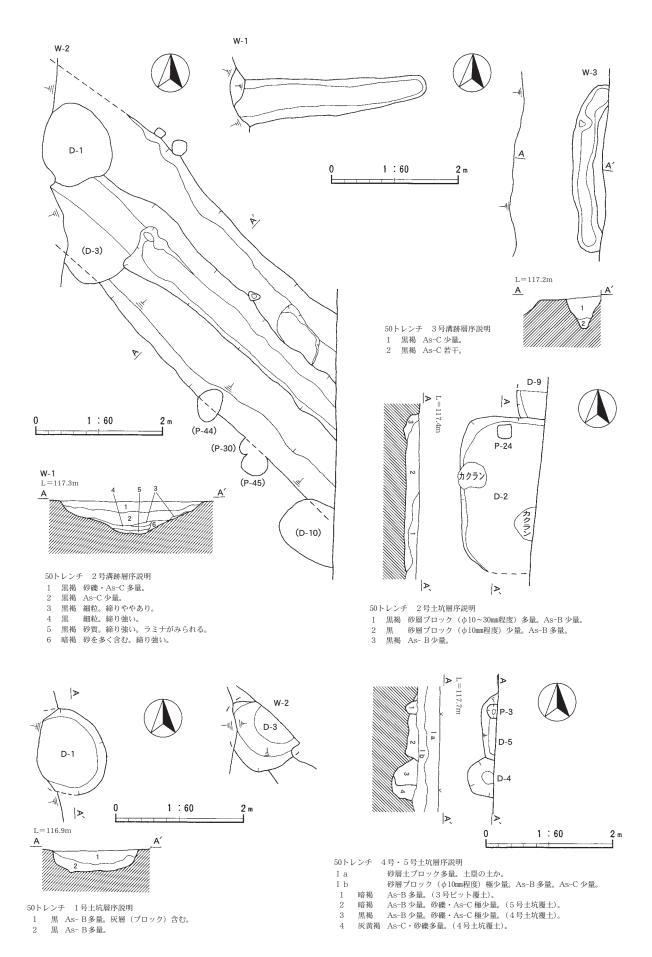


Fig. 13 50トレンチ各遺構(5)

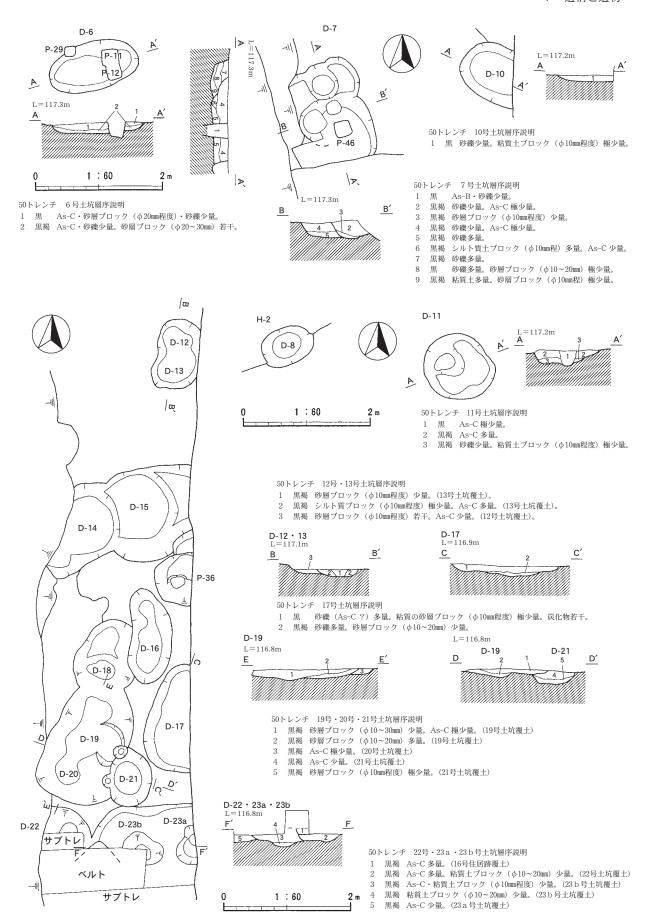


Fig. 14 50トレンチ各遺構(6)

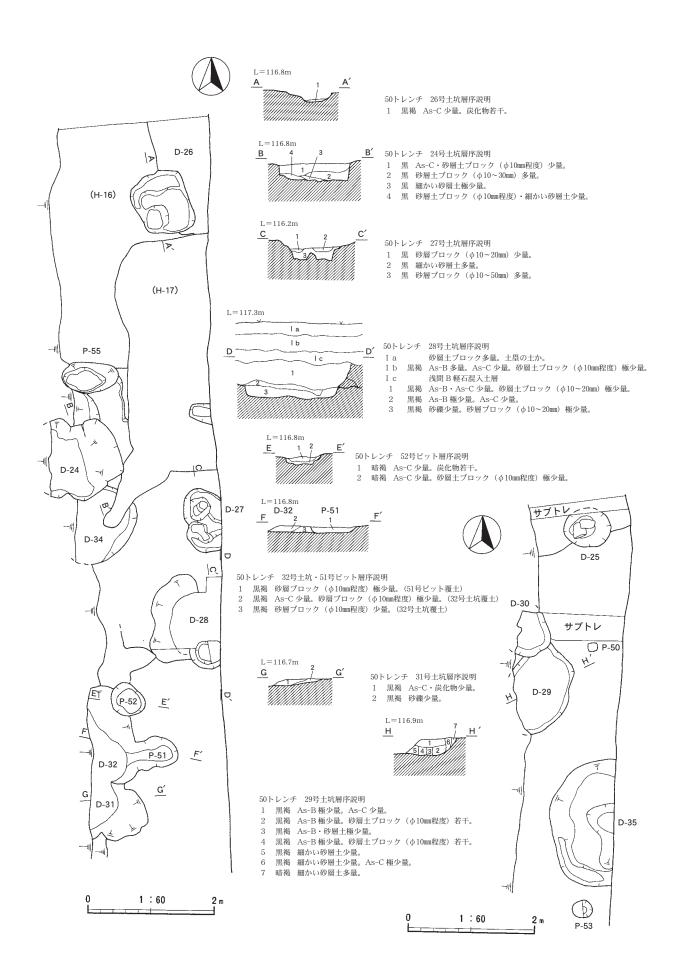


Fig. 15 50トレンチ各遺構(7)

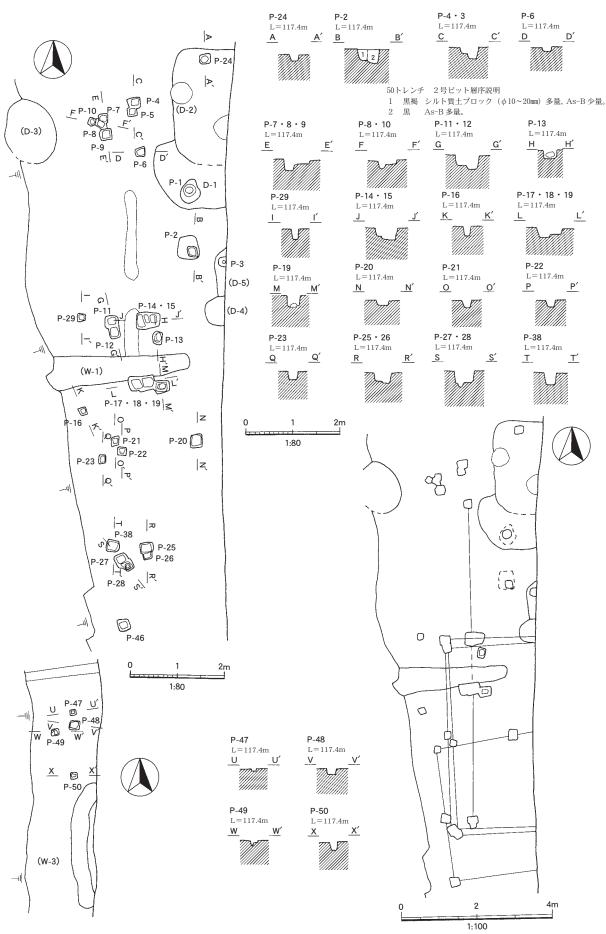


Fig. 16 50トレンチ各遺構(8)

掘立柱建物跡試案

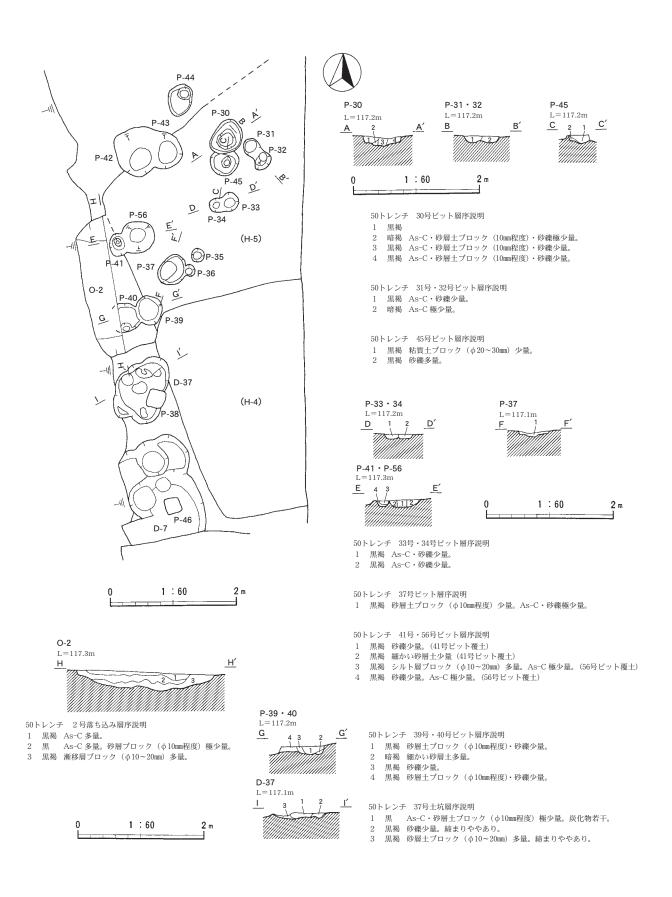
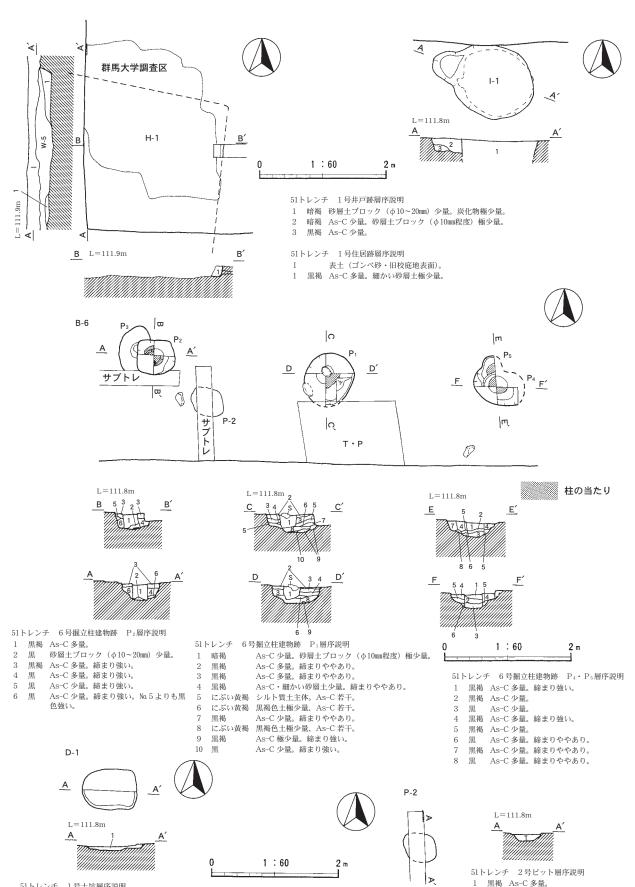


Fig. 17 50トレンチ各遺構(9)



51トレンチ 1号土坑層序説明

1 黒褐 As-C・砂層土ブロック (φ10mm程度) 多量。

Fig. 18 51トレンチ各遺構(1)

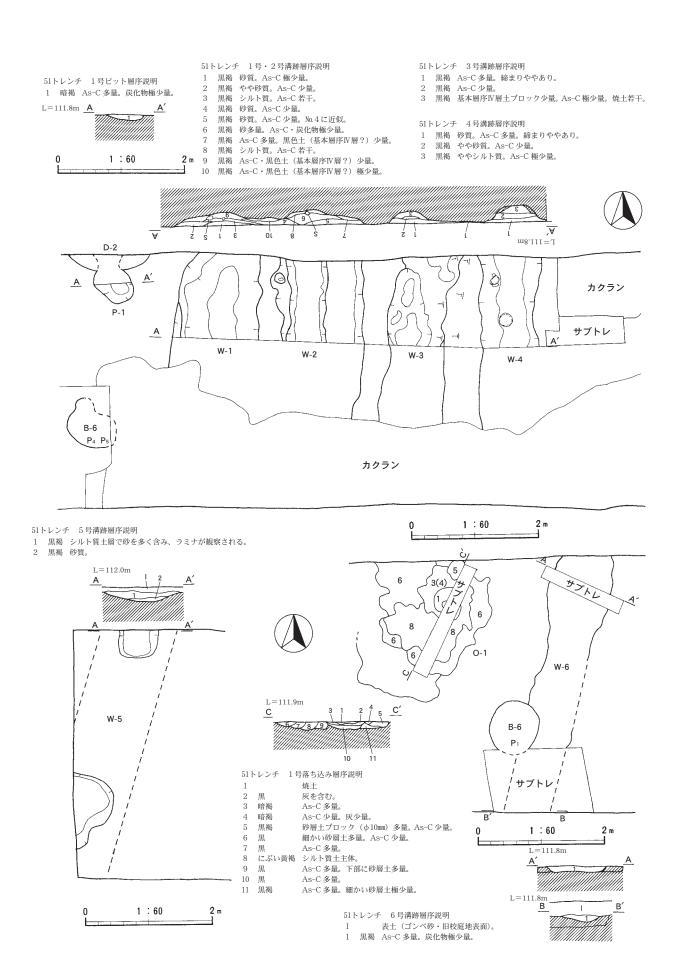


Fig. 19 51トレンチ各遺構(2)

52トレンチ

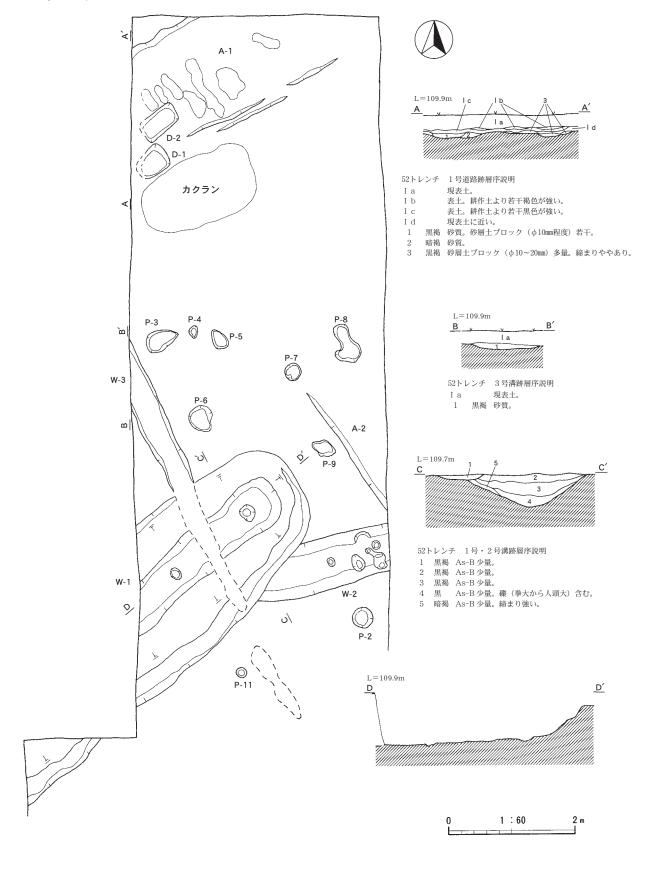


Fig. 20 52トレンチ各遺構(1)

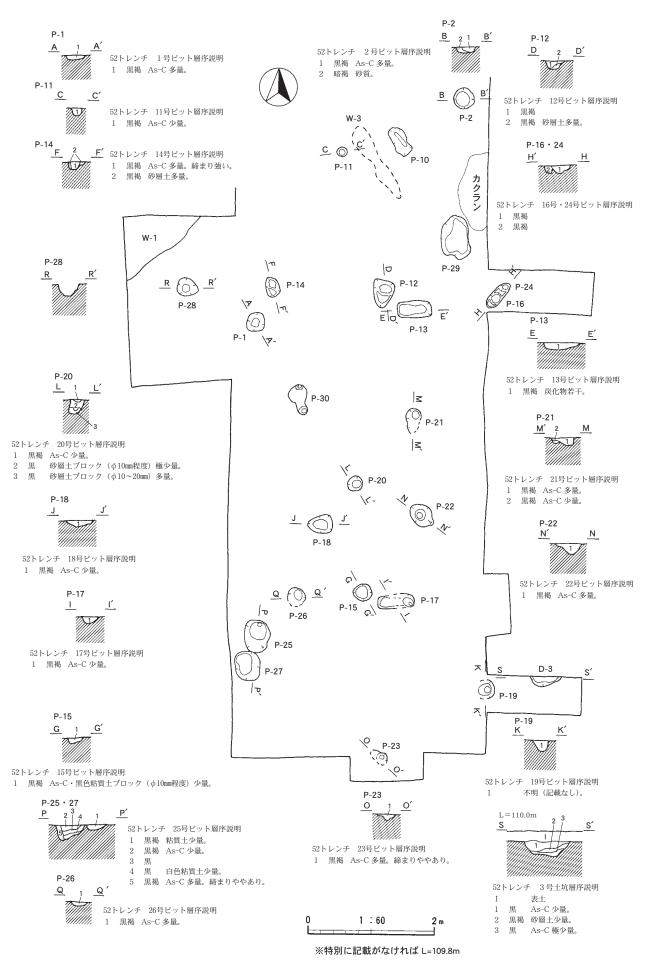
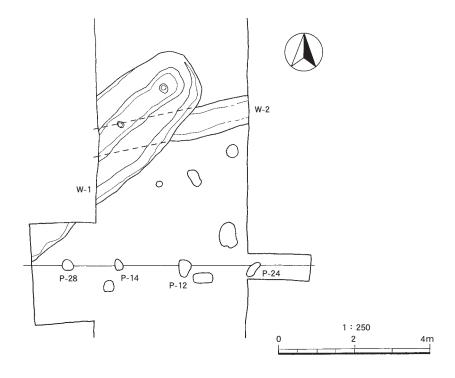


Fig. 21 52トレンチ各遺構(2)

52トレンチ ピット列検出状態



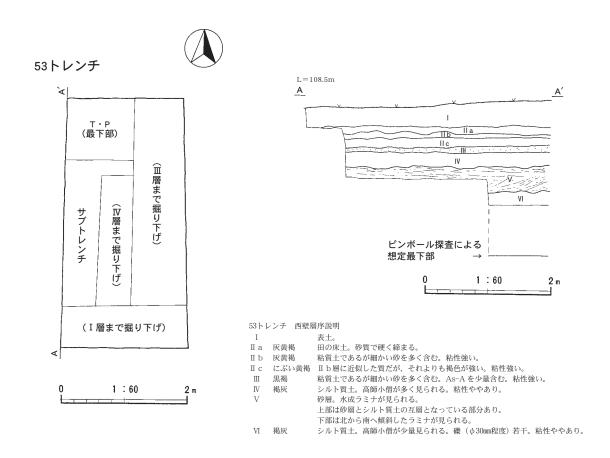


Fig. 22 53トレンチ各遺構

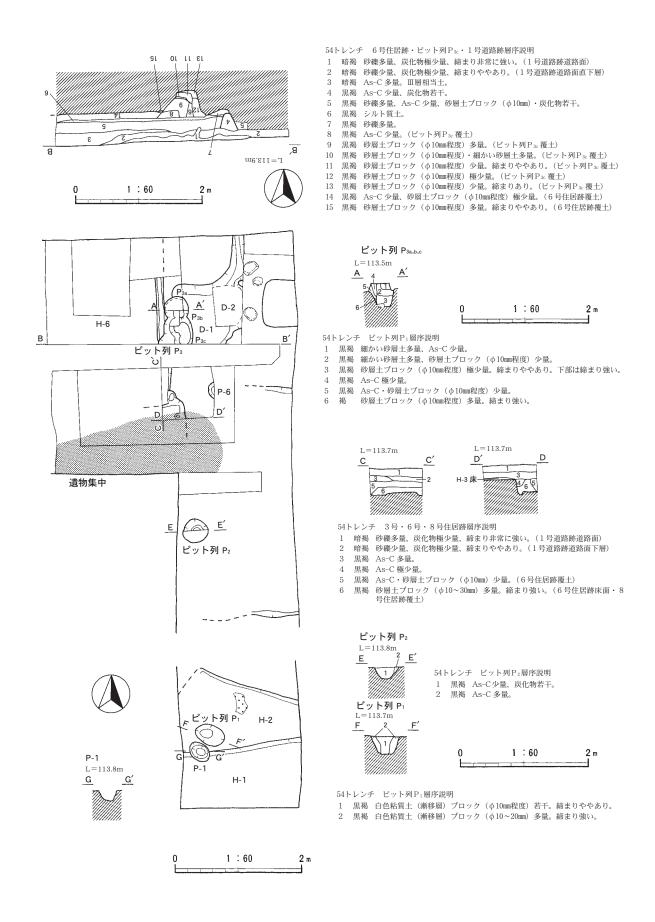


Fig. 23 54トレンチ各遺構(1)

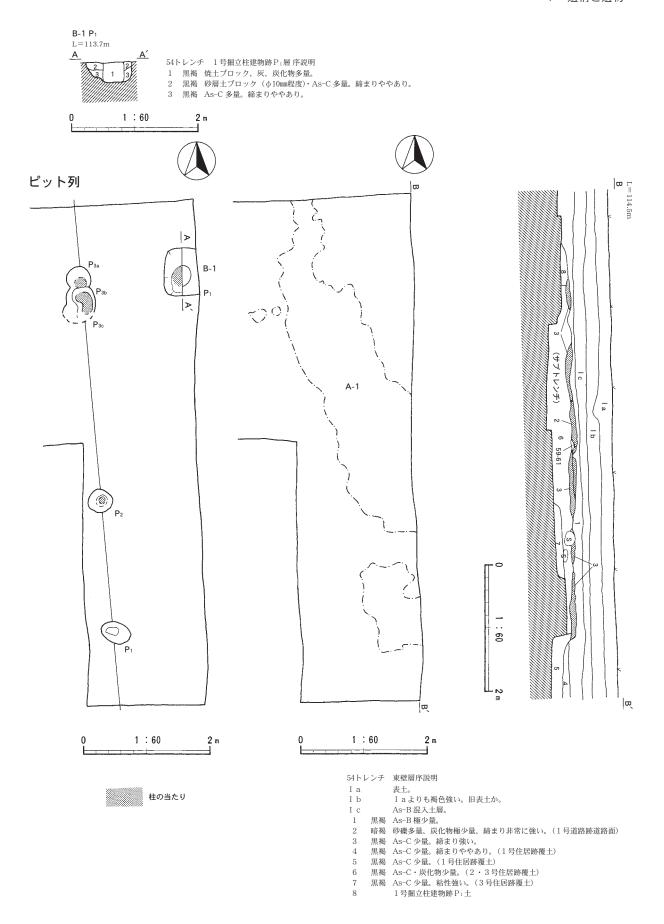


Fig. 24 54トレンチ各遺構(2)

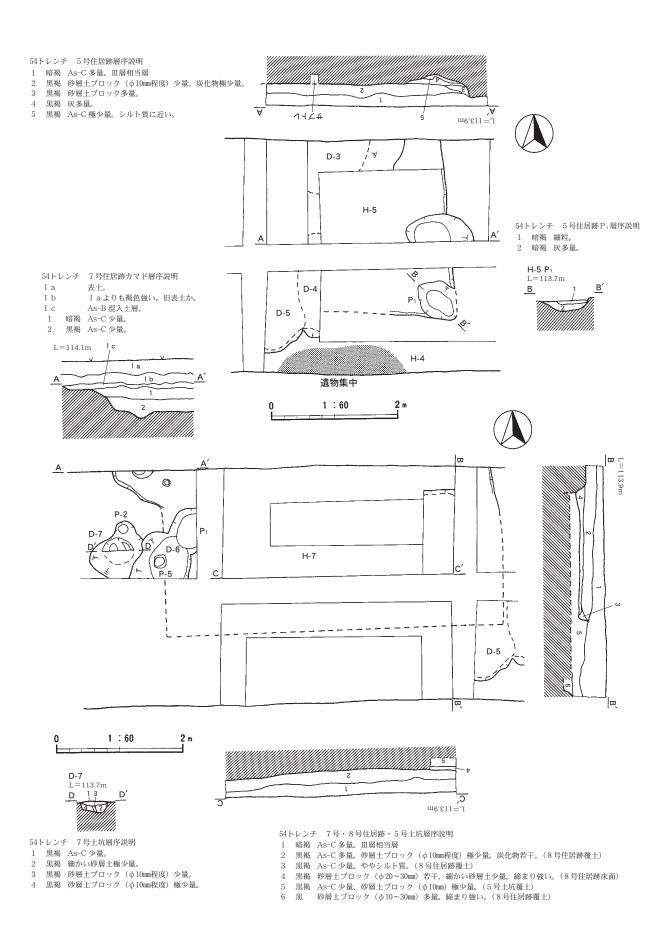


Fig. 25 54トレンチ各遺構(3)

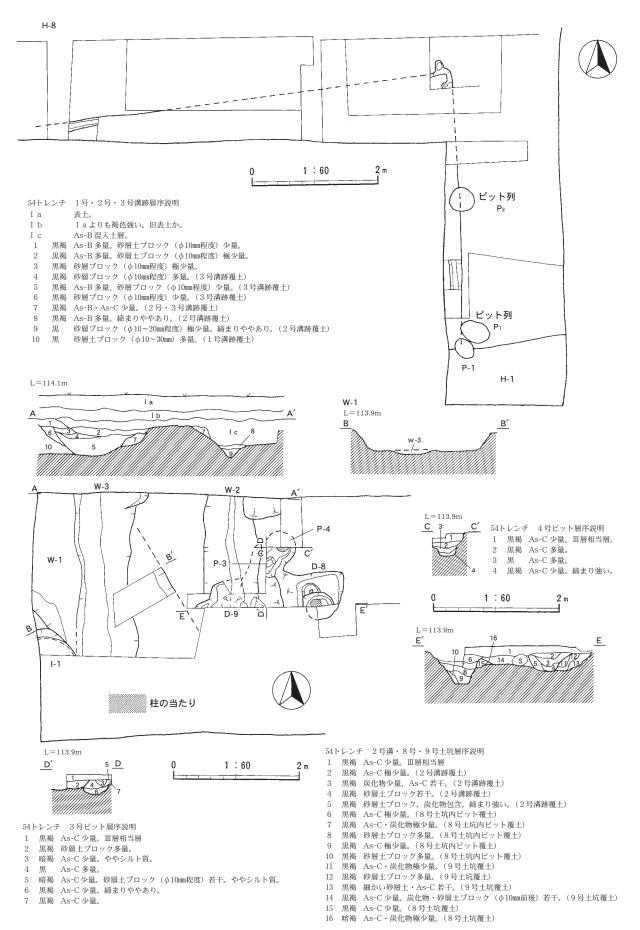


Fig. 26 54トレンチ各遺構(4)

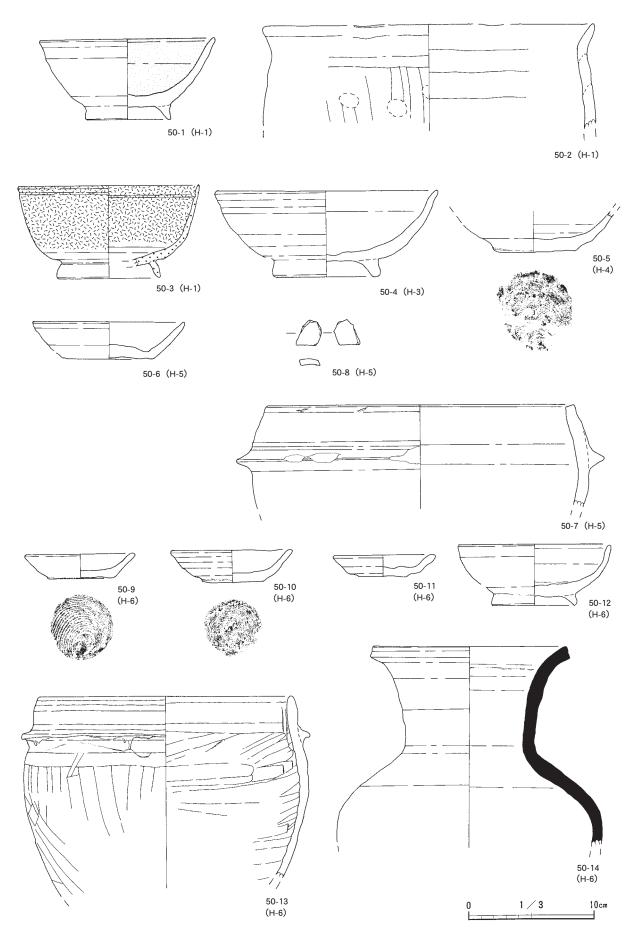


Fig. 27 遺物実測図 (50トレンチ①)

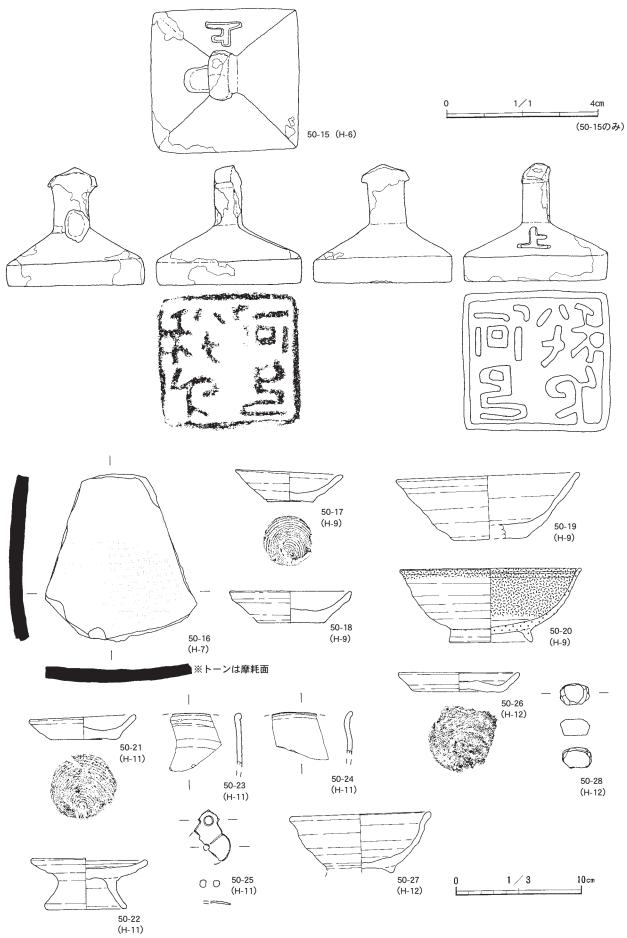


Fig. 28 遺物実測図 (50トレンチ②)

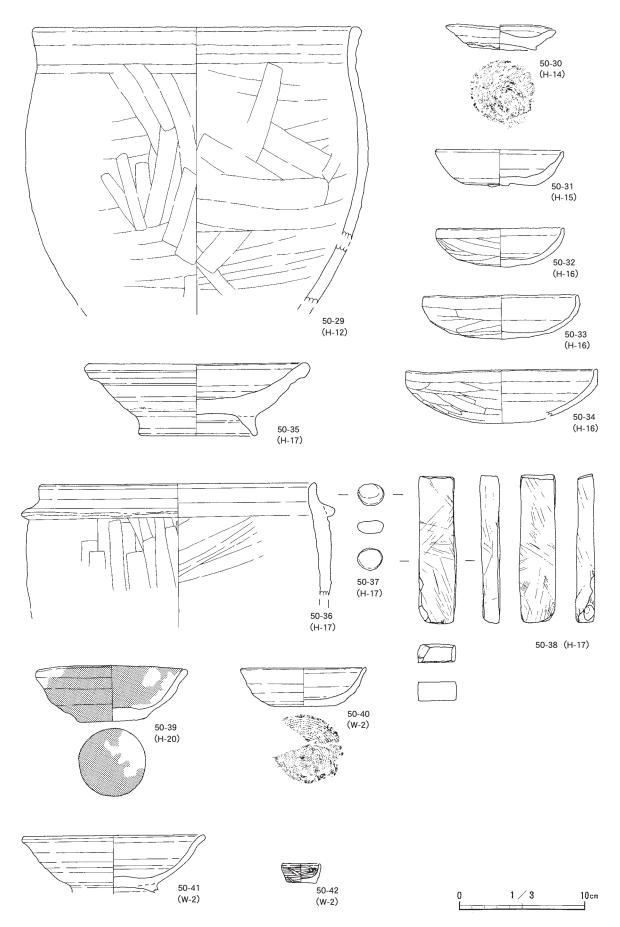


Fig. 29 遺物実測図 (50トレンチ③)

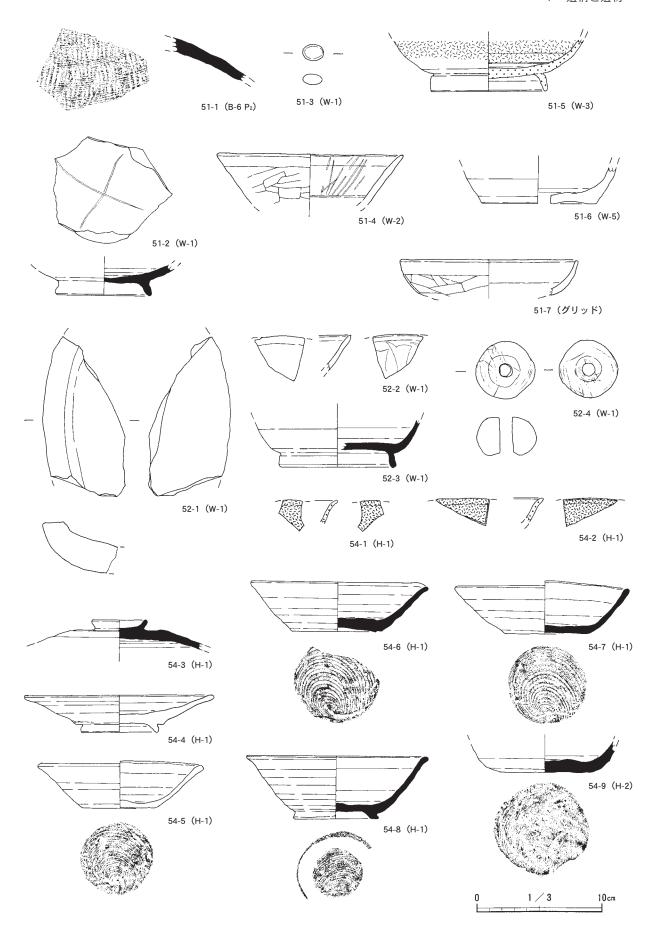


Fig. 30 遺物実測図 (51・52・54トレンチ①)

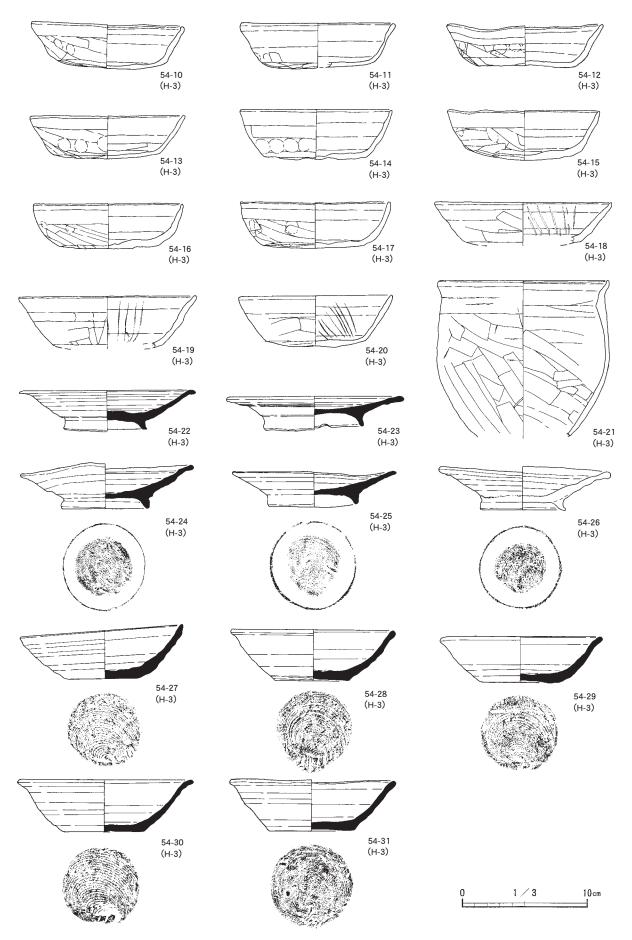


Fig. 31 遺物実測図 (54トレンチ②)

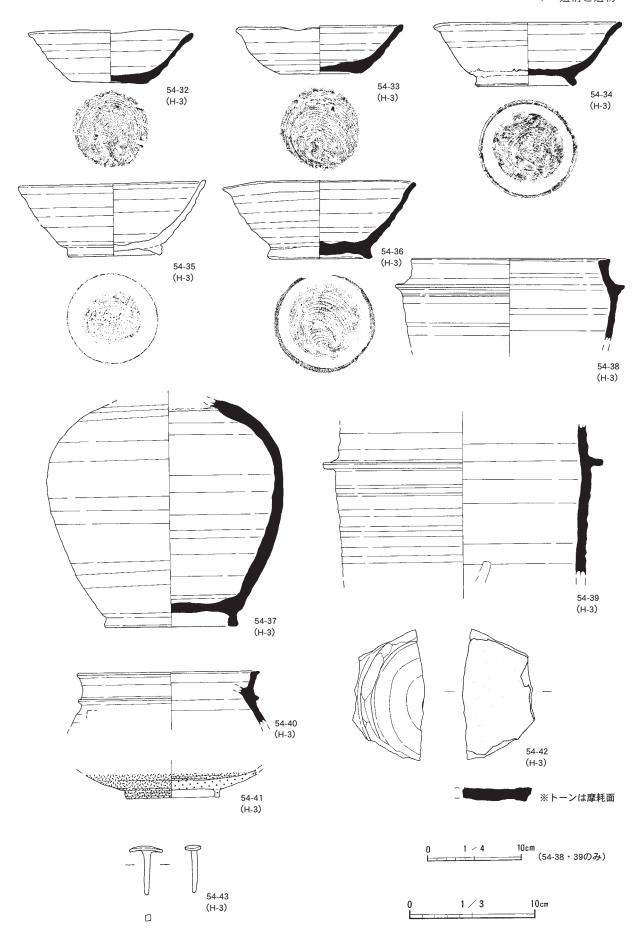


Fig. 32 遺物実測図 (54トレンチ③)

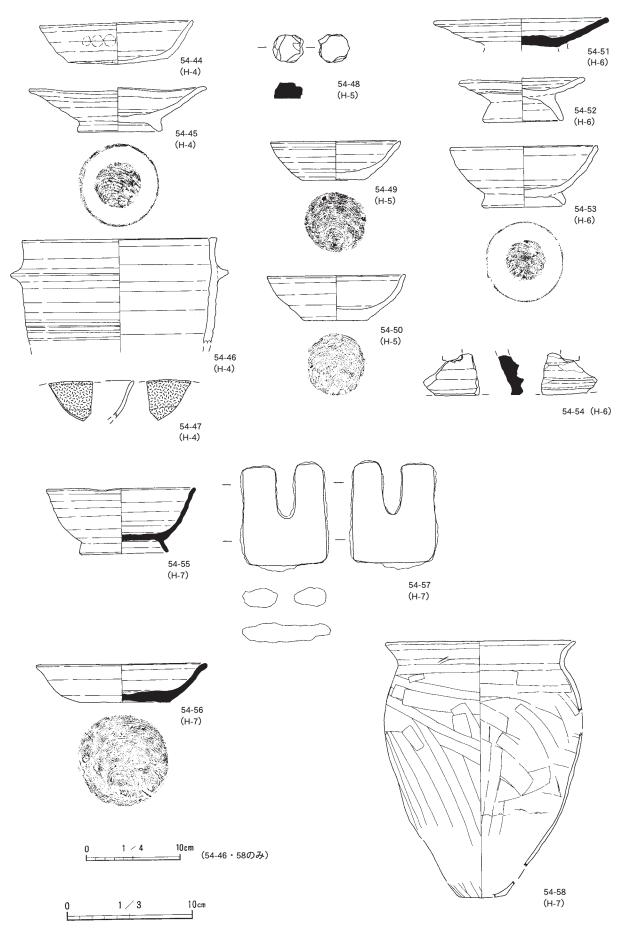


Fig. 33 遺物実測図 (54トレンチ④)

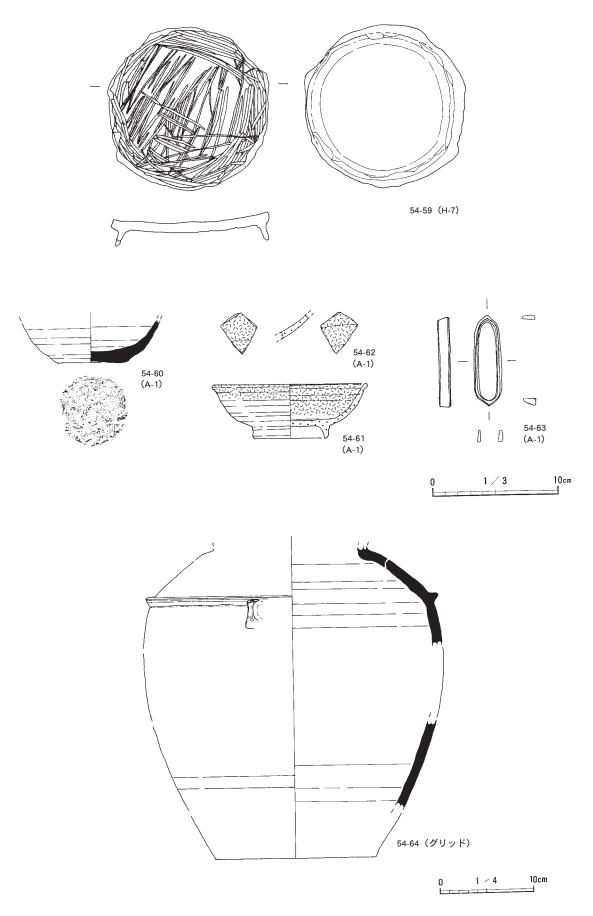


Fig. 34 遺物実測図 (54トレンチ⑤)

Tab. 3 井戸跡・土坑・ピット・落ち込み計測表 50トレンチ

土坑	

遺構名	位	置	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	形状	主な出土遺物	備考
D-1	X 187	Y 195	135.0	111.0	34.0	楕円形	土師器 (坏・甕)、須恵器 (甕)、酸化焰焼成須恵器 (椀) 破片。	
D-2	X 188	Y 194•195	[256.0]	(132.0)	22.5	不定形	土師器 (坏・甕)、須恵器 (甕)、酸化焰焼成須恵器 (坏)、カワラケ、白磁、瓦破片。	
D-3	X 187	Y 195	125.0	(86.0)	32.0	楕円形	なし。	
D-4	X 188	Y 196	(59.0)	(41.0)	39.0	楕円形	土師器(坏・甕)破片。	
D-5	X 188	Y 196	104.0	(25.0)	22.0	楕円形	なし。	
D-6	X 187	Y 196	142.0	79.0	18.0	楕円形	なし。	
D-7	X 187	Y 197	160.0	108.0	29.0	不定形	土師器 (坏・甕)、須恵器 (甕)、酸化焰焼成須恵器 (坏・椀) 破片、石製品?。	
D-8	X 187 • 188	Y 200	85.0	56.0	50.0	楕円形	なし。	
D-9	X 188	Y 194	(48.0)	(43.0)	12.5	楕円形	なし。	
D—10	X 188	Y 196	(93.0)	(86.0)	11.0	不定形	土師器(坏・甕)、酸化焰焼成須恵器(椀)、瓦破片。	
D—11	X 188	Y 199	105.0	102.0	25.0	円形	なし。	
D—12	X 188	Y 199	(64.0)	(45.0)	6.0	楕円形	なし。	
D—13	X 188	Y 200	(73.0)	63.0	11.0	楕円形	なし。	
D—14	X 187	Y 200	148.0	(90.0)	59.5	楕円形	なし。	
D—15	X 187 • 188	Y 200	(115.0)	148.0	22.0	楕円形	なし。	
D—16	X 188	Y 200 • 201	147.0	64.0	8.0	楕円形	なし。	
D—17	X 188	Y 201	180.0	(73.0)	17.0	楕円形	なし。	
D—18	X 187	Y 201	[117.0]	98.0	15.0	楕円形	なし。	
D—19	X 187	Y 201	184.0	(110.0)	18.0	楕円形	土師器(坏)破片。	
D—20	X 187	Y 201	[76.0]	(24.0)	9.0	楕円形	なし。	
D—21	X 187 • 188	Y 201	85.0	69.0	21.0	楕円形	なし。	
D—22	X 187	Y 201	(72.0)	(42.0)	10.0	楕円形	須恵器 (甕)、瓦破片。	
D—23a	X 187 • 188	Y 201	62.0	33.0	13.5	不定形	須恵器(甕)破片。	
D—23b	X 187 • 188	Y 201	65.0	45.0	13.5	楕円形	なし。	
D-24	X 187	Y 203	(120.0)	112	28.0	不定形	土師器(坏・甕)、須恵器(坏・盤・瓶・甕)破片。砥 石、蔵き石、小礫。	
D—25	X 188	Y 206	74.0	[55.0]	23.0	楕円形	酸化焰焼成須恵器(坏・椀)破片。	
D—26	X 188	Y 202	98.0	87.0	24.0	方形	土師器 (坏・甕)、須恵器 (坏)、酸化焰焼成須恵器 (坏・椀)、黒色土器、瓦破片。鉄製品。	
D—27	X 188	Y 203	98.0	(56.0)	36.5	楕円形	土師器 (坏・甕)、須恵器 (甕)、酸化焰焼成須恵器 (坏・椀・羽釜)、黒色土器、灰釉陶器 (椀) 破片。	
D—28	X 188	Y 204	152.0	115.0	33.0	不定形	土師器 (坏・甕)、須惠器 (甕)、酸化焰焼成須惠器 (坏・椀) 破片。	
D—29	X 188	Y 206 • 207	(111.0)	105.0	25.0	楕円形	なし。	
D-30	X 188	Y 206	(70.0)	(47.0)	14.0	楕円形	なし。	
D-31	X 187	Y 204 • 205	(81.0)	(56.0)	10.0	不定形	土師器 (甕)、酸化焰焼成須恵器 (椀)、黒色土器破片。	
D-32	X 187	Y 204	143.0	(67.0)	9.0	不定形	酸化焰焼成須恵器(椀)破片。	
D-33	X 188	Y 199	68.0	34.0	20.5	方形	土師器(坏・甕)、酸化焰焼成須恵器、瓦破片。	
D-34	X 188	Y 203	124.0	90.0	14.0	楕円形	土師器 (甕)、酸化炎焼成須恵器 (坏) 破片。	
D-35	X 188	Y 207	199.0	101.0	42.0	楕円形	なし。	
D-36	X 188	Y 200	82.0	(58.0)	38.5	楕円形	土師器(坏・甕)、須恵器(甕)破片。	
D—37	X 187	Y 201	95.0	90.0	10.0	不定形	土師器 (甕)、須恵器 (椀)、酸化炎焼成須恵器 (椀)、 瓦破片。	

ピット

遺構名	位	置	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	形状	主な出土遺物	備考
P-1	X 188	Y 195	50.0	43.0	22.5	楕円形	なし。	
P-2	X 188	Y 195	86.0	59.0	30.5	楕円形	なし。	
P-3	X 188	Y 195	23.0	(14.0)	16.5	円形	土師器(坏・甕)破片。	
P-4	X 187	Y 194	27.0	22.0	26.0	方形	なし。	
P-5	X 187	Y 195	21.0	(18.0)	14.0	方形	なし。	
P-6	X 187	Y 195	22.0	19.0	11.0	方形	なし。	

							T
P-7	X 187	Y 195	18.0	[18.0]	8.5	方形	なし。
P-8	X 187	Y 195	26.0	15.0	7.0	方形	なし。
P-9	X 187	Y 195	26.0	23.0	25.0	方形	なし。
P—10	X 187	Y 195	17.0	17.0	16.5	方形	なし。
P—11	X 187	Y 196	28.0	26.0	28.5	方形	なし。
P—12	X 187	Y 196	(24.0)	23.0	21.5	方形	なし。
P—13	X 187	Y 196	27.0	21.0	20.0	方形	土師器(坏・甕)破片。
P-14	X 187	Y 196	34.0	18.0	18.0	方形	なし。
P-15	X 187	Y 196	(32.0)	32.0	27.0	方形	酸化焰焼成須恵器(椀)破片。
P—16	X 187	Y 196	18.0	15.0	20.0	方形	なし。
P—17	X 187	Y 196	30.0	29.0	20.0	方形	なし。
P—18	X 187	Y 196	30.0	(27.0)	15.5	方形	なし。
P-19	X 187	Y 196	33.0	31.0	25.0	方形	なし。
P-20	X 188	Y 196	28.0	23.0	10.0	方形	なし。
P-21	X 187	Y 196	19.0	16.0	16.5	方形	なし。
P-22	X 187	Y 196	19.0	19.0	21.0	方形	須恵器 (甕) 破片。
P-23	X 187	Y 196	23.0	15.0	18.0	方形	なし。
P-24	X 188	Y 194	25.0	21.0	14.0	方形	酸化焰焼成須恵器(椀)破片。
P-25	X 187	Y 197	26.0	20.0	19.5	方形	土師器(甕)破片、酸化焰焼成須恵器(坏)破片。
P-26	X 187	Y 197	17.0	(14.0)	17.5	方形	なし。
P-27	X 187	Y 197	27.0	(21.0)	24.5	方形	土師器小片。
P—28	X 187	Y 197	23.0	20.0	24.5	方形	なし。
P-29	X 187	Y 196	18.0	16.0	20.0	方形	なし。
P-30	X 187	Y 196	57.0	46.0	14.0	楕円形	土師器(坏)破片。
P-31	X 188	Y 196	(25.0)	25.0	11.0	円形	なし。
P-32	X 188	Y 196	30.0	29.0	10.0	円形	なし。
P-33	X 187	Y 196	27.0	25.0	8.0	円形	なし。
P-34	X 187	Y 196	(21.0)	21.0	6.0	円形	なし。
P-35	X 187	Y 196	19.0	19.0	10.5	円形	なし。
P-36	X 187	Y 196	(15.0)	15.0	8.5	円形	なし。
P-37	X 187	Y 196	51.0	43.0	6.0	楕円形	なし。
P-38	X 187	Y 197	26.0	23.0	29.5	方形	なし。
P-39	X 187	Y 196 • 197	47.0	42.0	12.0	円形	なし。
P-40	X 187	Y 196 • 197	(30.0)	43.0	10.0	楕円形	なし。
P-41	X 187	Y 196	35.0	22.0	8.0	楕円形	なし。
P-42	X 187	Y 196	80.0	(59.0)	16.5	不定形	なし。
P-43	X 187	Y 196	56.0	(46.0)	25.0	楕円形	なし。
P-44	X 187	Y 196	50.0	38.0	29.5	楕円形	なし。
P-45	X 187	Y 196	43.0	35.0	14.0	円形	なし。
P-46	X 188	Y 205	20.0	19.0	_	円形	なし。 、、
P-47	X 188	Y 206	12.0	11.0	5.5	方形	なし。
P-48	X 188	Y 206	21.0	18.0	14.5	方形	なし。
P-49	X 188	Y 206	16.0	13.0	12.0	方形	なし。
P-50	X 188	Y 206	15.0	14.0	18.5	方形	なし。
P-51	X 188	Y 204	75.0	49.0	9.0	楕円形	なし。
P-52	X 188	Y 204	55.0	50.0	17.5	円形	なし。
P-53	X 188	Y 207	34.0	28.0	16.0	円形	なし。
P-54	X 188	Y 202	16.0	14.0		円形	なし。
P-55	X 187	Y 203	88.0	49.0	18.5	楕円形	なし。
P-56	X 188	Y 204	(50.0)	48.0	11.0	楕円形	なし。

落ち込み

ì	遺構名	ſ	位 置	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	形状	主な出土遺物	備。	与
	0-1	X 188	Y 195	(149.0)	(104.0)	17.5	不定形	土師器小片、酸化炎燒成須恵器(椀)破片。		
	D—2	X 187	Y 196 · 197	218.0	(83.0)	28.0	不定形	なし。		

2 号住居跡

遺構名	i 1	立置	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	形状	主な出土遺物	備考
P ₁	X 187	Y 200	63.0	36.0	24.0	楕円形	なし。	

6 号住居跡

ì	遺構名	位 置		長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	形状	主な出土遺物	備	考
	P_1	X 187	Y 198	85.0	67.0	15.0	楕円形	土師器(甕)、酸化焰焼成須恵器(坏)破片。		

17号住居跡

遺構名	位	置	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	形状	主な出土遺物	備考
P ₁	X 188	Y 203	37.0	29.0	15.0	方形	なし。	

51トレンチ

6 号掘立柱建物跡

遺構名	1	立 置	東西(cm)	南北(cm)	深さ(cm)	形状	白色化	環状沈着	その他当たり	出土遺物	備考
P ₁	X310	Y 303	77.0	80.0	27.0	円形	0	_	円形に錆	土師器・須恵器(蓋)	2時期ある か。
P 2	X 309	Y 303	60.0	55.0	27.0	方形	_	_	円形に錆	須恵器(甕)	P 3と重複。
Р3	X 309	Y 303	[50.0]	(72.0)	3.5	円形?	_	_	_	なし。	P 2と重複。
P 4	X311	Y 303	65.0	55.0	25.0	方形	_	_	円形に錆	土師器・須恵器(蓋)	P 5と重複。
P 5	X311	Y 303	(30.0)	(50.0)	20.0	円形?	_	_	_	なし。	P ₄ と重複。

井戸跡

遺構名	位	置	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	形状	主な出土遺物	備考
I-1	X 309	Y 303	167.0	122.0	_	円形	土師器(坏・甕)、須恵器(蓋・坏)、酸 化焔焼成須恵器(坏・椀・羽釜)、灰釉 陶器(椀・皿等)破片。	張り出しあり。

土坑

遺構名	位	置	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	形状	主な出土遺物	備考
D-1	X 309	Y 303	86.0	65.0	(7.0)	楕円形	土師器(坏・甕)、須恵器(蓋)破片。	
D-2	X311	Y 303	_	_	_	円形?	なし。	プラン確認のみ。

ピット

遺構名	位	置	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	形状	主な出土遺物	備	考
P-1	X311	Y 303	70.0	40.0	9.0	楕円形	土師器小片、須恵器(坏等)破片少量。		
P-2	X309·310	Y 303	58.0	45.0	11.0	楕円形	土師器(甕)、須恵器(蓋・坏・盤)破片。		

落ち込み

遺構名	位	置	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	形状	主な出土遺物	備考	
0-1	X309·310	Y 303	250.0	190.0	_	不定形	なし。		

52トレンチ

土坑

遺構名	位	置	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	形状	主な出土遺物	備	考
D-1	X 240	Y 408	65.0	35.0	(5.5)	方形	なし。		
D-2	X 240	Y 408	[55.0]	40.0	(5.5)	楕円形	なし。		
D-3	X312	Y 304	(50.0)	_	24.0	楕円形	土師器・須恵器小片。		

ピット

遺構名	位 置	長軸(cm	短軸(cm)	深さ(cm)	形状	主な出土遺物	備考
P-1	X 240 Y 4	11 30.0	28.0	10.5	円形	なし。	環状の鉄分沈着あり。
P-2	X241 Y4	10 33.0	31.0	11.0	円形	なし。	
P-3	X 240 Y 4	10 53.0	33.0	5.0	楕円形	なし。	攪乱か。
P-4	X 240 Y 4	10 20.0	15.0	7.0	楕円形	なし。	攪乱か。
P-5	X 240 Y 4	10 35.0	25.0	8.0	楕円形	なし。	攪乱か。
P-6	X 240 Y 4	10 43.0	38.0	8.0	楕円形	なし。	攪乱か。
P-7	X 241 Y 4	11 27.0	25.0	9.5	円形	なし。	
P-8	X 241 Y 4	11 66.0	40.0	10.0	不定形	なし。	攪乱か。
P-9	X 241 Y 4	11 40.0	27.0	6.0	不定形	なし。	攪乱か。

P—10	X 241	Y 410	50.0	25.0	8.0	不定形	なし。	攪乱か。
P—11	X 240	Y 410	15.0	15.0	14.0	円形	なし。	
P—12	X 241	Y 411	43.0	35.0	15.5	楕円形	なし。	ピット列。
P—13	X 241	Y 411	55.0	28.0	9.0	長方形	酸化焰焼成須恵器(椀)破片。	
P—14	X 240	Y 411	31.0	20.0	9.5	楕円形	なし。	ピット列。
P—15	X 240 • 241	Y 412	30.0	28.0	9.0	円形	なし。	
P—16	X 241	Y 411	20.0	13.0	18.5	円形	須恵器・灰釉陶器小片。	ピット列。
P—17	X 241	Y 412	57.0	20.0	24.0	楕円形	なし。	
P—18	X 240	Y 412	40.0	26.0	11.5	楕円形	なし。	
P—19	X 241	Y 412	31.0	31.0	21.5	円形	なし。	
P-20	X 240 • 241	Y 411	25.0	25.0	22.0	円形	なし。	
P-21	X 241	Y 411	40.0	25.0	20.5	楕円形	なし。	
P-22	X 241	Y 412	43.0	30.0	21.0	円形	なし。	
P-23	X 241	Y 412 • 413	30.0	23.0	12.0	楕円形	土師器小片。	
P-24	X 241	Y 411	29.0	20.0	13.0	円形	なし。	ピット列。
P-25	X 240	Y 412	50.0	40.0	33.0	楕円形	なし。	
P-26	X 240	Y 412	(30.0)	29.0	7.0	円形	なし。	
P-27	X 240	Y 412	45.0	40.0	20.5	方形	なし。	
P-28	X 240	Y 411	30.0	28.0	18.0	円形	なし。	ピット列。
P-29	X 241	Y 410	70.0	45.0	6.5	不定形	なし。	攪乱か。
P-30	X 241	Y 411	15.0	15.0	11.0	円形?	なし。	攪乱か。

54トレンチ

1 号掘立柱建物跡

遺構	名 位	置	東西(cm)	南北(cm)	深さ(cm)	形状	白色化	環状沈着	その他当たり	出土遺物	備考
Р	X 203	Y 312	75.0	(55.0)	32.0	方形	_	_	硬化	須恵器 (蓋・ 椀) 破片。	柱痕に炭化物多く 含む。

井戸跡

遺構名	位	置	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	形状	主な出土遺物		備	考
I — 1	X 199	Y 312	_	_	_	円形	土師器小片、須恵器小片、かわらけ破片。	中世		

土坑

遺構名	位	置	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	形状	主な出土遺物	備考
D-1	X 203	Y 312	100.0	(92.0)	_	方形	土師器(坏・甕)、須恵器(坏・甕)、鉄滓。	
D-2	X 203	Y 312	_	_	_	方形?	須恵器(皿・坏・甕)破片。酸化焔焼成須恵器 (椀)破片。	
D-3	X 202	Y 312	[150.0]	(80.0)	_	楕円形?	土師器 (坏・甕) 破片、須恵器 (蓋・皿・坏・椀・甕) 破片、酸化焔焼成須恵器 (羽釜) 破片。	
D-4	X 201 • 202	Y312·313	_	_	_	不明	土師器 (坏・甕) 破片、須恵器 (蓋・坏・甕) 破片、瓦破片。	粘土採掘坑?
D-5	X 202	Y 313	_	_	_	不明	土師器 (坏・甕) 破片、須恵器 (蓋・坏・甕) 破片、瓦破片。	粘土採掘坑?
D-6	X 200	Y 312	(93.0)	80.0	12.0	楕円形	須恵器小片、瓦破片。	
D-7	X 200	Y 312	90.0	(72.0)	27.0	楕円形	土師器 (坏・甕) 破片、須恵器 (蓋・坏・椀)、黒 色土器 (椀) 破片、鉄滓	
D-8	X 200	Y 312	85.0	(73.0)	60.0	方形	士師器 (坏・甕) 破片、須恵器 (蓋・坏・甕) 破片、瓦破片、鉄滓。	
D-9	X 199	Y312	(262.0)	(80.0)	38.0	楕円形	土師器 (坏・甕) 破片、須恵器 (蓋・坏) 破片、鉄 滓。	

ピット

遺構名	位	置	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	形状	主な出土遺物	備考
P-1	X 203	Y 314	36.0	26.0	8.0	楕円形	円礫多数。	
P-2	X 200	Y 312	30.0	[30.0]	25.0	円形	須恵器小片。	
P-3	X 199	Y 312	[48.0]	[50.0]	10.0	円形	土師器(甕)破片、須恵器(坏)破片、酸化焔焼成 須恵器(椀)破片、瓦破片。	
P-4	X 199	Y 312	50.0	[40.0]	38.0	円形	土師器(坏)破片、須恵器(蓋)破片。	底部硬化。
P-5	X 200	Y 312	20.0	20.0	_	円形	なし。	

P-6 X203 Y313 25.0 - 24.0 円形 なし。	P-6	X 203	Y 313	25.0	_	24.0	円形	なし。	
--	-----	-------	-------	------	---	------	----	-----	--

1 号ピット列

遺構名	位	置	東西(cm)	南北(cm)	深さ(cm)	形状	白色化	環状沈着	その他当たり	出土遺物	備	考
P ₁	X 203	Y 314	48.0	30.0	35.5	楕円形	_	_	硬化	なし。		
P 2	X 203	Y 313	40.0	37.0	18.0	円形	_	_	硬化	土師器 (甕) 破片。		
P _{3a}	X 203	Y 313	[40.0]	38.0	48.0	円形	_	_	硬化	土師器 (甕) 破片。		
Рзь	X 203	Y 313	45.0	[45.0]	51.0	円形	_	_	硬化	なし。		
P _{3c}	X 203	Y 313	(55.0)	[45.0]	51.5	円形	_	_	硬化	なし。		

Tab. 4 遺物観察表

50トレンチ

番号	出土遺構	契 種夕	①口径	②器高	①胎土	②焼成	界種の特徴・敕政・調敕は従	登録番号	備考
一	層位	器種名	③底径	④つまみ径	③色調	④遺存度	器種の特徴・整形・調整技術	空 郵金号	1 拥有
50—1	H—1 床直	黒色土器 椀	① 13.8 ③ 6.8	② 6.4		②良好 ④ほぼ完形	口縁部・体部は内外面とも回転横なで整形。内面 は整形後にみがきで調整し黒色処理。底部は回転 糸切り未調整で高台を接着し回転横なでで整形。	3	
50—2	H一1 床直	土師質 土釜	① [26.2] ③ —	2 (8.3)	①細粒 ③明赤褐	②良好 ④破片	体部内面および口縁部内外面は横なでで整形。体 部外面は縦位の箆なでによる整形。指頭圧痕あり。	2	
50—3	H一1 覆土	灰釉陶器 椀	① [14.4] ③ [8.1]		①細粒 ③灰白	②良好 ④1/5	体部は内外面とも回転横なで整形で、口縁部内面 に凹線をもつ。高台部は底部に接着の後に回転横 なで整形。釉薬は口縁部から体部にかけての内外 面に浸掛けで施す。		
50—4	H一3 覆土	須恵器 椀	① [17.6] ③ 8.5	2 6.7	①細粒 ③浅黄橙	②良好 ④1/2	体部・口縁部は内外面ともに回転横なで整形。底 部は高台接着後に削りとなでで整形。		酸化焰
50—5	H-4 覆土	土師質 坏	① — ③ 6.6	②(3.2)	①細粒 ③浅黄橙 体部	②良好 ④底部·	体部は内外面ともに回転横なで整形。底部は回転 糸切り未調整。	5	
50—6	H-5 床直	土師質	① [12.0] ③ 7.1	2[2.9]	①細粒 ③浅黄橙	②良好 ④4/5	体部は内外面ともに回転横なで整形。底部は回転 糸切り未調整。口縁部の一部に打撃によると推定 される剥離痕。	2	
50—7	H—5 床直	土師質 羽釜	① [24.4] ③ —	②(8.1)	①細粒 ③橙	②良好 ④破片	体部内面・口縁部は回転横なで整形。体部外面は 縦位の箆削りで整形の後に鍔を接着し、口縁部お よび鍔を回転横撫で整形。	1	
50—8	H—5 覆土	白磁片 碁石?	長 1.9 厚 4.0	幅 2.0	白磁の小	片を打撃に。	より円形に整形しようとしたものか。		
50—9	H—6 床直	土師質 坏	① 8.7 ③ 5.2	2 1.9	①細粒 ③灰白	②良好 ④完形	体部・口縁部は内外面ともに回転横なで整形。底 部は回転糸切り未調整。	54	
50—10	H—6 床直	土師質 坏	① 9.6 ③ 4.8	2 2.6	①中粒 ③浅黄橙	②良好 ④完形	体部・口縁部は内外面ともに回転横なで整形。底 部は回転糸切り未調整。	22	
50—11	H—6 床直	土師質 坏	①[8.1] ③ 4.0	2 1.7	①中粒 ③にぶい	②良好 黄橙④4/5	体部・口縁部は内外面ともに回転横なで整形。底 部は回転糸切り未調整。	45	
50—12	H—6 床直	土師質 椀	① [12.0] ③ 6.7	2 4.8	①細粒 ③灰白	②良好 ④2/3	体部・口縁部は内外面ともに回転横なで整形。底 部は高台部を接着の後の回転横なで調整。	9	
50—13	H-6 床直	土師質 羽釜	① [20,4] ③ —	② (14.3)	①細粒 ③にぶい	②良好 黄橙④1/6	体部内面・口縁部は横位の箆削りで整形および調整。体部外面は縦位の箆削りで整形の後に鍔を接着し、口縁部および鍔を回転横撫で整形。	27 30~32 40, 41	
50—14	H—6 床直	須恵器 長頸壺	① [15.4] ③ —	2 (15.8)	①細粒 ③白灰④	②良好 口頸~体部	体部・口頸部は内外面ともに回転横なで整形。	14, 15 35, 36	
50—15	H—6 床直	銅製品	縦 3.63 高 3.11	横 3.84 重87.5g	により形 あり。印	状の判別が難 面の文字は4	響を受けているが、保存状態は比較的良好。鈕は錆 難しいが、莟鈕と推定され、無孔。天に「上」の字 4字で「阿部私印」と読める。印面の奥に黒色の物 なお、出土時、印面には藁すさ状の繊維が付着して	1	
50—16	H—7 床直	須恵器 転用硯	長 13.2 厚 1.2	幅 11.9	①細粒 ③灰	②良好 ④完形	須恵器甕の破片の周囲を打撃と削りで整形し硯に 転用したもの。内面が使用により摩耗している。	2	
50—17	H—9 覆土	須恵器 坏	① 8.5 ③ 3.6	② 2.4		②良好 ④ほぼ完形	体部・口縁部内外面ともに回転横なで整形。底部 は回転糸切り未調整。		酸化焰
50—18	H—9 床直	須恵器 坏	①[9.6] ③ 5.4	2.5	①細粒 ③にぶい	②良好 橙④3/5	体部・口縁部内外面ともに回転横なで整形。底部 は回転糸切り未調整。	2	酸化焰
50—19	H—9 覆土	須恵器 坏	① [14.6] ③ [6.2]		①細粒 ③浅黄橙	②良好 ④1/2	体部・口縁部内外面ともに回転横なで整形。底部 は回転糸切り未調整。		酸化焰
50—20	H一9 覆土	灰釉陶器 椀	① [14.4] ③ [6.6]	2 5.9	①細粒 ③灰白	②良好 ④2/5	体部・口縁部は内外面ともに回転横なで整形。釉薬は内面口縁部・体部および外面口縁部に薄く施す。浸掛けと推定される。		
50—21	H—11 床直	須恵器 坏	①[8.6] ③ 5.4	2 1.9	①細粒 ③橙	②良好 ④4/5	体部・口縁部は内外面ともに回転横なで整形。底 部は回転糸切り未調整。	3	酸化焰

50—22	H—11 床直	須恵器 托?	① 9.2 ③ 6.5	2 4.0	①細粒 ②良好 ③にぶい黄橙 ④ほぼ完形	体部・口縁部は内外面ともに回転横なで整形。底 部は高台部接着の後に回転横なでで整形。	4	酸化焰
50—23	H—11 覆土	白磁 椀	① — ③ —	2 -	①細粒 ②良好 ③灰白 ④破片	口縁部から体部にかけての破片。口縁は玉縁。		
50—24	H—11 覆土	白磁 椀	① — ③ —	2 -	①細粒 ②良好 ③灰白 ④破片	口縁部から体部にかけての破片。口縁部は外反する。		
50—25	H—11 覆土	銅製品 吊金具?	長(4.0) 厚 0.5	幅(2.0)		部にも孔を穿ち、孔を中心に四方へ広がる溝をも Dためと推定されるより大きな孔をもつ。	1	
50—26	H—12 覆土	土師質 坏	①[9.6] ③[7.0]	21.5	①細粒 ②良好 ③にぶい黄橙④2/3	体部・口縁部は内外面ともに回転横なで整形。底 部は回転糸切り未調整。		
50—27	H—12 覆土	須恵器 椀	① [11.2] ③ —	②(4.7)	①細粒 ②良好 ③にぶい橙④2/3	体部・口縁部は内外面ともに回転横なで整形。底 部は回転糸切り未調整で高台部を接着後に回転横 なでで整形。	21, 24	酸化焰
50—28	H—12 覆土	駒?	長 2.3 厚 1.3	幅 1.5	①細粒 ②良好 ③灰白 ④破片	瓦の破片を打撃により楕円形に整形したもの。		
50—29	H—12 床直	土師質 土釜	① [26.0] ③ —	② (21.9)	①細粒 ②良好 ③明赤褐 ④破片	口縁部の内外面は横なでで整形。胴部内外面は横 方向を中心とした箆なでにより整形し、縦方向の 箆なでにより整形。	12~16 18~19 20, 25 29	
50—30	H—14 床直	土師質 坏	① 8.7 ③ 5.4	2 2.0	①細粒 ②良好 ③にぶい橙 ④ほぼ完形	体部・口縁部は内外面ともに回転横なで整形。底 部は回転糸切り未調整。	4	
50—31	H—15 床直	土師質 坏	① 10.2 ③ 6.0	2 2.9	①細粒 ②良好 ③橙 ④ほぼ完形	体部・口縁部は内外面ともに回転横なで整形。底 部は回転糸切り未調整。	4,5	
50—32	H—16 床直	土師器 坏	①[10.0] ③ —	② 3.1	①細粒 ②良好 ③橙 ④1/4	体部内面および口縁部内外面を横なで整形。体部 外面および底部は箆削りで整形。	1	
50—33	H—16 床直	土師器 坏	①[12.2] ③ —	② 3.4	①細粒 ②良好 ③橙 ④1/4	体部内面および口縁部内外面とも横なでで整形。 体部外面および底部は箆削りで整形。	11	
50—34	H—16 床直	土師器 坏	①[15,1] ③ —	②(3.7)	①細粒 ②良好 ③橙 ④1/4	体部内面および口縁部内外面とも横なでで整形。 体部外面および底部は箆削りで整形。	6	
50—35	H—17 床直	須恵器 坏	① [17.9] ③ 9.4	2 5.8	①細粒 ②良好 ③橙 ④2/3	体部・口縁部は内外面ともに回転横なで整形。底 部は回転糸切り未調整で高台部を接着後に回転横 なでで整形。	8	酸化焰
50—36	H—17 床直	土師質 羽釜	① [23.2] ③ —	②(8.8)	①細粒 ②良好 ③にぶい橙④破片	体部内面は斜方向の箆削りで整形。体部外面は縦 位の箆削りで整形の後に鍔を接着し、内面も含め 口縁部および鍔を回転横なで整形。	1	
50—37	H—17 覆土	石製品 碁石?	長 2.1 厚 1.0	幅 1.8	石英の扁平で小さな円	円礫で、被熱により黒色を呈する。		
50—38	H—17 床直	石製品 砥石	長 11.6 厚 1.5	幅 3.1	流紋岩製。主に4面を み(使用痕?)も持つ	を砥ぎ面として使用しているが、円形の小さいくぼ つ。	11	
50—39	H—20 床直	須恵器 坏	① 12.0 ③ 5.3	2 4.4	①細粒 ②良好 ③にぶい橙④完形	体部・口縁部は内外面ともに回転横なで整形。底部は回転糸切り未調整。内外面全体に黒色の付着物(油煙?)が付着する。		酸化焰
50—40	W-2 覆土	須恵器 坏	① [10.0] ③ 5.6	② 3.0	①細粒 ②良好 ③浅黄橙 ④1/2	体部・口縁部は内外面ともに回転横なで整形。底 部は回転糸切り未調整。		酸化焰
50—41	W-2 床直	須恵器 椀	①[14.5] ③	②(4.3)	①細粒 ②良好 ③にぶい黄橙④1/4	体部・口縁部内外面とも回転横なでで整形。底部 は回転糸切りで高台部を接着後に回転横なでで整 形。	7	酸化焰
50—42	W-2 床直	黒色土器 小鉢	① 3.05 ③ 2.2	2 1.6	①細粒 ②良好 ③黒 ④4/5	底部以外の器体全面をみがきの後に黒色処理。	6	

51トレンチ

番号	出土遺構 層位	器種名	①口径 ②器高 ③底径 ④つまみ	径	①胎土 ③色調	②焼成 ④遺存度	器種の特徴・整形・調整技術	登録番号	備	考
51—1	B-6 P ₂ 床直	須恵器 甕	① — ② · ③ —	_	①細粒 ③灰	②良好 ④破片	器体は叩きで整形し、外面のみ刷毛で調整。			
51—2	W-1 覆土	須恵器 椀	① — ②(1 ③ 7.6	9)	①細粒 ③灰	②良好 ④底部のみ	体部は内外面ともに回転横なで整形。底部は回転 糸切りで高台部を接着後に回転横なでで整形。内 面に十字に箆書き。	4		
51—3	W-1 覆土	石製品 碁石?	長 1.6 幅 1厚 0.8	2	扁平、楕	円形で黒色・	緻密な石を素材とする。石材不明(蛇紋岩?)。			
51—4	W-2 覆土	土師器	①[14.8] ②(3 ③ —		①細粒 ③橙	②良好 ④破片	口縁部から体部にかけての破片。内面は横なで整 形の後に放射状の暗紋を施す。外面は箆削りで整 形の後に口縁部のみ横なで整形。			
51—5	W-3 覆土	灰釉陶器 椀	① — ②(4 ③[9.2]		①細粒 ③灰白	②良好 ④1/3	体部は内外面とも回転横なで整形。底部は回転箆 切り未調整の後に高台部を接着。外面および内面 に釉薬を浸掛けで施す。			
51-6	W-5 覆土	軟質土器 器種不明	① — ②(2 ③[9.0]		①細粒 ③灰黄	②良好 ④底部	内外面とも回転横なで整形。底部は削りによる整形の後に中央に直径1.5cmの孔を穿つ。	1		

51—7 J	リッド 土師器	①[14.0] ②(2.8) ③ —	①細粒 ②良好 ③橙 ④1/5	体部内面および口縁部内外面とも横なでで整形。 体部外面および底部は箆削りで整形。	1	X 310, Y 303
--------	---------	-----------------------	--------------------	---	---	-----------------

52トレンチ

番号	出土遺構 層位	器種名	①口径 ②器高 ③底径 ④つま	み径	①胎土 ②焼成 ③色調 ④遺存度	器種の特徴・整形・調整技術	登録番号	備	考
52—1	W-1 覆土	石製品 茶臼	① (12.5) ② (8 ③ (4.0)	3.6)	黒色で粗粒の安山岩	色で粗粒の安山岩製。下臼の縁辺の破片。			
52—2	W-1 覆土	青磁椀	① — ②(2 ③ —	2.7)	①細粒 ②良好 ③オリーブ灰④破片) 翻粒 ②良好) オリーブ灰④破片 外面に蓮弁文。			
52—3	W-1 覆土	須恵器 椀	① — ②(4 ③[9.6]	1.1)	①細粒 ②良好 ③灰 ④1/3	① 息好 ③ 灰 ④ 1/3 体部は内外面ともに回転横なで整形。底部は回転 糸切り未調整で高台部を接着後に回転横なでで整 形。			
52—4	W-1 覆土	石製品 紡錘車?	長 4.5 幅 4 厚 3.0	1.6	球形で中央に径1.1cm	・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・			

54トレンチ

54トレン	ア ニー								
番号	出土遺構 層位	器種名	①口径 ③底径	②器高 ④つまみ径	①胎土 ③色調		器種の特徴・整形・調整技術	登録番号	備考
54—1	H一1 覆土	緑釉陶器 椀	① — ③ —	② —	①細粒 ③オリ-	②良好 -ブ黄④破片	口縁部の破片。胎土は灰色で緻密。		
54—2	H一1 覆土	緑釉陶器 椀	① — ③ —	② —	①細粒 ③浅黄	②良好 ④破片	口縁部の破片。胎土は灰色で緻密。		
54—3	H一1 覆土	須恵器 蓋	① 4.4 ③ —	② (1.9) ④ 44.6	①細粒 ③灰白	②良好 ④1/3	器体は回転糸切り(未調整)で切り離し、内外面 とも回転横なで整形の後につまみを張り付け回転 横なで整形。つまみは扁平で中央が窪む。	11	
54—4	H一1 覆土	須恵器Ⅲ	① [15.0 ③ [6.2		①細粒 ③黄灰	②良好 ④1/3	体部・口縁部は内外面ともに回転横なで整形。底部は回転糸切り未調整で高台接着の後に回転横なでで整形。	12	酸化焔
54—5	H一1 覆土	須恵器 坏	① [13.1] ③ 5.8	2 3.7	①細粒 ③にぶい	②良好 1橙④2/3	体部・口縁部は内外面ともに回転横なで整形。底 部は回転糸切り未調整。	10	酸化焔
54—6	H一1 覆土	須恵器 坏	①[14.0 ③[7.1		①細粒 ③灰白	②良好 ④1/2	体部・口縁部は内外面ともに回転横なで整形。底 部は回転糸切り未調整。	8	
54—7	H一1 覆土	須恵器 坏	① 13.8 ③ 6.4	② 4.1	①細粒 ③灰	②良好 ④4/5	体部・口縁部は内外面ともに回転横なで整形。底 部は回転糸切り未調整。	1,2	
54—8	H一1 覆土	須恵器 椀	① 14.4 ③ 6.8	② 4.9	①細粒 ③灰白	②良好 ④ほぼ完形	体部・口縁部は内外面ともに回転横なで整形。底 部は回転糸切り未調整で高台接着の後に回転横な でで整形。	5	
54—9	H-2 覆土	須恵器 坏	① — ③ 8.0	②(2.5)	①細粒 ③灰	②良好 ④1/3	体部は内外面ともに回転横なで整形。底部は回転 糸切りで未調整。		
54—10	H一3 覆土	土師器 坏	① 12.0 ③ 8.4	② 3.5	①細粒 ③橙	②良好 ④ほぼ完形	内面は横なでで整形と調整。外面は底部から体部 にかけて斜方向の箆削りで整形し、口縁部を横な でで調整。指頭圧痕あり。	62	
54—11	H-3 覆土	土師器 坏	① 12.2 ③ 7.8	② 3.6	①細粒 ③橙	②良好 ④4/5	内面は横なでで整形と調整。外面は底部から体部 にかけて斜方向の箆削りで整形し、口縁部を横な でで調整。指頭圧痕あり。		
54—12	H一3 覆土	土師器 坏	① 12.4 ③ 7.6	② 3.4	①細粒 ③橙	②良好 ④完形	内面は横なでで整形と調整。外面は底部から体部 にかけて斜方向の箆削りで整形し、口縁部を横な でで調整。指頭圧痕あり。	72	
54—13	H一3 覆土	土師器 坏	① 12.2 ③ 8.5	② 3.4	①細粒 ③橙	②良好 ④ほぼ完形	内面は横なでで整形と調整。外面は底部から体部 にかけて斜方向の箆削りで整形し、口縁部を横な でで調整。指頭圧痕あり。	82	
54—14	H—3 覆土	土師器 坏	① [12.0 ③ [8.0		①細粒 ③橙	②良好 ④4/5	内面は横なでで整形と調整。外面は底部から体部 にかけて斜方向の箆削りで整形し、口縁部を横な でで調整。指頭圧痕あり。		
54—15	H一3 覆土	土師器 坏	① 12.0 ③ 9.0	② 3.9	①細粒 ③橙 形	②良好 ④ほぼ完	内面は横なでで整形と調整。外面は底部から体部 にかけて斜方向の箆削りで整形し、口縁部を横な でで調整。指頭圧痕あり。口縁部の一部が焦げる。	11	
54—16	H—3 覆土	土師器 坏	① 11.8 ③ 7.8	2 3.5	①細粒 ③橙	②良好 ④ほぼ完形	内面は横なでで整形と調整。外面は底部から体部 にかけて斜方向の箆削りで整形し、口縁部を横な でで調整。指頭圧痕あり。	69	
54—17	H一3 覆土	土師器 坏	① 11.8 ③ 8.0	② 3.6	①細粒 ③橙	②良好 ④ほぼ完形	内面は横なでで整形と調整。外面は底部から体部 にかけて斜方向の箆削りで整形し、口縁部を横な でで調整。指頭圧痕あり。	76	
54—18	H一3 覆土	土師器	① [14.0] ③ [9.2]] ② 3.3	①細粒 ③橙	②良好 ④破片	内面は横なでで整形と調整の後に放射状暗紋を施 す。外面は体部を横方向の箆削りで整形し、口縁 部を横なでで調整。		
54—19	H—3 覆土	土師器	① [14.0] ③ [8.7]	2 (5.1)	①細粒 ③橙	②良好 ④破片	内面は横なでで整形と調整の後に放射状暗紋を施す。外面は底部から体部にかけて横方向の箆削りで整形し、口縁部を横なでで調整。		
54—20	H一3 覆土	土師器 坏	① — ③[8.8]	②(4.0)	①細粒 ③橙	②良好 ④破片	内面は横なでで整形と調整の後に放射状暗紋を施 す。外面は底部から体部を箆削りで整形。		

54—21	H一3 覆土	土師器 台付甕	①[13.6] ③ —	② (12.3)	①細粒 ②良好 ③にぶい橙④1/4	口縁部は内外面とも横なで。体部内面は斜め方向 のなでで整形、外面は斜め方向の箆削り。脚部欠 損。		
54—22	H一3 覆土	須恵器 皿	① 14.0 ③ 6.6	② 3.2	①細粒 ②良好 ③浅黄 ④ほぼ完形	体部・口縁部内外面ともに回転横なでで整形。底 部は回転糸切り未調整で高台接着後に回転横なで で整形。	73	
54—23	H一3 覆土	須恵器	① 14.0 ③ 7.9	② 2.7	①細粒 ②良好 ③灰白 ④ほぼ完形	体部・口縁部内外面ともに回転横なでで整形。底 部は回転糸切り未調整で高台接着後に回転横なで で整形。	70	
54—24	H一3 覆土	須恵器 皿	① 13.7 ③ 7.0	② 3.6	①細粒 ②良好 ③灰 ④ほぼ完形	体部・口縁部内外面ともに回転横なでで整形。底 部は回転糸切り未調整で高台接着後に回転横なで で整形。	81	
54—25	H一3 覆土	須恵器	① 13.0 ③ 7.1	2 2.7	①細粒 ②良好 ③灰 ④ほぼ完形	体部・口縁部内外面ともに回転横なでで整形。底 部は回転糸切り未調整で高台接着後に回転横なで で整形。	34	
54—26	H一3 覆土	須恵器 皿	① 13.7 ③ 6.6	② 3.4	①細粒 ②良好 ③灰黄 ④ほぼ完形	体部・口縁部内外面ともに回転横なでで整形。底 部は回転糸切り未調整で高台接着後に回転横なで で整形。	47	酸化焔
54—27	H-3 覆土	須恵器 坏	① 13.0 ③ 5.9	② 4.0	①細粒 ②良好 ③灰白 ④ほぼ完形	体部・口縁部内外面ともに回転横なでで整形。底 部は回転糸切り未調整。	20	
54—28	H一3 覆土	須恵器 坏	① 12.9 ③ 5.6	② 4.0	①細粒 ②良好 ③灰 ④ほぼ完形	体部・口縁部内外面ともに回転横なでで整形。底 部は回転糸切り未調整。	36	
54—29	H一3 覆土	須恵器 坏	① 12.8 ③ 6.1	② 3.6	①細粒 ②良好 ③灰 ④ほぼ完形	体部・口縁部内外面ともに回転横なでで整形。底 部は回転糸切り未調整。	56	
54—30	H—3 覆土	須恵器 坏	① 13.9 ③ 6.4	② 4.1	①細粒 ②良好 ③灰 ④ほぼ完形	体部・口縁部内外面ともに回転横なでで整形。底 部は回転糸切り未調整。	24	
54—31	H-3 覆土	須恵器 坏	① 13.1 ③ 6.9	② 4.0	①細粒 ②良好 ③灰 ④ほぼ完形	体部・口縁部内外面ともに回転横なでで整形。底 部は回転糸切り未調整。	18	
54—32	H-3 覆土	須恵器 坏	① 13.0 ③ 6.0	② 4.3	①細粒 ②良好 ③灰 ④ほぼ完形	体部・口縁部内外面ともに回転横なでで整形。底 部は回転糸切り未調整。	40	
54—33	H-3 覆土	須恵器 坏	① 13.2 ③ 6.4	② 3.7	①細粒 ②良好 ③灰白 ④完形	体部・口縁部内外面ともに回転横なでで整形。底 部は回転糸切り未調整。	86	
54—34	H—3 覆土	須恵器 椀	① 14.8 ③ 8.0	② 5.0	①細粒 ②良好 ③灰白 ④完形	体部・口縁部内外面ともに回転横なでで整形。底 部は回転糸切り未調整で高台接着後に回転横なで で整形。	27	
54—35	H一3 覆土	須恵器 椀	① [14.8] ③ 7.4	2 5.9	①細粒 ②良好 ③にぶい褐④3/4	体部・口縁部内外面ともに回転横なでで整形。底部は回転糸切り未調整で高台接着後に回転横なでで整形。	17	酸化焔
54—36	H一3 覆土	須恵器 椀	① 15.2 ③ 8.3	2 6.1	①細粒 ②良好 ③黄灰 ④ほぼ完形	体部・口縁部内外面ともに回転横なでで整形。底部は回転糸切り未調整で高台接着後に回転横なでで整形。	28, 37 44, 90	
54—37	H一3 覆土	須恵器 長頸壺	① — ③10.4	② (18.0)	①細粒 ②良好 ③灰白④口頸部縁欠	体部内外面とも回転横なでで整形。底部は回転糸 切り未調整で高台接着後に回転横なでで整形。内 面は回転横なで整形で体部への立ち上がりに指頭 圧痕。	38, 74	
54—38	H一3 覆土	須恵器 羽釜	① 21.0 ③ —	②(8.8)	①細粒 ②良好 ③灰白 ④破片	口縁部から胴部の内外面は回転横なで整形。鍔は 外面整形後に接着して回転横なでで整形。	7	
54—39	H—3 覆土	須恵器 羽釜	① — ③ —	② (16.0)	①細粒 ②良好 ③灰黄 ④破片	口縁部から胴部の内外面は回転横なで整形。 鍔は 外面整形後に接着して回転横なでで整形。	30	
54—40	H-3 覆土	須恵器 転用硯?	① — ③[14.4]	②(4.0)	①細粒 ②良好 ③灰 ④破片	外堤、陸の一部および脚部の破片と推定される。 器体は脚部と陸を回転横なでで整形した後に外堤 とその下部の凸帯を接着し整形している。脚部に 透かし穴をもつ。		
54—41	H-3 覆土	緑釉陶器 皿	① — ③[7.4]	②(1.8)	①細粒 ②良好 ③オリーブ灰④2/5	胎土は灰色で硬質。	94	
54—42	H一3 覆土	須恵器 転用硯	① 10.3 ③ 1.2	② 5.7	①細粒 ②良好 ③灰 ④1/2	須恵器盤の底部内面に顕著な擦痕が認められることから、硯に転用したものと推定される。	95	
54—43	H一3 覆土	銅製品 鋲	頭部径1.8 軸径 0.3		平面形状が楕円形の頭	 頁部がついた鋲。軸部断面は方形。	16	
54—44	H-4 覆土	土師器	①[12.1] ③ —	② 3.2	①細粒 ②良好 ③にぶい橙④2/3	体部内面および口縁部内外面ともに横なで。体部 から底部にかけて外面は箆削り。指頭圧痕あり。 口縁部の一部に黒色の付着物(油煙か)あり。		
54—45	H-4 覆土	須恵器皿	① 14.0 ③ 6.7	② 3.5	①細粒 ②良好 ③灰黄褐④ほぼ完形	体部・口縁部内外面ともに回転横なでで整形。底 部は回転糸切り未調整で高台接着後に回転横なで で整形。	2, 3	酸化焔
54—46	H-4 覆土	土師質 羽釜	① [20.6] ③ —	②(11.1)	①細粒 ②良好 ③にぶい橙④破片	口縁部から胴部の内外面は回転横なで整形。 鍔は 外面整形後に接着して回転横なでで整形。		
54—47	H-4 覆土	緑釉陶器椀	① — ③ —	② —	①細粒 ②良好 ③灰オリーブ④破片	体部から口縁部の破片。内外面とも回転横なでで 整形。胎土は灰色で硬質。釉薬は内外面ともに施 す。		
54—48	H-5 覆土	駒?	長 2.2 厚 1.2	幅 2.4	①細粒 ②良好 ③灰 ④完形	須恵器甕破片を打ち欠き削って円形に整形したも の。		
	· ·				·	·		· · · · · · · · · · · · · · · · · · ·

54—49	H一5 覆土	土師質 坏	① 10.3 ③ 5.0	② 3.1	①細粒 ②良好 ③浅黄 ④完形	体部・口縁部内外面ともに回転横なでで整形。底 部は回転糸切り未調整。	4	
54—50	H-5 覆土	土師質 坏	① 10.9 ③ 5.0	② 3.5	①細粒 ②良好 ③橙 ④完形	体部・口縁部内外面ともに回転横なでで整形。底部は回転糸切り未調整。	1	
54—51	H-6 覆土	須恵器	① 13.8 ③ —	②(2.0)	①細粒 ②良好 ③灰 ④高台部欠	体部・口縁部内外面とも回転横なでで整形。底部 は回転糸切り未調整で高台接着後に回転横なでで 整形。	5	
54—52	H—6 覆土	土師質 托?	① 10.0 ③[6.4]	② 3.4	①細粒 ②良好 ③浅黄橙 ④4/5	体部・口縁部内外面とも回転横なでで整形。底部 は高台接着後に回転横なでで整形。	10	
54—53	H-6 覆土	土師質 椀	① 11.8 ③ 6.6	2 4.8	①細粒 ②良好 ③橙 ④1/2	体部・口縁部内外面とも回転横なでで整形。底部 は箆切り未調整で高台接着後に回転横なでで整形。	11	
54—54	H—6 覆土	須恵器 円面硯	① — ③ —	②(3.0)	①細粒 ②良好 ③灰 ④破片	円面硯の脚部破片と推定される。器体は内外面と も回転横なでで整形。外面に平行する2条の帯を 付ける。透かし穴あり。		
54—55	H—7 覆土	須恵器 椀	① 11.6 ③ 7.0	2 5.1	①細粒 ②良好 ③暗灰 ④2/3	体部・口縁部内外面とも回転横なでで整形。底部 は回転へら切り未調整で高台接着後に回転横なで で整形。	5	
54—56	H—7 覆土	須恵器 坏	① 13.4 ③ 7.6	② 3.0	①細粒 ②良好 ③灰白 ④ほぼ完形	体部・口縁部内外面とも回転横なでで整形。底部 は回転糸切り未調整。		
54—57	H一7 覆土	鉄製品 鋤先?	長 10.6 厚 2.2	幅 8.8	U字の鉄製品。酸化著	š しい。	3	
54—58	H一7 覆土	土師器 甕	① 20.1 ③ —	2 24.0	①細粒 ②良好 ③明赤褐④ほぼ完形	胴部内外面は斜方向の箆削りで整形。口縁部内外 面は横なでにより調整。	1	
54—59	H-7 覆土	黒色土器 盤	① (12.8) ③ 12.8	② 2.1	①細粒 ②良好 ③橙 ④底部のみ	黒色土器の盤の底部のみの破片。硯への転用の可 能性がある。底部外面は回転横なでで整形し高台 部を接着し回転横なでで整形。内面は回転横なで 整形の後に磨きを行い黒色処理。	2	
54—60	A-1 直上	須恵器 坏	① — ③ 5.6	②(3.3)	①細粒 ②良好 ③灰 ④1/2	体部・口縁部内外面とも回転横なでで整形。底部 は回転糸切り未調整。		
54—61	A-1 直上	灰釉陶器 椀	① [12.3] ③ 6.0	2 4.3	①細粒 ②良好 ③灰白 ④1/2	体部・口縁部内外面とも回転横なでで整形。底部 は高台接着後に回転横なでで整形。 釉薬は体部内 外面に浸掛けで施す。	11	
54—62	A-1 直上	緑釉陶器 Ⅲ	① — ③ —	2 -	①細粒 ②良好 ③オリーブ灰④破片	胎土は灰色で硬質。釉薬は矢以外面ともに施す。		
54—63	A-1 直上	銅製品 鞘金具?	長 1.5 厚 0.6	幅 4.8	環状の銅製品。		1	
54—64	グリッド 覆 土	須恵器 凸帯付 四耳壺	① — ③ —	②(9.3)	①細粒 ②良好 ③灰白 ④破片	肩部から胴部にかけての破片。たたきによる整形 の後に外面を回転横なでで調整。内面も回転横な でで調整。肩部に凸帯を1条巡らし、小孔が穿か れた突起を4単位。付ける。	4,5	X 201, Y 313

VI 53トレンチのテフラ分析について

(株)火山灰考古学研究所 早 田 勉

1. はじめに

関東地方北西部に位置する前橋市とその周辺には、赤城、榛名、浅間など関東地方とその周辺に分布する火山のほか、中国地方や九州地方など遠方に位置する火山から噴出したテフラ(火山砕屑物、いわゆる火山灰)が数多く降灰している。とくに後期更新世以降に降灰したそれらの多くについては、層相や年代さらに岩石記載的な特徴がテフラ・カタログ(町田・新井、1992、2003、2011など)に収録されており、考古遺跡などで調査分析を行ってテフラを検出することで、地形や地層の形成年代、さらには考古学的な遺物や遺構の年代などに関する研究を実施できるようになっている。

上野国府等範囲内容確認調査では、起源が不明の軽石粒子が認められたことから、発掘調査担当者により採取された試料(29A147-53T・Ⅲ層)を対象に、実験室内でテフラ分析(重鉱物組成分析・火山ガラスおよび鉱物の屈折率測定)を行って、すでに年代が明らかにされている指標テフラとの同定を行うことになった。

2. 重鉱物組成分析

(1) 分析試料と分析方法

試料(29A147-53T・Ⅲ層)に含まれるテフラ粒子の特徴を把握するために、テフラ粒子の量や特徴を定性的に明らかにするテフラ検出分析と、重鉱物組成分析を行った。分析の方法は次のとおりである。

- 1) 分析対象の試料から10gを秤量。
- 2) 超音波洗浄装置により泥分を除去。
- 3) 恒温乾燥器により80℃で恒温乾燥。
- 4) 実体顕微鏡下で観察 (テフラ検出分析)。
- 5) 分析篩を用いて、>1/4mm(>2 ϕ)、1/4-1/8mm(2-3 ϕ)、1/8-1/16mm(3-4 ϕ)、<1/16mm(<4 ϕ)に篩別。
- 6) 偏光顕微鏡下で1/4-1/8 mm (2-3 ϕ) の重鉱物250粒子を観察して、重鉱物組成を求める(重鉱物組成分析)。

(2) 分析結果

テフラ検出分析の結果を表1に示す。試料(29A147-53T・Ⅲ層)には、一部繊維束状に引き延ばされた、わずかに灰色をおびた白色のスポンジ状軽石(最大径6.7mm)が少量含まれている。また、その細粒物であるわずかに灰色をおびた白色のスポンジ状軽石型ガラスが多く認められる。この試料には、そのほかに、淡灰色、淡褐色、白色のスポンジ状軽石型ガラスも含まれている。磁鉄鉱など不透明鉱物以外の重鉱物には、斜方輝石や単斜輝石のほかに、少量の角閃石が認められる。

次に、重鉱物組成分析の結果をダイヤグラムにして図1に、その内訳を表2に示す。この試料に含まれる1/4-1/8 mm(2-3 ϕ)の重鉱物は、含有率が高い順に、斜方輝石(67.6%)、単斜輝石(11.6%)、角閃石(2.4%)、カンラン石(0.4%)である。

3. 屈折率測定 (火山ガラス・鉱物)

(1) 測定試料と測定方法

次に、指標テフラとの同定精度を向上させることを目的として、試料(29A147-53T・III 層)に含まれる火山ガラスと鉱物(斜方輝石)の屈折率測定を行った。屈折率測定は、温度変化型屈折率測定法(壇原、1993)による。火山ガラスの屈折率測定対象は軽石のガラス部で、実体顕微鏡下でピッキングした軽石を粉砕した後に、篩別で得た $1/8-1/16mm(3-4\phi)$ の火山ガラスについて測定を実施した。また、斜方輝石は、 $>1/4mm(>2\phi)$ のものを実体顕微鏡下でピッキングした後に、軽く粉砕したものである。

(2) 測定結果

屈折率測定の結果を表 3 に示す。この表には、関東地方北西部に分布している後期更新世後半以降の代表的な指標テフラの火山ガラスの屈折率特性も合わせて示した。試料(29A147-53T・III層)に含まれる火山ガラス (n, 30粒子)と斜方輝石 $(\gamma, 31粒子)$ の屈折率は、それぞれ1.517-1.511と1.704-1.711である。

4. 考 察

分析測定の対象となった試料(29A147-53T・ \mathbf{III} 層)に含まれるテフラ粒子のうち、一部繊維束状に引き延ばされた、わずかに灰色をおびた白色のスポンジ状軽石やその細粒物である軽石型ガラス、そして斜方輝石や単斜輝石の一部は、その岩相や、火山ガラスおよび斜方輝石の屈折率特性などから、1783(天明 3)年に浅間火山から噴出した浅間A軽石(As-A,荒牧,1968,新井,1979)に同定される。なお、斜方輝石に関しては、テフラ・カタログに記載された As-A の屈折率の値($\gamma:1.707-1.712$)より低いものが認められる。これについては、As-A より古いテフラに由来する斜方輝石のそれが反映されているように思われる。

また、この試料に含まれる淡灰色、淡褐色、褐色のスポンジ状軽石型ガラスや、斜方輝石および単斜輝石の一部は、その岩相などから1108(天仁元)年に浅間火山から噴出した浅間Bテフラ(As-B, 荒牧, 1968, 新井, 1979)に由来すると考えられる。

さらに、白色のスポンジ状軽石型ガラスや角閃石の多くについては、その岩相などから、6世紀初頭に榛名火山から噴出した榛名二ツ岳渋川テフラ (Hr-FA, 新井, 1979, 坂口, 1986, 早田, 1989, 町田・新井, 1992,2003) に由来すると推定される。

以上のことから、試料 (29A147-53T・Ⅲ層) が採取されたⅢ層に関しては、As-A 降灰後に形成された土層の可能性が高い。

5. まとめ

上野国府等範囲確認調査で採取された土壌試料 (29A147-53T・Ⅲ層) を対象に、テフラ分析(重鉱物組成分析・火山ガラスおよび鉱物の屈折率測定)を実施した。その結果、試料から、榛名二ツ岳渋川テフラ (Hr-FA, 6世紀初頭)、浅間Bテフラ (As-B,1108年)、浅間A軽石 (As-A,1783年) などを検出することができた。とくに、As-A が検出されたことから、特徴的なⅢ層の形成は As-A 降灰後であることがわかった。

対対

- 新井房夫 (1962) 関東盆地北西部地域の第四紀編年. 群馬大学紀要自然科学編, 10, p.1-79.
- 新井房夫(1972)斜方輝石・角閃石の屈折率によるテフラの同定-テフロクロノロジーの基礎的研究. 第四紀研究, 11, p.254-269.
- 新井房夫(1979) 関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層. 考古学ジャーナル, no.53, p.41-52.
- 新井房夫(1993)温度一定型屈折率測定法. 日本第四紀学会編「第四紀試料分析法 2」, 東京大学出版会, p.138-149.
- 荒牧重雄(1968) 浅間火山の地質. 地団研専報, no.14, p.1-45.
- 壇原 徹 (1993) 温度変化型屈折率測定法. 日本第四紀学会編「第四紀研究試料分析法 2 J, p.149-158.
- 町田 洋・新井房夫 (1992)「火山灰アトラス」。東京大学出版会, 276 p.
- 町田 洋・新井房夫 (2003) 「新編火山灰アトラス」. 東京大学出版会, 336 p.
- 町田 洋・新井房夫 (2011) 「新編火山灰アトラス (第2刷)」. 東京大学出版会, 336 p.
- 坂口 一 (1986) 榛名二ツ岳起源 FA・FP 層下の土師器と須恵器. 群馬県教育委員会編「荒砥北原遺跡・今井神社古墳群・荒砥青柳遺跡」、p.103-119.
- 早田 勉 (1989) 6世紀における榛名火山の2回の噴火とその災害. 第四紀研究, 27, p.297-312.
- 早田 勉 (1996) 関東地方~東北地方南部の示標テフラの諸特徴-とくに御岳第1テフラより上位のテフラについて-. 名古屋大学加速器質量分析計業績報告書, 7, p.256-267.
- 早田 勉 (2014) 渋川市有馬寺畑遺跡におけるテフラ分析. 渋川市教育委員会編「有馬寺畑遺跡」, p.197-211.
- 早田 勉 (2016) 浅間板鼻褐色軽石群 (As-BP Group) の層序と前橋泥流堆積物の層位. 岩宿博物館・岩宿フォーラム実行委員会編「ナイフ形石器文化の発達期と変革期-浅間板鼻褐色軽石群降灰期の石器群」, p.6-14.

表3 屈折率測定結果

2004年,(37 27 円 華山) 「二十二一 1000年年		7	斜方輝石		# †
団体・イノン(貞田牛仁)・町本	屈折率(n)	測定数	屈折率(n)	測定数	Ž
上野国府等範囲確認調査・29A147-53T・皿層	1.507—1.511	30	1.704—1.711	31	本報告
《関東地方北西部の後期旧石器時代以降の代表的指標テフラ》					
淺間A (As-A)	1.507—1.512		1.707—1.712		1)
淺間粕川 (As-Kk)			1.706—1.710		2)
淺間B (As-B)	1.524—1.532		1.708—1.710		1)
	1.501—1.504		1.707—1.711		2)
榛名二ツ岳渋川 (Hr-FA)	1.500—1.502		1.707—1.711		2)
	1.498—1.505		1.706—1.712		3)
榛名有馬 (Hr-AA)	1.500—1.502		1.706—1.712		2)
淺間C (As-C)	1.514—1.520		1.706—1.711		2)
淺間D (As-D)	1.513—1.516		1.706—1.708		1)
鬼界アカホヤ (K-Ah)	1.506—1.513				1)
淺間総社 (As-Sj)	1.501—1.518		1.706—1.711		2), 4)
浅間板鼻黄色 (As-YP, 約1.5~1.65万年前)	1.501—1.505		1.707—1.712		1)
浅間大窪沢1 (As-Ok1, 約2万年前)	1.500—1.502		1.704—1.709		1)
浅間白糸 (As-Sr, 約2~2.4万年前)	1.506—1.510		1.702—1.708		1)
淺間萩生 (As-Hg)	1.500—1.502				2)
浅間板鼻褐色(群)(As-BP Group) 上部	1.515—1.520		1.704—1.714		1)
25年	1.508—1.511		1.700—1.709		1)
	1.505—1.515		1.710—1.725		1)
姶良 Tn (AT, 約2.8~3万年前)	1.499—1.500				2)

1):町田・新井(1992,2003), 2):早田(1996), 3)早田(2014), 4)早田(未公表資料). 本報告・3)・4):温度変化型屈折率測定法(壇原,1993). 1)・2):温度変化型屈折率測定法(新井,1972,1993)

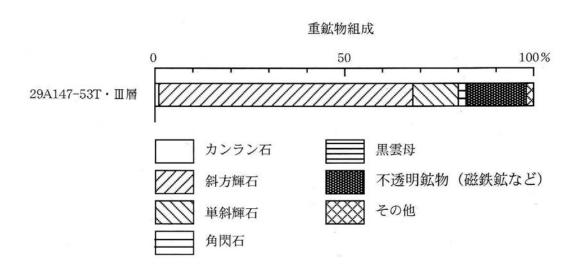


図1 重鉱物テフラ組成ダイヤグラム

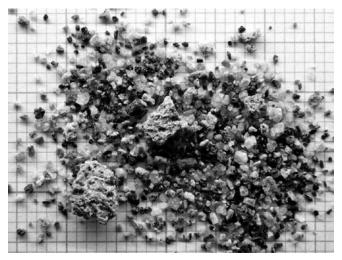


写真 1 29A147-53T・ Π 層 (落射光下) 最大径 7 mm程度のわずかに灰色をおびた白色軽石が含まれている。 背景は 1 mm メッシュ。

Ⅷまとめ

(1) 元総社小学校校庭の様相

平成29年度の元総社小学校校庭の調査(51トレンチ)は、これまでの校庭の発掘調査で一番東の地点での調査となった。その調査では、東西方向に連続する柱穴と、南北方向に走る連続する溝跡が検出された。

①6号掘立柱建物跡について

東西方向に連続して並ぶ柱穴については掘立柱建物跡の可能性が高いとし、6号掘立柱建物とした (Fig.18)。その概要については第5章に記したとおりであるが、一見すると3基の柱穴のように見えるが、精 査の結果、それぞれ2基の柱穴が重複していることが判明し、さらには中央の P_1 についても、2基の重複の可能性が高く、さらには柱穴中央部に露出していた礫については素板の可能性も考えられる。その場合、6号掘立柱建物跡は2時期に亘り存続し、建て替えされている可能性が高い。

もう少し詳しく6号掘立柱建物跡について触れてみると、各柱穴の重複関係から、前期(P_3 — P_1 — P_5)、後期(P_2 — P_1 — P_4)とした場合、前期は、柱間が西から3.0m・2.7mを測り P_1 で屈折して並ぶ。後期は柱間が西から2.7m・2.6mで直線的に並ぶ。前・後期ともに P_1 は他の柱穴と特徴が異なり、 P_1 のみが規模が大きく形状が正円に近い形状を呈して検出され、掘り形に覆土には黄褐色のシルト質土を含んでいた。また、前述のとおり素板として使用された可能性が考えられる円礫が含まれていた。柱穴の並びの方位は、第5章に記載のとおりやや東へ傾くが正方位を意識していると受け止められる。

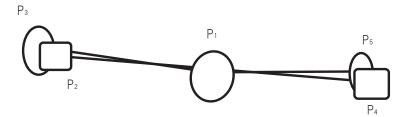
なお、51トレンチでは、6号掘立柱建物跡に属する柱穴は他に検出できなかった。なので、6号掘立柱建物跡がどのような規模の建物であるのかは不明である。6号掘立柱建物跡の柱穴の列は、4m幅で設定された51トレンチの中央やや南に位置しており、柱間の距離を考慮すると、北側・南側ともに柱穴の存在が考えられるため、検証が必要となろう。

これまで元総社小学校校庭では5棟の掘立柱建物跡が検出されているが、すべての掘立柱建物跡が同時に建てられていたわけではなく、前後関係を持っていることが確認されており、その位置についても3号掘立柱建物跡以外は柱列の軸線が同一であったり、または1間ずらしたり等、互いの位置を意識したように建てられている。6号掘立柱建物については、建物跡自体の全容が明らかになったわけではないので現段階で他の掘立柱建物との位置関係を述べるのは早いかもしれないが、現時点で検出されている6号掘立柱建物跡の柱穴と、これまでに検出されている5棟の掘立柱建物跡と比較すると、4号掘立柱建物跡および5号掘立柱建物跡の北側の桁の軸線に近いようにも思える。しかしながら、元総社小学校で検出されている6棟の掘立柱建物の中では、正方位を意識して建てられていると考えられるものの、軸線が一番正方位からずれているように思われる。

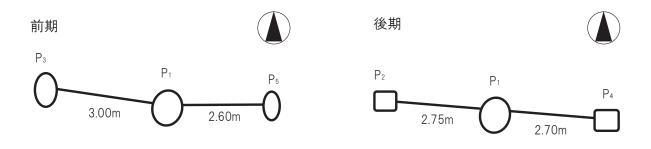
②平行して連続する溝跡について

6号掘立柱建物跡の東約1mの地点で、南北方向に走る4条の溝跡が検出された。西から順に1号・2号・3号・4号溝跡と遺構名を付したが、各溝跡の検出状態について改めて見てみると、1号溝跡は最大幅1.36m、遺構確認面からの深さは20cmで、断面形状は浅いU字形を呈する。2号溝跡は最大幅1.3m、遺構確認面からの深さは25cmで、断面形状は浅いU字形を呈する。1号溝跡と2号溝跡は、断面的には浅く連続性をもつが、平面形状では1号溝跡は調査区内で終息する気配を呈する反面、2号溝跡は調査区北側まで続く様相を呈する。3号溝跡は掘り形が不定形で凹凸が著しく溝とは考えにくい状況で、掘り形の最大幅0.9m、確認面からの最大の深さは20cmを測る。4号溝跡は最大幅1.00m、遺構確認面からの深さは27cmで、断面形状は逆台形を呈していた。3号溝跡と4号溝跡の間も若干の掘り下げが確認できたが、1号・2号溝跡ほどの連続性はない。このように、4条の溝跡は位置・走行では一体感があるが、細かく比較すると形状は一様ではない。特に、3号溝跡は溝跡とし





6号掘立柱建物跡



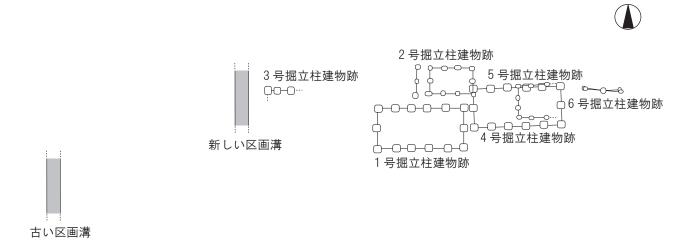


Fig. 35 6号掘立柱建物跡模式図とその他の掘立柱建物跡との位置

て遺構番号を付しているが、形状的には溝とは言い難い状況を呈している。

これら各溝跡に関して特筆しておきたいのは、その覆土についてである。1号・2号・4号溝跡の覆土は砂質もしくはシルト質で、拳よりもやや小さい大きさの円礫を包含するという点で共通している。中でも1号・2号溝跡は特に覆土が砂質で礫を多く包含していた。この状況で溝跡を区分するならば、砂質が著しい1号・2号溝、覆土がやや砂質な4号溝跡、覆土が砂質ではない3号溝跡に区分される。この砂質の土であるが、砂礫をランダムに包含するような状態でラミナは発達していなかった。2号溝跡では炭化物も包含されている状況や、4号溝ではやや砂質を呈しながらも土が多く含まれている状況、さらには土師器や須恵器の破片などの遺物も少なからず含まれている状況からも、牛池川の氾濫などの水害で溝へ砂礫が流れ込んだものと考えるのは難しいように思われる。

③元総社小学校校庭内に存在した施設を区画する構造物に関して

51トレンチの調査目的は、第1章でも述べたとおり、多くの掘立柱建物跡が検出されている元総社小学校校庭において、これら掘立柱建物が属する施設の東限の確認である。51トレンチの調査結果では、区画溝や築地塀の痕跡は認められなかった。逆に6号掘立柱建物跡の検出により、掘立柱建物がまだ分布する可能性も考えられる。南北方向に走る4条の溝跡については、その状況を検討してみると4条の溝が一体となって区画施設を成していた、もしくは区画施設の痕跡として4条の溝跡が残ったと判断するには難しい状況であると考えられる。ただ、上記のとおり、覆土に砂を多く含む状況はあるものの、かといって溝が自然に埋没したものとは考えにくいことから、何かしらの人の意図が存在したことには間違いない。残念ながら平成29年度の調査成果からは、その先を推し量る程の成果を得ることはできなかった。

しかしながら、51トレンチの東半では遺構確認面で浅間C軽石を含む黒色土層(基本層序IV層)が確認できた。この状態から、台地自体は頂点を過ぎて東に向かい緩やかに傾斜を始めているものと考えられるが、牛池川の断崖には達していないことから、今後さらなる調査が必要となろう。

(2) 元総社小学校西方の様相

元総社小学校の西方の調査は、平成24年度の調査以来度々実施している。住宅密集地域のため発掘調査が可能な箇所は限定されているが、これまでの発掘調査で掘立柱建物跡(平成27年度調査・44トレンチ)や東西方向の区画溝(平成26年度調査・31トレンチ)が検出されたほか円面硯の破片が出土する等、官衙関連施設の検出が期待される地域である。

平成29年度に実施した54トレンチの調査は、元総社小学校西方でも一番西に位置し、主要地方道前橋・安中・ 富岡線を隔てた南には天神遺跡や上野国府26・46トレンチが位置している。平成24年度に実施した15・16トレン チの調査結果などから想像していなかった留意すべき調査成果を得ることができた。

54トレンチの調査結果

54トレンチでは、住居跡8軒のほか特筆される遺構として、古代の道路跡1条、同じく溝跡3条、掘立柱建物跡の柱穴と推定されるピット1基が検出されたほか、古代のピットが一直線上に位置する状態で検出された。

①道路跡について

54トレンチで検出された道路跡の概要については第5章に記述したとおりであるが、側溝を持たず、道路面 (硬化面)のみの道路であるが、道路面は非常に硬化しており道路面を構成する土の中から土器の細かい破片が 多く出土した。道路跡は一定の幅を保ちながら検出されていないので、厳密な走行を判断するのは困難ではあるが、概ね北から西へ約20度の傾きを持つと考えられる。この道路面は浅間B軽石を包含する通称浅間B軽石混入 土層 (基本層序 I b 層)の直下で検出された。

同時期と推定される同様の道路跡が上野国府26トレンチ(平成25年度調査)で検出されているが(2号道路状遺構)、この道路跡は側溝を持たず硬化面のみの道路で、北から東へ66度の傾きを持つと考えられる(前橋市教育委員会 2015)。検出されたのも通称浅間B軽石混入土層(基本層序Ib層)の直下であることから、54トレンチの道路跡と同時期と考えられる。

26トレンチの2号道路状遺構と54トレンチの1号道路跡が時期的に同時であるならば、両方の道の角度は約86度と90度に近いことから直角に交差していたことが予想される。また26トレンチ2号道路状遺構の角度は谷を挟んだ南側に存在が推定されている東山道駅路国府ルートの64度に近い。26トレンチの2号道路状遺構と54トレンチの1号道路跡が使用された時期を考えても、国府ルートが通っていた時期と重なると考えられる。直接的に道路同士の交差や各道路の延伸が確認されていない現状では、これら道路の有機的な関連は推測の域を脱し得ないが、今後、調査が進み関連性を明らかにすることができれば、10世紀以降の元総社町付近の地割や土地区画を推測するための材料と成り得るであろう。

②溝について

54トレンチの西端で3条の古代の溝跡が検出された。溝跡は一番古い1号溝跡のみが斜方位に走り北から西へ32度の角度をもつ。2号溝跡と3号溝跡は西へ2度傾く状況から正方位を意識しているもの推定される。その他に1号溝跡は断面形状が逆台形を呈し覆土に砂層土のブロックが多く含まれていたが、2号・3号溝跡の断面形状はV字もしくはU字を呈し、覆土に浅間B軽石が包含されていた。このように方位だけでなく他の点でも1号溝跡と2号・3号溝跡には差異が見られる。ここで特筆しておきたいのは、2号・3号溝跡の時期についてであるが、発掘調査した範囲では両溝跡の覆土から中世の遺物は含まれておらず、覆土に浅間B軽石が包含されるものの時期的には古代末頃を想定される。2号・3号溝跡は走行が同一であるが、3号溝跡のほうが2号溝跡よりも幅が広い。両溝跡は約1.2mの間隔を設けている。調査区内で長さ約2.5mに亘り精査を行ったがピット等は検出されなかった。また、断面を観察してみても、両溝跡は浅間C軽石混入黒色土層(基本層序IV層)を掘り込んで掘削され、浅間C軽石混入黒色土層の上層は通称浅間B軽石混入土層(基本層序IV層)となっており、両溝跡の間に構築物の痕跡を認めることはできなかった。現状では、この2条の溝跡の性格は不明と言わざるを得ない。

なお、1号溝跡については、重複関係から2号・3号溝跡よりも古く位置付けできるが、調査範囲では3号溝跡と重複しており遺物も3号溝跡と混在してしまっていることから、残念ながら上限の判断が難しい。いずれにせよ斜方位を意識した区画溝として機能していたことが推定される。

③ピットについて

54トレンチではピットが合計で11基検出された。そのうちの5基についてはピット列として扱った。その他に、ピットとして遺構番号を付したもの以外にも同様の遺構が存在する。その遺構の代表格が1号掘立柱建物跡の柱穴としたピットである。

このピットについてであるが、遺構確認時に焼土・灰・炭化物を多量に含む円形の土の分布を中心として検出されたもので、断面の状況や底面に柱の当たりと考えられる硬化面が確認できたことから、掘立柱建物跡の柱穴と認定したものである。また、同様のピットがトレンチ内では検出できなかったことから、このピットを掘立柱建物の隅の柱穴と仮定し、検出できた柱穴の形状から推測して、この掘立柱建物跡は正方位を意識したと想定したものである。

その他にピット番号を付さなかったものが存在する。8号土坑中に存在するピットで(Fig.26参照)、8号土坑と重複しているが、土層観察により、8号土坑よりも新しい切り合い関係をもつと判断された。8号土坑掘り下げの時点で、方形で形状はしっかりとしているが比較的浅い8号土坑に比べ、掘り形が深く、底面に柱の当たりと考えられる締まりが認められた状況から、別の柱穴の可能性が高いと判断した。なお、8号土坑自体につい

ても平面形状が方形で底面の西寄りに浅く窪む部分とその中央部分に締まりが認められた状況から、柱穴の可能性が考えられる。なお、8号土坑の北西に位置する4号ピットも底面に締まりが認められた。これら遺構の有機的な関連性は現状では認められないが、1号掘立柱建物跡と認定したピットも含めて、この付近に別の掘立柱建物跡の存在を予期させるものがある。

なお、ピット列とした5基のピットについては、南からそれぞれ2.1m、3.3mの間隔を測る。特に P_2 と P_3 群については底面に柱の当たりと考えられる締まりが認められた。間隔が不定であり、トレンチ内の一番北で検出された P_3 は3基のピットの重複であるが、南の P_1 、 P_2 ではそのようなピットの重複は認められないなどの幾つかの問題点は存在するが、北から西へ4度の傾きで一直線上に並んだことから、ピット列として認定した。はたしてピット列であるならば、柵などの空間を区画する構造物が設けられていたと推定されるが、1号掘立柱建物跡はこのピット列の東に位置し、8号土坑とその周辺のピットは西に位置する。この状況では施設の内外を判断するのは難しく、逆に、ピット列の性格や、この5基のピットが本当に有機的な連続性を有するのかも検討したいところである。

④54トレンチの出土遺物や遺構について

54トレンチで出土した遺物についてであるが、まず特徴的な点として、緑釉陶器の破片が元総社地区内としては比較的多く出土した。染谷川の左岸沿いは緑釉陶器が多く出土することが以前から指摘されており、54トレンチもその範疇で捉えることができる。

また、54トレンチでは須恵器の凸帯付四耳壺の破片 4 点が出土している(Fig.34・Tab.4・PL.13,54-46)。この土器の出土位置は7号住居跡の推定範囲の南側のIII層中を中心として出土している。なお、各破片の特徴からこの4点は同一個体と考えられる。この器種の県内での出土例は太田市世良田下諏訪遺跡、伊勢崎市舞台遺跡、玉村町福島曲戸遺跡から出土しているのみで、非常に少ない。凸帯付四耳壺は8世紀から9世紀にかけて信濃国各地の窯で生産され集落からも普遍的に出土する器種であるが、信濃国以外での生産・出土は少なく、信濃国独自の器形と考えられている器種である。8世紀前半の美濃国で生産された凸帯に瘤状の耳が付属する器形の須恵器を祖形に8世紀後半に信濃国独自の器形に発展したものと考えられ、信濃国内に急速に普及したとされるが、その生産・普及に信濃国府の関与が考えられるという(山田 1999)。

遺構と遺物に関しては、3 号住居跡と4 号住居跡については、遺構確認当初から遺物の集中が確認されていたが遺構の明瞭な形状が確認できず、土層確認のためのベルトを設定しグリッド毎に掘り下げて調査を行った。結局、他の住居跡のように壁や床面が明瞭に確認することができなかった点や、完形もしくはそれに近い状態にすることができる土器の量が1 軒の住居跡としては多量であることから、住居跡ではない可能性が考えられる。また、4 号・5 号土坑についてはサブトレンチ内で確認できた程度ではあるが、規模が大きく深いこと、さらに土坑は粘質化した漸位層(基本層序V 層)に達していることから、粘土採掘坑である可能性を考えたい。

⑤元総社小学校西方から小学校にかけての地形と遺構の分布について

平成24年度時点では、10世紀代の住居跡が数軒検出されたのみであり、その調査結果からは平安時代後期に集落が営まれたということのみであったが、54トレンチの調査により、これまでよりも進展性のある成果を得ることができた。地形的にも54トレンチの位置は、現況で北東から東に向けて見下ろす台地上に位置し、現在、遺跡に立ち東を向くと、通称日高道を挟んだ東に位置する家屋の1階部分は隠れて見ることができない。54トレンチでは基本層序に則った層序を確認することができたが、そこから台地が下がる斜面上に位置する15・16トレンチでは台地が下る斜面上に位置することになるが、ここではやや薄くはなるが、基本層序に近い状態で層序を確認できる。傾斜を下りきった43トレンチや44トレンチでは蒼海城に関連すると推定される整地や土取りにより一部層序は薄くなるが、基本層序Ⅲ層やⅣ層は堆積が認められた。しかしながら元総社小学校が近くなる31トレンチや32トレンチは表土の下層が総社砂層となっており、基本層序に則った層序は認められなくなる。元総社小学校

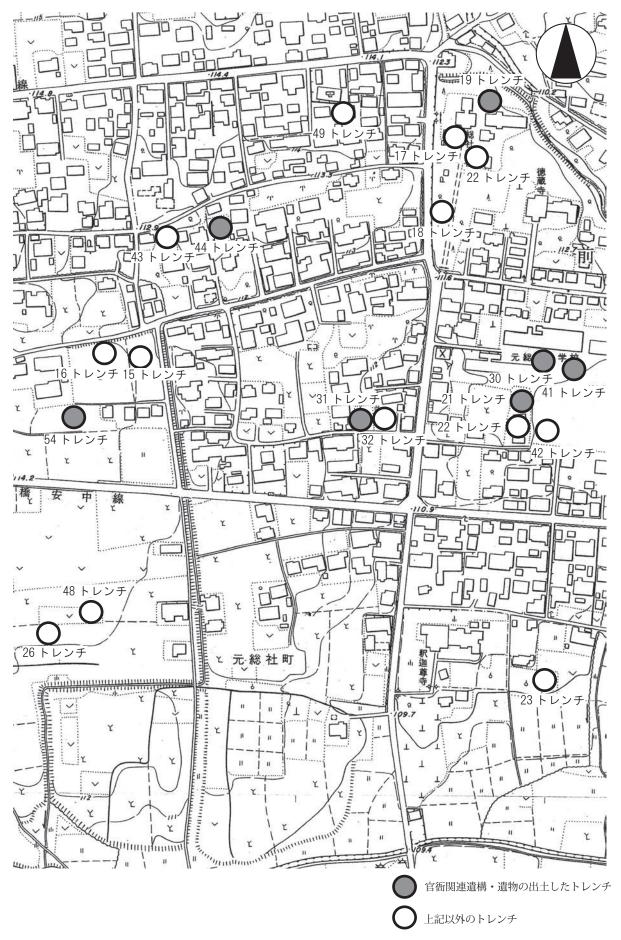


Fig. 36 元総社小学校西方の様相

も同様である。54トレンチから東へ進むにつれて土が削り取られてゆくという現象が現況の地形の形成にどの程度反映されているのか判断が難しい部分もあるが、土取りにより家屋の一階部分の高さの土が削り取られたとは考えにくいことから、元総社小学校の西方に当たる元総社町の「本村」地域は、東へ行くに従って傾斜する地形であると考えたい。そして、西の台地を登りきった先の染谷川に至るまでの範囲では天神遺跡や上野国府26・46トレンチなどの多くの遺構が検出された地点も多く存在し、これらの遺跡では緑釉陶器や鏡などの出土遺物が破片ではあるが出土している。天神遺跡や上野国府26・46トレンチでは掘立柱建物や区画溝などは検出されておらず、そうした点では、検出された遺構に元総社小学校西方でも小学校に近い範囲とは差異がある。この点については国府域解明のために重要であると考えられるため、今後も注意していきたい。

(3) 推定東山道駅路国府ルートについて

52・53トレンチの調査結果

平成29年度調査における東山道駅路国府ルートの調査では、平成28年度調査の54a・54bトレンチ検出の古代の道路遺構について、その延伸をさらに東の地点で検出するという目標を掲げて実施した。調査地点として選定したのが、染谷川左岸の「芦田堰」に沿った堤防状の道路の南側に位置する53トレンチと、さらに東の、同じく染谷川左岸の台地上に位置する52トレンチである。

52・53トレンチの基本的な層序と遺構検出状態については第4・5章で述べたとおりで、結果としては道路遺

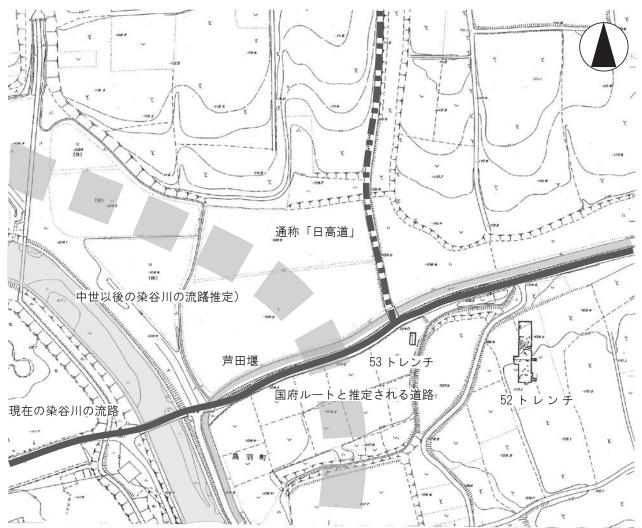


Fig. 37 52・53トレンチと染谷川

構の検出には至らなかった。

52トレンチについては、土取りにより奈良・平安時代の遺構が確認できない状況であった。よって、道路遺構の有無は不明である。ただし、周辺の畑で土師器や須恵器の破片が採集されることや、1号溝跡から古代の遺物が出土している点、さらには北側を東西に走る蒼海城の堀跡(谷?)を挟んだ対岸では詳しい内容は不明であるが10世紀前後の集落が検出されていることから、少なくとも住居跡は存在したと考えるのが妥当であろう。地元にお住まいの方の聞き取りによると、周辺の地形は戦後から特に変化はないとのことであったので、土取りが行われたのは中世以後であろうか。

53トレンチの調査については、道路遺構の検出のほか、芦田堰に沿った堤防(道路)の成立した時期の確認も目的とし実施した。調査結果であるが、道路遺構については検出されなかた。土層観察および検出したテフラの分析結果(早田 2019 (本報告書第6章参考))によると、元々、付近は河川の流路であったが、その後、離水しながら田そして畑へと利用されていく変遷を追うことができた。その変遷を詳しく見ていくと、シルト質土層(VI層)とその上層の砂層(V層)については、砂層のラミナの堆積方向から北西方向からの水流により砂が堆積したと推測できることや付近の地形観察から、シルト質土層と砂層は染谷川により形成されたと考えるのが自然であろう。現在、染谷川の流路は西へと移動していることと、砂層の上層は高師小僧が多く見られたシルト質土層であることから、流路が西へ移動したことによりシルト質土が堆積し、そこに芦が密生していたと考えられる。その上層(Ⅲ層)は粘性が強く砂を含んでいるものの高師小僧が減ることから離水がかなり進んでいる状態と考えられる。また、この層中に天明3(1783)年堆積の浅間A軽石が含まれていることから、Ⅲ層は18世紀後半に形成されたと考えられる。その上層のⅡ(a・b・c)層はそれ以後に形成された層と考えられるが、Ⅱa層は水田の床土が検出されたことや、付近では戦後間もない頃まで積極的な水稲栽培が行われていたとの地元の方の話から、耕地として利用されたのは近世以後なのかも知れない。なお、VI層以前については、第5章に記載のとおり、トレンチ最深部(VI層上面)から約80cmで硬い層に達したことと、その間は簡単にピンポールを突き進めることができたことから、VI層の下位は、河床礫層もしくは総社砂層の基盤層に達したものと推定した。

53トレンチの調査で特に注目したい事項は①北西方向からと考えられる水流によりシルト質土および砂礫が比較的厚く堆積していたこと。②その時期が浅間A軽石降下よりもかなり前であること。の2点である。このことから、18世紀後半以前、53トレンチの位置する低地は、染谷川の流路であったと推定される。ここで推定東山道駅路国府ルート沿いの芦田堰について触れておきたい。芦田堰は地元で「しんぼりっかわ(新堀川)」の通称で知られ、大友町方面から小河原堰で引水した水を一度牛池川へ放流し、やや下流で再度牛池川から引水して釈迦尊寺の南をほぼ東西方向に西へと流れ、染谷川へと合流している。「しんぼりっかわ」の名称については通称なので詳細は不明であるが、おそらく付近を流れる五千石用水よりも新しい「堀川」なので、その通称が使われたものであろう。芦田堰の成立年代について詳しい時期を確認することができなかったが、おそらく五千石用水成立直後であることから、芦田堰に沿った堤防状の道路については、古代に構築されたものではなく、江戸時代に芦田堰の開削にともなって構築されたものと考えたほうが自然であろう。

ただし、推定東山道駅路国府ルートと芦田堰の流路が連続性をもつという点には注意が必要と思われる。芦田堰の開削時点で、すでに何かしらの地割が存在し、それを踏襲するようなかたちで芦田堰は掘削されたのであろうか。その「何かしらの地割」として、その連続性から東山道駅路国府ルートの可能性があるのではないだろうか。そうした場合、染谷川の氾濫原である谷地の中を、染谷川右岸からの連続性を維持した橋のようなものが低地を渡っていた時期があったのであろうか。それとも、あくまでも氾濫原を渡り切った台地上のみ連続性を維持した道路が続いていたのであろうか。

なお、染谷川を渡り切った台地上についても、「推定ルート」上を現状として通る市道に近い位置で発掘調査 を実施した平成25年度の24 a・24 b トレンチの調査でも、土層の撹乱が著しかったこともあり、道路遺構の検出 はできなかった。平成29年度の52トレンチの成果を含めても、染谷川以東の推定東山道国府ルートの位置については、調査を継続する必要があろう。

なお、染谷川の渡河方法であるが、群馬町教育委員会が実施した推定東山道駅路国府ルートの調査で、天王川を迂回する道路遺構が検出されている(群馬町教育委員会 1983)。場合によっては、同様に川に達した際に渡河しやすい地点まで迂回している方法が推測される。いずれにしても、染谷川での渡河に関連した遺構は未発見のため、詳細は不明である。

ちなみに、染谷川に現在掛る橋についてであるが、現在は「南栄橋」の名称が使用されているが、この橋は「勅使橋」と伝えられ、かつては「いなかけばし(稲架橋?)」と呼ばれていたという。その名前の由来として、都からの使者が染谷川を渡る際に、東山道がぬかるんでいたため、そのぬかるみに稲藁を敷いて使者を通したとの伝承が言い伝えられているという。

(4) 推定蒼海城本丸跡付近と宮鍋神社付近の様相

①調査結果について

50トレンチの調査は元総社蒼海遺跡群(124)の補完調査ではあったが、調査の結果、推定蒼海城本丸付近の状況を垣間見ることができた。

まずは、土層についてであるが、蒼海遺跡群(124)の報告中(前橋市教育委員会 2017)にも記載のとおり、現在の表土の下層に土塁と考えられる土層の堆積が確認でき、さらにその下層に浅間B軽石混入土層(基本層序 I b 層)と奈良・平安時代の遺物包含層(基本層序 II 層)へと続いていた(Fig. 5)。検出された主な遺構は、住居跡、土坑、ピット、溝跡である。住居跡は7世紀後半(奈良時代)が1軒と他は10世紀・11世紀代(平安時代)である。7世紀代の住居跡は、蒼海城本丸北側の元総社蒼海遺跡群(14)の5トレンチで10軒検出されていることから、国府成立前に牛池川右岸地域の台地上に広がっていた集落の一部であろうと考えられる。10世紀・11世紀代の住居跡は、宮鍋神社周辺の元総社蒼海遺跡群(99)、推定上野国府28トレンチや36トレンチなど多数検出されていることから、当該期にこの付近に集落が存在していたと推定される。

その他に調査区中央部で土坑が重なるように集中して検出されたが、粘質化した漸位層(基本層序 V 層)もしくは総社砂層上部(基本層序 VI 層)で掘り下げを終了している点や、無作為に掘られたような状況から、その性格として粘土採掘坑を想定したい。

なお、4号・5号住居跡の下位でピットが集中して検出されたが、調査区の幅も狭く、有機的な連続性を認めることはできなかった。

②国庁推定地B案・C案付近の様相

国庁推定地B案(蒼海城推定本丸)と国庁推定地C案(宮鍋神社付近)については、上野国府等範囲内容確認調査の開始と同時進行で元総社蒼海遺跡群の発掘調査も着々と進行し、発掘調査の成果が増えつつある。その成果をまとめて中世以前について時期的な変遷を簡単に記述すると以下のとおりである。

- i. 6世紀代から7世紀初頭 集落の展開。牛池川右岸に集落が営まれる。
- ii. 8世紀から9世紀代

掘込地業をもつ建物や掘立柱建物により構成された施設が設けられる(官衙か)。 この施設は大溝により区画されていたと推定される。

iii. 10世紀以後

住居跡が多量に建てられる。その様相は「集落」というよりも「集中」に近い。その集落の中には小

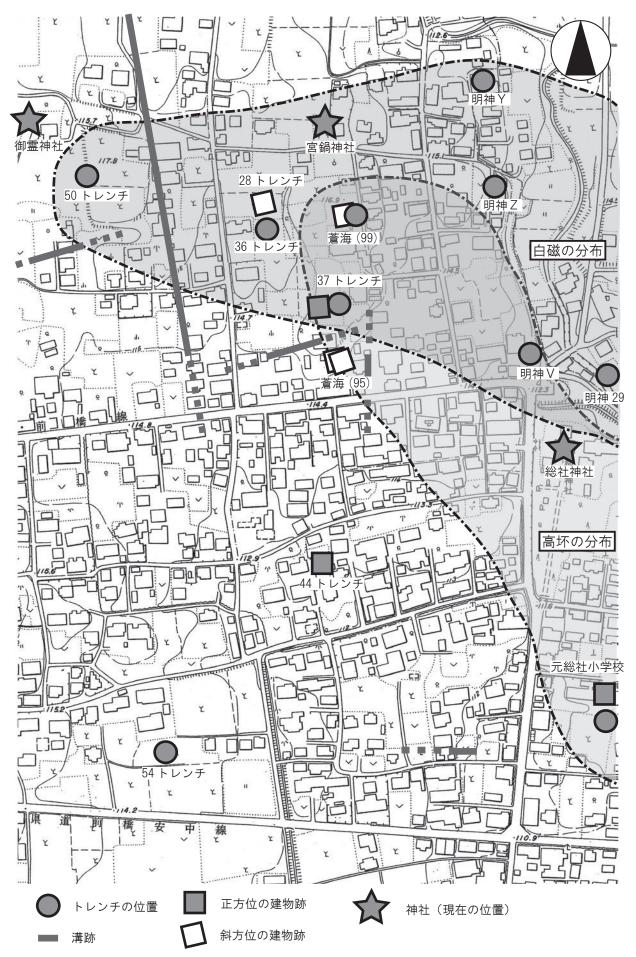


Fig. 38 国庁推定地 B 案・C 案周辺の様相

鍛冶的な性格の遺構も含まれる。

前時期に区画溝として存在した大溝は本来の性格が失われて埋没を開始し、その半ばで道路として使用されたと推定される。

7世紀と $10 \cdot 11$ 世紀代の住居跡が検出され、 $8 \cdot 9$ 世紀代の住居跡は極めて少ないという状況はこれまでの国庁推定地やその周辺における調査でも一般的に言われてきた傾向と一致する。その一方で、国庁推定地とその周辺で検出された掘込地業をもつ建物や掘立柱建物は $8 \sim 9$ 世紀に建てられたと推定されている。このことから、この付近は一般的に国府が成立した考えられる時期の直前までは、6世紀代から伝統的に営まれ続けられてきた集落が広がり、国府が成立した8世紀代になると官衙関連施設 $^{*(1)}$ が建てられ、国府が衰退してゆく10世紀代に再び住居跡が多く建てられ集落(と捉えてよいか疑問も残るが)が形成されたと考えられる。

なお、発掘調査の経過としては、先に宮鍋神社周辺における発掘調査が先行し、その後、区画整理の進捗に伴い、蒼海城推定本丸付近の発掘調査が実施された。上記のような傾向は宮鍋神社周辺のみの傾向と思われたが、 蒼海城推定本丸付近でも同様な傾向であることが判明した。

ちなみに、7世紀の後半と推定される北から東へ約30度の傾きを持つ溝が宮鍋神社の南側で検出されている*
②。この溝の底面には、水の流れた痕跡は認められず、断面も逆台形である特徴から、区画溝的な要素が強い。
7世紀後半から末にかけては、牛池川の左岸になるが元総社蒼海遺跡群(9)でその時期に属すると推定される長舎形の掘立柱建物が検出されている。この建物跡は北から西へ62度の傾きを持ち、その後の8世紀から9世紀にかけての北から西へ10度程度傾く建物や区画溝よりとは、その傾きで一線を画する。しかしながら、元総社蒼海遺跡群(9)の掘立柱建物跡と、この区画溝との関連性は、現時点では不明である。また、この溝と一連のものとなる溝も現在のところ付近では検出されていない。この区画溝は覆土中位付近に硬化面が確認され、そのことから埋没していく過程で、一時期、道路として使用されていたことが判明している。しかし、斜めに進む道路がどの方向を目指してしたのかもよくわかっていない。この溝の解明については、8世紀代の官衙施設の成立を考える上でも重要と考えられ、今後の課題と言える。

③出土遺物について

国庁推定地B案(蒼海城推定本丸)と国庁推定地C案(宮鍋神社付近)、さらには元総社小学校付近にかけて出土する10世紀代以降の時期に属する出土遺物は元総社地区でも非常に特徴的である。

まず、一つめとして、当時の高級食器である緑釉陶器や白磁の破片が出土する点である。緑釉陶器については元総社町の染谷川右岸沿いの蒼海遺跡群からその南の天神遺跡にかけてからも多く出土することが以前から言われているほか、平成29年度に発掘調査した54トレンチや元総社小学校校庭で検出された比較的時期の新しい区画溝(30トレンチ)でも破片が出土しているため、緑釉陶器については染谷川沿いと牛池川沿いから出土する傾向が高いと言えよう。白磁についてはFig.38のとおり、50トレンチから宮鍋神社周辺、さらには牛池川沿いの元総社明神遺跡29・V・Y・Zトレンチでも破片が出土している。さらに、出土状態についても、完形もしくは接合の結果完形に近い状態にすることは難しく、遺構の覆土もしくはグリッド一括で破片が出土するという点も特徴的である。

二つめとして、土師質の高坏である。この土器は元総社小学校寄贈の同校出土と推定される一括資料の中に含まれ(前橋市教育委員会 2016)ていたほか、さらに宮鍋神社周辺の元総社蒼海遺跡群(99)とそれに関連する調査(推定上野国府(33))で、10世紀から11世紀代の遺物ともに溝跡や落ち込みから出土したことで、その存在が認識された土器である。その後、この高坏の破片が宮鍋神社周辺の調査でも出土したほか、推測の域を脱し得なかった元総社小学校の校庭においても住居跡の覆土から破片が出土したことにより、元総社小学校の寄贈資料についても口伝どおり校庭から出土した蓋然性が高くなった。この高坏は宮鍋神社周辺から元総社小学校付近のみでしか現在のところ出土が確認されていない特殊な土器である。この高坏は同時期の他の土器と比較して、

胎土に砂を多く包含し、焼成についても白色に焼き上げている。器体を白色に仕上げたのが意図的であるとするならば、その整形の技法からも、同時期の平安京等の宮都で使用されている白色の高坏を意識している可能性を指摘しておきたい。出土状態も住居跡・溝跡・落ち込みの覆土から破片で出土し、完形に近い状態にすることが難しいことから、廃棄の際に破壊したのであろうか。なお、この高坏に胎土や焼成が酷似した坏や高台が付く皿が分布を同じくしている点にも注意が必要であろう。

三つめとして、長さが2cmに満たない程度の扁平な小礫や、須恵器大甕もしくは瓦の破片を打撃や削りで円盤型に仕上げた転用品の出土についてである。前者の扁平な小礫の石材は、石英、青黒い色のチャートもしくはそれに類した石で、色覚的に白と黒を意識しているのは明確であり、用途については、その大きさや色から碁石を想定したい。なお、灰釉陶器の釉の塗られた部分や、内外面を黒色処理した土器の破片で、この小礫に近い大きさに打ち欠くことで円形に仕上げた転用品が出土する例があるが、これについても白・黒の色覚的な要素の強調とその形状的な特徴から、その用途に碁石を考えたい。また、須恵器の大甕や瓦を転用した円盤形の土製品も出土する。これらは「碁石」よりも大きくて厚く、色覚的にも須恵器や瓦の青灰色・灰褐色・灰白色が多い。その性格としては、中には碁石のような目的で使用されたものも存在するかもしれないが、それよりもむしろ遊具の駒のようなものを想像したい。

その他に、50トレンチでは銅製品が出土している。特に6号住居跡からは「阿部私印」と読める銅印が出土している。この銅印は6号住居跡の床面直上から印面を下にして出土している。6号住居跡の時期としては10世紀後半を想定しているが、同時期の他の住居よりもやや大きく掘り形が深くて周溝を持つなど、比較的しっかりとした構造をもち、カマドも灰や焼土の分布が少なかった。出土状態から銅印は6号住居が廃絶した直後からその位置は保たれていると考えられるが、そのまま6号住居跡と有機的な関係を持つと判断してよいのか。逆に、銅印が6号住居跡に有機的に関連する遺物であるとするならば、6号住居跡はどのような性格をもつ建物なのか。この報告時点では、そこまで踏み込んで考察することができなかったことから、蒼海城推定本丸と宮鍋神社付近の10世紀以降の様相をさらに深く理解する上での重要な要素として、今後の課題としたい。

(5) おわりに

平成29年度調査の成果をうけて、今後の課題として以下の点にふれておきたい。

元総社小学校校庭と、元総社小学校西方のこと

元総社小学校校庭の調査は区画施設の検出を目的に実施したが、掘立柱建物跡の可能性が高い柱列と溝跡を検出する結果となった。検出された6号掘立柱建物は、51トレンチの調査のみで全体像を把握することができなかったので、隣接地を調査し、それに関連する柱穴などの遺構を確認する必要があろう。また、4条の溝跡についても、51トレンチ外でその延伸が推定される地点で調査を行い、溝跡の全体像を把握する必要もある。また、区画施設の検出とあわせて、元総社小学校の校庭が立地する台地はどこまで続くのかも確認する必要があろう。51トレンチは現時点での体育館北側にあるその入口の手前付近に位置している。体育館の西側で台地が牛池川の谷へと落ち込むこともなく、区画施設も検出されなかったとするならば、体育館が建てられている位置、もしくはそれよりも東で台地は牛池川の谷へと落ち込むことが考えられる。ちなみに、現在の牛池川は河川改修により若干東へ流路が移動しており、本来の牛池川の流路は現在の牛池川右岸の遊歩道付近にあったようである(群馬県埋蔵文化財調査事業団 1993)。

元総社小学校の西方の状況については、これまでに平成26年度調査の31トレンチで東西方向の区画溝が検出され、なおかつその終点が検出されたほか、44トレンチで掘立柱建物跡が検出されるなど成果があった。そして、 平成29年度の54トレンチの調査結果がさらなる新しい扉を開いてくれた。 地方主要道前橋・安中・富岡線よりも北で、通称「日高道」より西での調査は平成24年度以来2度目となるが、平成24年度調査の成果から推定されていたこの付近の様相が大きく変わる可能性がある。

54トレンチの調査成果の基づく今後の課題については、大きなところでは以下の2点である。

- ①1号掘立柱建物跡とピット列が成り立つのかどうかの範囲確認を行う。さらに底面に柱の当たりと考えられる締まりをともなうピットの存在から掘立柱建物跡の存在が推定される。また、柱痕に焼土・灰・炭化物が多く包含されるという状況はどのような事象の裏付けと成り得るのか。
- ②方位の異なる古代の3条の溝について、その範囲確認を行い、新たな情報が得られた時点で時期に関する再 検討を行い、その性格について検討する。

また、54トレンチで検出された住居跡は、7号住居跡が8世紀代である以外は9世紀もしくは10世紀代にかけての時期と推定されることから、掘立柱建物跡やピットがどのように絡んでくるのかも課題である。54トレンチの隣接地もしくはその周辺でのさらなる調査が必要となろう。

52・53トレンチを調査した際に、芦田堰に沿った推定東山道国府ルートから東を見ると、真っ直ぐ遠くに群馬県庁を望むことができた。もしかしたら、平安時代の終わりの頃、都から東山道をはるばる歩き、碓氷峠を越えて、国府ルート(がここを通過していたとするならば)を東へ進み、染谷川を渡り終えたところで上野国府へと辿りつく。在りし日の目前に広がっていたであろう光景を思い浮かべながら、現在、目の前にひたすら続く細い道と県庁を眺めた。

上野国府解明の道のりは果てしなく遠いと思われるときが度々ある。しかしながら、関係者のみなさんの助力で、少しずつではあるが解明へと近づけているように感じる。この業務に携わる立場の責務として、一歩一歩着 実に成果を積み上げ、必ずや目標に達したい。

なお、本事業の遂行にあたっては、関係者の皆さんのほか、発掘調査に協力してくださるだけではなく、本では知ることのできない郷土史の情報をご教示いただけるほか、暑い日には手製の梅干しを差し入れしてくださるなど、いろいろな面で応援してくださる地元の元総社地区の皆さん、校庭の発掘調査をいつも快諾してくださる前橋市立元総社小学校の皆さん、末筆ではありますが大変厚く感謝申し上げます。

註

- (1) ここで言う「官衙関連施設」とは、検出されている遺構の詳しい性格が不明であることから、可能性の考えられる「上野国府」もしくは「群馬郡家」などとし、あえて、その性格は断言しないこととしたい。御容赦願いたい。
- (2) 平成24年度調査の10トレンチ・11トレンチでも検出されている。平成24年度調査報告では中世の溝として報告されているが、覆土に浅間B軽石が包含されない点や、6世紀から7世紀の遺物を中心に包含し、中世に属する遺物が包含されない点から、7世紀後半に属する遺構としておきたい。

【主要参考文献】

尾島町教育委員会 1998 『世良田諏訪下遺跡』

かみつけの里博物館 2007 『江戸時代、浅間山大噴火』第16回特別展図録

川原嘉久治 2011 『上野国府跡』前編・後編

群馬県 1991 『群馬県史』通史編2

群馬県教育委員会 1983 『東山道』群馬県歴史の道調査報告書第16集

群馬県土木部・脚群馬県埋蔵文化財調査事業団 2002 『福島曲戸遺跡・上福島遺跡』

- 助群馬県埋蔵文化財調査事業団 1993 『元総社寺田遺跡Ⅰ』

群馬県立歴史博物館 2001 『古代のみち―たんけん!東山道駅路―』群馬県立歴史博物館第70回企画展図録

群馬町教育委員会 1987 『推定東山道一群馬町中泉・福島・菅谷地区を中心とする遺構確認調査報告―』

1883 「上野国群馬郡元総社村」『上野国群馬郡村誌』 6 群馬県文化事業振興会

```
日本道路公団・ 脚群馬県埋蔵文化財調査事業団 2001 『舞台遺跡(1) 奈良・平安時代編』
  文化庁文化財部記念物課編 2010 『発掘調査のてびきー集落遺跡発掘編―』
  文化庁文化財部記念物課編 2013 『発掘調査のてびきー各種遺跡調査編―』
            前橋市 1973 『前橋市史』 2 前橋市史編さん委員会
      前橋市教育委員会 2013 『推定上野国府~平成23年度調查報告~』上野国府等範囲内容確認調查報告書 I
      前橋市教育委員会 2013 『推定上野国府~平成24年度調査報告~』上野国府等範囲内容確認調査報告書II
                    『推定上野国府~平成25年度調査報告~』上野国府等範囲内容確認調査報告書Ⅲ
      前橋市教育委員会 2015
      前橋市教育委員会 2016
                    『推定上野国府~平成26年度調査報告~』上野国府等範囲内容確認調査報告書IV
      前橋市教育委員会 2017 『推定上野国府~平成27年度調查報告~』上野国府等範囲内容確認調查報告書V
      前橋市教育委員会 2018 『推定上野国府~平成28年度調査報告~』上野国府等範囲内容確認調査報告書VI
      前橋市教育委員会 2013
                    『元総社蒼海遺跡群(44)・元総社蒼海遺跡群(45)』
      前橋市教育委員会 2015 『元総社蒼海遺跡群 (91)、元総社蒼海遺跡群 (95)、元総社蒼海遺跡群 (102)』
      前橋市教育委員会 2014 『元総社蒼海遺跡群(57)、元総社蒼海遺跡群(58)、元総社蒼海遺跡群(59)』
      前橋市教育委員会 2016
                    『元総社蒼海遺跡群 (65)』
      前橋市教育委員会 2016 『元総社蒼海遺跡群 (103)』
      前橋市教育委員会 2017 『元総社蒼海遺跡群 (124)』
      前橋市教育委員会 2018 『元総社蒼海遺跡群 (126)』
 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1988
                    『元総社明神遺跡VI』
 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1990
                    『元総社明神遺跡VII』
 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1991
                    『元総社明神遺跡IX』
 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 2000
                    『元総社宅地遺跡・上野国分尼寺寺域確認調査Ⅱ』
 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 2008
                    『元総社蒼海遺跡群(14)、元総社蒼海遺跡群(19)』
前橋市埋蔵文化財発掘調査団 2009
                    『元総社蒼海遺跡群 (21)』
```

前橋市埋蔵文化財発掘調査団 2009 『元総社蒼海遺跡群 (21)』 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 2009 『元総社蒼海遺跡群 (23)』 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 2010 『元総社蒼海遺跡群 (29)』 前橋市立元総社小学校 2013 『創立140周年記念誌』

> 松島榮治 1986 「元総社小校庭遺跡」『群馬県史』資料編2 群馬県 山崎 一 1978 『群馬県古城塁址の研究 上巻』群馬県文化事業振興会

山田真一 1999 「信濃における須恵器成産の展開と窯構造」『須恵器窯の技術と系譜―豊科、信濃、そして 日本列島―』窯跡研究会第2回シンポジウム発表要旨 窯跡研究会

写 真 図 版



1 50トレンチ全景(南から)



4 50トレンチ3号住居跡全景(西から)



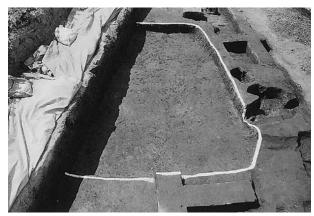
6 50トレンチ5号住居跡全景(北から)



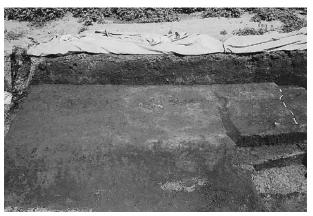
2 50トレンチ1号住居跡全景(東から)



3 50トレンチ2号住居跡全景(北から)



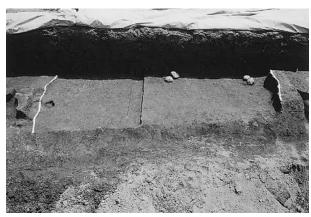
5 50トレンチ4号住居跡全景(北から)



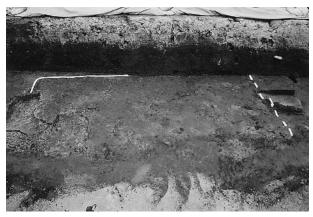
7 50トレンチ9号住居跡全景(西から)



1 50トレンチ10号住居跡全景(北から)



2 50トレンチ11号住居跡全景(西から)



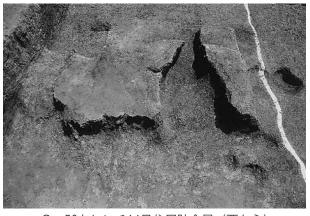
3 50トレンチ12号住居跡全景(西から)



4 50トレンチ12号住居跡焼土検出状態(西から)



5 50トレンチ13号住居跡全景(南から)



6 50トレンチ14号住居跡全景(西から)



7 50トレンチ15号住居跡全景(西から)



1 50トレンチ16号住居跡全景(西から)



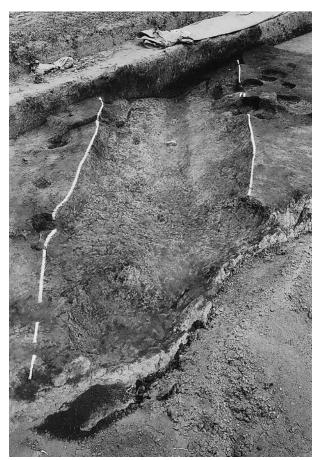
2 50トレンチ17号住居跡全景(西から)



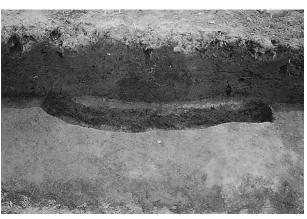
3 50トレンチ19号・20号住居跡全景(西から)



4 50トレンチ1号溝跡全景(東から)



5 50トレンチ2号溝跡全景(西から)



6 50トレンチ3号溝跡全景(西から)



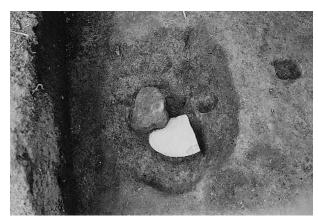
1 50トレンチ 1 号土坑全景(南から)



2 50トレンチ2号土坑全景(北から)



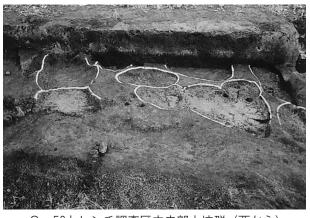
3 50トレンチ11号土坑全景(北から)



4 50トレンチ25号土坑全景(西から)



5 50トレンチ26号土坑底部 (西から)



6 50トレンチ調査区中央部土坑群(西から)



7 50トレンチ中世ピット集中(南から)



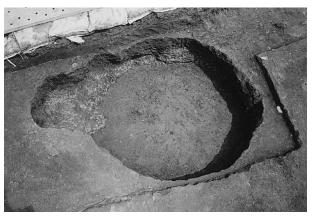
8 50トレンチ5号住居跡付近ピット群(北西から)



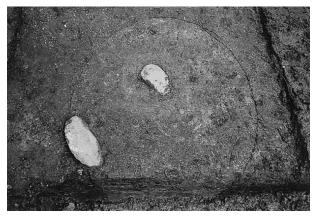
1 51トレンチ全景(東から)



4 51トレンチ6号掘立柱建物跡P4全景(東から)



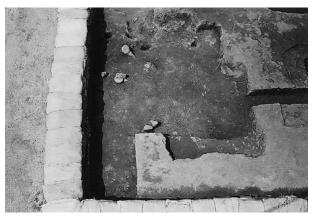
6 51トレンチ1号井戸跡全景(南西から)



2 51トレンチ6号掘立柱建物跡P1検出状態(南から)



3 51トレンチ6号掘立柱建物跡 P2·P3全景(南東から)



5 51トレンチ1号住居跡全景(南から)

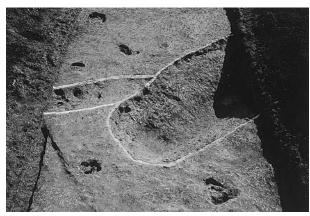


7 51トレンチ1号土坑全景(南から)





3 52トレンチ全景(北西から)



4 52トレンチ1号・2号溝跡全景(北から)



2 51トレンチ6号溝跡全景(南西から)



5 52トレンチ3号溝跡全景(南西から)



1 52トレンチ遺構完掘状態(北から)



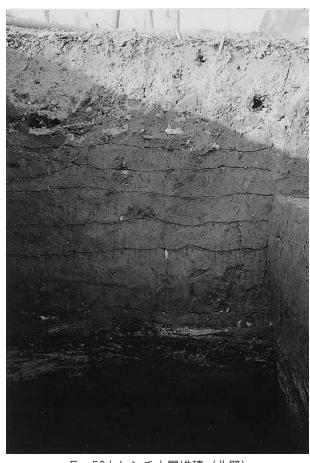
2 52トレンチピット列全景(東から)



3 53トレンチ付近遠景(東から)



4 53トレンチ全景(北から)



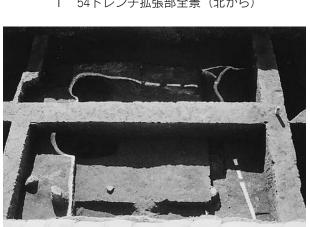
5 53トレンチ土層堆積(北壁)



6 54トレンチ全景(東から)



1 54トレンチ拡張部全景(北から)



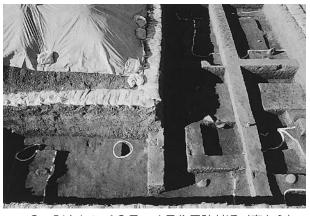
4 54トレンチ5号住居跡全景(北から)



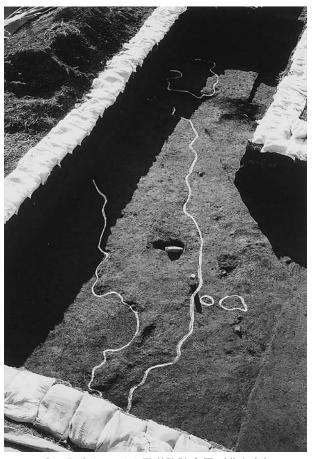
5 54トレンチ7号住居跡全景(北から)



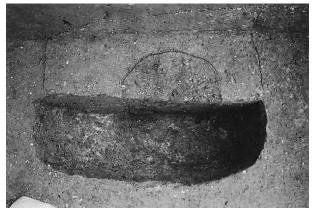
2 54トレンチ1号・2号住居跡全景(南から)



3 54トレンチ3号・4号住居跡付近(東から)



6 54トレンチ1号道路跡全景(北から)



1 54トレンチ1号掘立柱建物跡P₁全景(西から)



2 54トレンチピット列 P_3 全景(南から)



3 54トレンチ1号溝跡全景(北から)



4 54トレンチ1号ピット礫検出状態(北から)



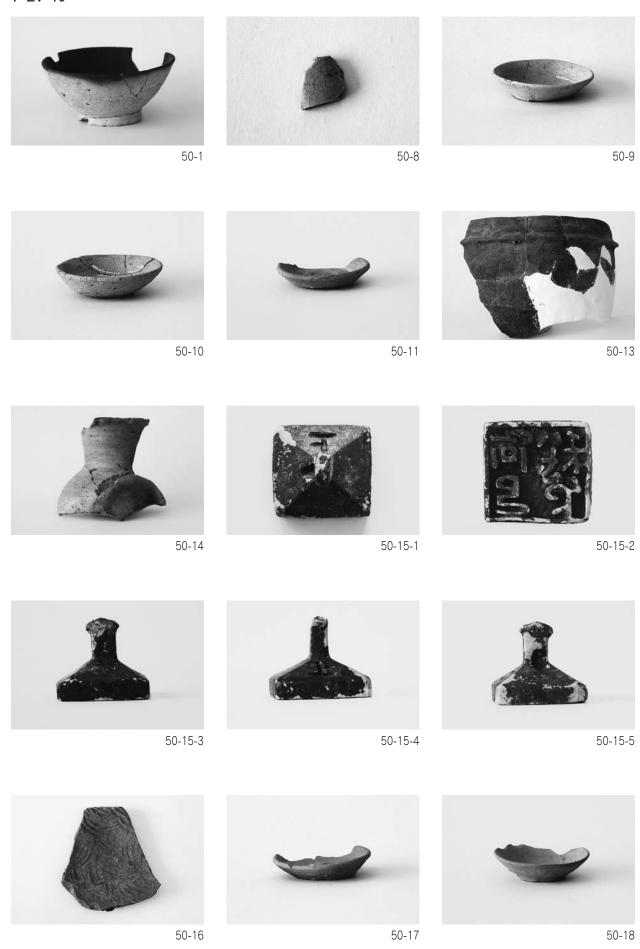
5 54トレンチ8号・9号土坑全景(東から)



6 54トレンチ8号・9号土坑土層(北東から)



7 調査風景 (52トレンチ)



















54-55 54-57 54-63







54-59-1 54-59-2 54-59-3



54-64

抄 録

フリガナ	スイテイコウズケコクフ						
書名	推定上野国府						
副 書 名	平成29年度発掘調査報告書						
シ リ ー ズ 名 上野国府等範囲内容確認調査報告書							
シリーズ番号 7							
編著者名	阿久澤智和・村越純子						
編集機関	前橋市教育委員会						
編集機関所在地 〒371-0853 群馬県前橋市総社町三丁目11-4							
発行年月日	20190322						

フリガナ	フリガナ	コ	ード	位	置	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所 在 地	市町村	遺跡番号	北緯	東経	神宜期 1		神 国原囚
スイテイコウズケコク: 推定上野国府	前橋市元総社 新 一 丁 目33- 11ほか	10201	29 A 147	36°38′98″ 36°38′23″	139°03′36″ \(\)	20170601 \$ 20180115	385 m²	範囲内容確認調査

所収遺跡名	種別	時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
	集落	古墳時代	住居跡1	土師器	
推定上野国府	官衙、集落 道路遺構	奈良、平安時代	住居跡28、掘立柱建 物跡2、溝跡12、道 路跡1、落ち込み 1、井戸跡1、土 坑、ピット	土師器、須恵器、 灰釉陶器、緑釉陶 器、鉄製品、銅製 品	元総社小学校の校庭 でさらに1棟の掘立 柱建物跡を追加で確 認したほか、西へ約 400mの地点でも掘 立柱建物跡の柱穴と
	城館、集落	中世・近世	溝跡3、井戸跡1、 土坑、ピット、道路 跡?	石臼、陶磁器	考えられる遺構を確認。

上野国府等範囲内容確認調査報告書VII

推定上野国府 平成29年度調查報告

2019年3月19日 印刷 2019年3月22日 発行

編集·発行/前橋市教育委員会文化財保護課 印刷/朝日印刷工業株式会社